て行つたのだらう。さればこそ、息のあるうちに神をも見たのだらう。

杉原が、「やつてることが實を結ぶものやらどうやらわからぬし、實を結んだところですぐにまたもとのもくあみになつてしまふやうなことがわかつてゐることばつかりだからなあ。こんな無駄な勞力を積んでは崩し崩しては積みしたところでどうなることかと思ふんだ。」と、自信なく疑ひ、よろめいてゐる時に、湧谷は、やがては立派な實を結ぶことを露ほどもうたがはず、どんなに崩されたところで無駄な勞力だなどとは決して思はぬのだが、さういふ風に動かぬ彼の支へのもとが、宗教の心であると知つた時に杉原はおそれたのであつた。やがて立派な實を結ぶかどうか、無駄な勞力であるかないか、杉原は斷定的に言ふべき言葉を持たぬ。何の證明をも持たぬ。實は結ぶ、無駄な勞力ではないと信じてゐるものをたしかに覆へしうるやうな言葉は持たぬ。さうだとすればさう堅く信じてゐるものの方が強いにきまつてゐる。遠いさきの結果についてはある大いなるものの力に任せてうたがはず、安んじてゐるものは、今の、日々の現實においても強いにきまつてゐる。

そんな、君等の信じてゐる遠いさきの結果などはあてにはならぬ、と杉原がもし言つてみたとしたところで、では今の彼に、それに對抗すべき確信のもとがあるだらうか？　それがなくて言ふ言葉は弱く、空虛にしかひびかぬだらう。言葉ばかりではなく、彼が一番重んじてゐるやうに見える、日々の、現實の行動においても弱いだらう。

杉原は世間の動きを氣にしてゐる。外からの力が、自分の仕事の結果を無にしてゆくことを氣にしてゐる。政治といふことをつねに言つてゐる。

湧谷は杉原の氣にしてゐることを氣にしてゐない。政治といふことも餘りいはない。仕事の形はほろびても無になつたのではない。やがて時が來れば生き返ると信じてゐるのだから始末に終へぬしぶとさと言へよう。

杉原はつひには信じないわけにはいかなかつた。このやうに直ぐな心を持ち、このやうに何等かの信仰の上に安住し得るものだけが、村の人々のなかで根をおろして働き得るのではないだらうかと。そのほかのものたちは見透しを持つことができず、腰は据らず、その日ぐらしの氣持である。

そして杉原自身もその日ぐらしの氣持である。

しかし杉原が、そのまま湧谷であることはできない。また彼は湧谷をどのやうに認めたとしても、湧谷になることは欲しない。迷ひ續けねばならぬものなら迷ひ續けて行くほかはない。

彼がそんな風な思ひにとらはれてゐる間にも日々は寒くなりつつあつた。凶作の悲慘は迫つて來てゐた。そんな思ひのなかで右往左往してゐるのさへ、遊びに見えるやうな現實だつた。

二十三

ある夜、杉原はこの冬の對策の協議のためにとなり部落へ呼ばれて行つて、夜もよほど更けてから歸つて來た。自轉車に故障ができ、なほしにやつてあつたので、行きも歸りも歩かなければならなかつた。行く時濡れてゐた道は歸りにはかたく凍つてゐた。近道をと思つて澤のなかをあるいて來た。月は出てゐたが暗がりに足をとられて、三度ほど水たまりによろけた。さやさやと風に鳴つてゐる茅も、この秋は、丈もみじかく、莖も細いのである。

澤を出たところの田が彼の眼の前にあつた。彼はしばらく立つて眺めてゐた。あたりの田も畑も止がむきだしになつてゐる。切株だけが黒く見える。そのなかにあつて、そこの二枚の田だけが、今になつてもまだ刈り取られずにゐる。田區の整理の出來てゐない、扇形にまがりくねつてゐるやうな田であつた。穂をつかんでみたならば、籾がうつろで皮がくつついてしまつてゐるにちがひないやうな稻が、自分の重みで首を垂れて見せることも知らずに、いたづらに風に吹かれて立つてゐるのであつた。

「誰のだらう?」

他部落のものとてすぐには思ひだせなかつた。しかしすぐにそれと思ひあたる一つの顔がうかんで來た。それはたつた今別れて來た人々のなかにあつた顔だ。相談の席でもわからないことを言つて人々をなやましたやうなおろかな百姓の顔だ。霙が降り、もう間もなく雪も來ようとしてゐる。しかもまだ彼は稻を刈り取ることができずにゐる。諦め切れずにゐる。いよいよ雪の下に

なるといふ時まで、一日でも長くさうやつておいたならば、あるひは貢のふくらんで來る時が來ようかとの心を棄て切ることができないでゐる。さういふ百姓の心が、單におろかとだけは言つてしまへぬものとして杉原の心につよくこたへたのであつた。

濡れた足から冷えがつうんと腹にまでしみとほつた。總身に水のやうなものを感じて彼はふるへた。

「乾いた手ぬぐひを持つて來てくれないか……足がびしよびしよなんだ。」と、家へ着いて、上り框に腰を下ろした時に杉原は言つた。「澤を抜けて來たんでね、水たまりへ落つこちたんだ。」

ぬいだ足袋をしぼるとたらたらと水がたつた。ノブが持つて來た手ぬぐひで、キュッキュッと赤くなるほど強く足をふいた。

「細谷から子供が使ひに來ました。」と、ノブが言つた。

「先日の話の會は、二十五日にするとかつて。」

ノブがあたたかにしてつくつておいてくれた炬燵に深く手をつつこみ、背なかをまるめてしばらくあたつた。炬燵の上にうつぶした顔をそのまま横に向けて、茶を入れにかかつてゐるノブに、今夜出かけて行つたさきでのことを話した。炬燵ぶとんの焦げたやうなにほひが親しみぶかいあたたかさである。やがて茶を入れたノブもそばへ來た。盆の上にはゆでた薯に粗鹽(あらしほ)が添へてあつた。薯は冷えてしまつてゐた。こんな薯を、こんな夜食にして食ふことのできぬ部落も今年は多

いのだ。現に今夜行つた部落などでも、百姓の夜の集りには何かかにか食ふものがでるしきたりなのにこの秋はそれどころではなく、みんな寂しさうな、寒さうな顔をしてゐた。

「大の澤あたりなんぞでは、今年の稲藁は、編んだり綯つたりするものどころか、乳牛の飼料にさへならないつて言ふよ。毎年乳屋に藁を賣つてゐたんだが、今年はことわられたさうだ。」

「あそこいらは三分作ぐらゐ？」

「一番いいところで四分作、ひどいところでは皆無作なんだ。」

「こつちぢや、今年の藁だつてそんなことはありませんよ。」

ノブはこの頃は、朝は暗いうちから、夜も暗くなるまで、部落の共同作業場へ出かけて行つて、繩を綯つたり、莚や炭俵を編んだりしてゐる。

べつに山をへだててゐるといふわけでもない、ついとなりの部落ではないか。しかもこちらは開墾後年月もなほ淺いところだ。なみな田や畑になるかどうかといふことも一時は疑はれたところだ。小池のつくりだした品種の強さといふものは、今度の經驗を通して確認されたと言つていい。思へば思ふほど、この無名の青年の功績は、劃期的なものである。

「北海道ではよく出來た年でも、藁は副業の材料にはならないつて言はれてゐましたからね。寒いところではさうなんですね。この頃はどうかしら。」

「小池の耐寒早稲は、背は低いけれど、莖はじつにしつかりしてゐるからねえ。倒伏を避けるた

めに莖の弱い稲の丈を短くした、とでもいふやうな品種とはまるきりちがふからね。」

北海道の話がでて、兄妹の思ひは彼等の郷里に及んだ。そこにゐる母と兄との上に思ひ及んだ。最近に來たくにからの手紙を中心にして彼等の話は遠くむかしにまでもさかのぼつた。兄妹がそのやうにして靜かに語り合ふといふ機會もさうしばしばあることではなかつた。それほど彼等は何かに追ひ立てられるやうにして暮してゐた。朝は、杉原が起きて來ると、もうノブは家にはゐなかつた。ノブは兄の朝の膳をちやんとつくり、その上に布巾をかけて出かけて行つてゐた。爐には木の根つこがくばつてゐて、ぶすぶすいぶつてゐた。青い煙があがり、ちよろちよろと赤い舌のやうな火が燃えてゐた。その煙が眼にはいつたとて、もうべつに涙がにじむわけでもない杉原である。北海道式にやるつもりでストーブを取りつけたのだつたが、今年寒くなつてから取り出してみると、横腹の鐵板に穴があいてゐた。燃えてゐる木の根つこの上には、二人ぐらしにしては大きな鍋がかかつてゐる。味噌汁でも醤油汁でもない鹽汁である。鮭の頭や菜つぱやにんじんや大根葉のやうな野菜の屑がごつたまぜに煮込んである。殘り少なになるとまたそこへ有り合せのものが投げ込まれて、何日間でもさうして煮られてゐる。さういふ食ひものには子供の時から慣れて育つた。すすけた鍋を下げてゐる自在鉤の太竹もやうやく赤つぽいいい色になつて來てゐた。

二十四

冷えて夜道を歩いて來たことが祟つたか、その夜疲れて眠つた杉原は、翌朝は熱を發して、頭を上げることができなかつた。風邪の熱に日頃の疲れが引き出されでもしたやうに、食ふものも食はずにただ眠りをのみむさぼつた。眼をさましてみた時、彼は自分のからだが板のやうにぺしやんこになつてゐるのを感じた。

とりとめなくぼやけた感覺を、新鮮な、何か揮發性のものに似たにほひが目ざめさせた。晉がしてノブが湯のみを盆にのせてはいつて來た。

ノブが藥草を煮るといつてゐたのを、杉原は思ひだした。赤黑く煮つまつた汁を彼はのんだ。強いくすりのにほひのなかに、かすかに土のにほひがしてゐた。

「もうちよつとしたら、お粥を持つて來ますから。」

額にしばらく手をあててみて、さう言つて、ノブは出て行つた。

彼は激しく咳き入つた。寢ながら紙を取つて吐いてみると、錆いろの痰であつた。「肺炎かな……」さう思ひながらその不安に向つて鋭く意志を緊張させるでもなかつた。やがて粥が來てそれを食つて了ふとまたも眠りに落ちて行つた。からだの節々の痛さ、だるさのなかにのめりこむやうにして眠りこけて行つた。

二日目も三日目もおなじやうにして過ぎた。五日目の朝、彼は、今はじめて我に歸つた人のやうな面持で、ノブに今日は何日だつたか、といふことを訊いた。そして仕事着のかくしから、手帖と鉛筆とを持つて來させた。それを持つて來たノブは、檢溫器を兄の脇の下にはさませた。やがてそれを取り出してすかして見ると、ホツとした顏になつて、水銀を振る手にも力がはいつて見えた。

杉原ははじめて口をそそいだり、かたくしぼつた手ぬぐひで顏や手をふいたりした。

ノブが立つて行つて、一枚の紙を持つて來た。それは表だつた。彼が寢込んで以來の體溫が、ちやんとした表になつてあらはれてゐた。カーブしてゐるその線の上に、みとりしてゐた妹の、喜びも不安もそのままあらはれてゐるやうだつた。

「なんだ、こんなに三度々々きちんと檢溫したのかね？　おれは知らなかつたよ。」

「あれ……」と、ノブは笑つた。「お醫者さんを呼びませうかつていふと、いらないつて、とつても强く言ふんだから。」

「そいつはおぼえてる……何しろただ無性に眠かつたんだ。」と、杉原も笑つた。

杉原は持つて來させた手帖をひろげるでもなく、考へに沈んだ。手帖のなかの心おぼえや數字を見ようといふのもまだおくくふな心だつた。しかし、今度の部落の集りのことは彼の頭にあつた。熱にうかされてゐた間も、その集りで語られねばならぬ事柄が、きれぎれにみだれとんだ。

小作料のこととか税金のこととか飯米のこととか種籾のこととか……思へば思ふほど、實に、この秋から冬、冬から春へかけて無事に過すといふことは容易ならぬことであつた。部落の存亡のわかれめとさへ思はれた。しかし彼の考へはまた、この部落だけ、といふところにとどまることもできなかつた。他部落のこと、この村全體のこと、見てあるいた村々のこと、さらにまだ見たことのない多くの村々へまで思ひは遠く走るのだつた。

午後に、彼はまたとろとろとまどろんだ。どのくらゐ疲れてゐるものかわからなかつた。秋口に暗いところで何日間か過して來た時の疲れが、今になつて出て來たかとも思はれた。どのくらゐかたつて眼をさました時、あたりはもう薄暗くなつてゐた。

「ノブ……ノブ……」と、彼は呼んだ。返事はなかつた。家うちはしんとしてゐた。

彼は急に何ともいへぬ寂しさを感じた。兄妹ただ二人といふ感じが、實に思ひもかけぬ強さで胸に來た。一瞬のうちに妹の生身の肉體が、その全重量をもつて心に感じられた。

ノブは共同作業場へ働きに出て行つたのだつた。兄の病氣が危險期を去つたと思ふと同時に、彼女は、自分等の一家が、共同組合の一員として組合に對して果さねばならぬ義務について思ひ至つたのだつた。それを思ふと彼女は一刻もじつとしてゐることができなかつた。安らかな兄の寢息を聞いて、この間に、たとひ一時間でも二時間でも、と走るやうにして行つたのだつた。

ノブがその小さな心を八方にくばつて生きてゐるといふことを日頃から杉原は感じてゐた。そ

れは時としてつらいほどのことであつた。ノブは共同組合内の兄の特殊な地位を知つてゐた。一面から言つて杉原は世話役であるにちがひはない。しかしそのことは、組合の一員としてなさねばならぬ日常の作業からまぬかれていいといふことにはならない。組合の人々がよく理解してくれるとしてもそれにあまえてはならない。權利ででもあるかのやうな顏をしてはならない。ましてやよくわかつてくれる人々ばかりとはいへず、杉原がよく外へ出てあるくといふことについて陰では何かかにかいふ人もあるのだ。出あるくといふのも自分たちのためだと知つてゐてもさういふことを言つたりするのが人の常だ。ほんたうにわからないで、杉原だけが何かうまいことをやつてゐるといふ風に思つて言つてゐるものも二人や三人はあるかも知れぬ。

率直にいふとこの共同組合には心の素直な、思ひやりの深い人々ばかりとは言へなかつた。むしろその反對の人々の方が多く感じられるとさへ言へた。鄕里を棄てて開墾地に集つて來なければならなかつたといふ、彼等の過去がそこに寒々とした影をひいてゐるのかも知れぬ。いや、過去のみではない、現在とてもこの一團は周圍の古い部落からは特殊な眼をもつて眺められてゐる。近頃は入植當時ほどではないとしてまださうである。さうであればあるほど、この一團としては強くかたまりさうなものである。さうして外へあたりさうなものである。外の人間へ對しては白い齒を剝いても內輪の人間どうしはあたたかい心をもつて強く結ばれさうなものである。さう思はれるのが自然だが事實はさう簡單ではなかつた。共同組合の組織をとる、といふことだつて曲

折なしには行はれなかつたことだ。その後も問題は起つてゐる。共同的ないとなみを餘り喜ばぬのは農民の一般的な性情だといふだけではない。さういふ性情を強めるもの、他を排し、小さく狹く自分の殼のなかに閉ぢこもることで頑固に自分を守らうとする傾向に追ひやるものは、彼等の過去のなかにも、現在おかれてゐる狀態のなかにもあつた。

人々が許す許さぬに關係なく、杉原は、勞働生活においてもどんな特權者であることも欲しなかつた。出來るだけ多くの時間人々と共にあらうとした。しかし實際の姿としてはより多く所謂事務の人としてあらはれてゐる。ひと度出來上つた生活の形式は彼の意志からさへ獨立したもののやうに廻轉しつづける。

春の畑起しにも田植ゑにも、夏の麥刈りにも薯掘りにも杉原は畑へ出た。組合の、又は組合外の、外の用事をすまして歸つて來ると、歸りの足でそのまま畑へ行つて、おそくなつてすまぬ、といふことを言つて、共同作業の人々のなかへはいつて行つた。一日のうちたとへ一時間でも顏を出さなければ氣がすまなかつた。出さきで思ひのほかに手間どつて明るいうちに歸れる筈であつたものが日暮れになるやうな時には氣がせいた。闇の低く迫つてゐる畑へ行く。人々は歸りかけてゐる。杉原のために殘つてゐることといへば、農具を取り片づけたり、馬を引いて行つて共同畜舍につないだりするくらゐのものだ。一日、激しく働きつづけた人々は、疲れから不機嫌になつて言葉數も少ない。そんな時には杉原はとくに組合内の自分について矛盾を感じた。

一日ぢゆう野良で働きつづけるやうな時には、彼は自分の筋骨がいかに柔だかを感じなければならなかつた。人々との差異を今さらのやうに感じた。この秋、町から歸つて來た時には、まだ刈取りが殘つてゐた。疲れた身を休める間もなく、彼は人々に伍して鎌をひつさげて野良へ立つた。が、次の日は足腰がいたんで起き上ることができなかつた。だから言はんこつちやないのに、と、用事を持つて來た細谷は、同情とも、輕侮ともつかぬやうな眼つきで見た。

かういふ兄を強く感じてゐるのがノブなのである。彼女の日常はこの兄の分をも自分が引つかぶつて、といふ思ひに盡きてゐるといつていい。この希求がかよわい女手にはあまるほどの働きをさせてゐる。彼女は實に働く。與へられた仕事をよく果すといふ以上に積極的である。たとへば、この春、組合では新たに馬を二頭買つた。共同畜舍は狹くて、建增ししなければこの二頭を收容することはできない。建增しを機會にもう少ししつかりした畜舍を作らうといふことになつたが、どつちにしてもこの二頭は組合員の誰かが當分預らねばならない。その話が出た時ノブは自ら乞うてそのうちの一頭を引いて歸つた。やがて共同畜舍に返す日まで、部落の財産中でも最も大きな、だいじな馬を責任をもつて預るといふことが、彼女に喜びと緊張とを與へるのである。朝は野良へ引いて行き、夕べにはまた引いて歸つた。實に細心な注意を拂つた。自分が預つた時にくらべて、瘠せらせてはならぬ、毛の色艶がわるくなるやうなことがあつてはならぬ、と思ふのであつた。

二十五

妹をかういふ生活へ引き入れた、といふことについても杉原は振り返つてみずにはゐられない。

人からはただの流浪としか思へぬ十年の後に、杉原は長く音信もせずにゐた郷里の家へ歸つて來た。くたびれた身が最後に落ち着くところはやはりここかといふやうに人々は見た。父は死んで、母と兄夫婦と妹とが家にゐた。十年の間に郷里の町の姿も變つてゐた。もともと北海道といふ、全體として現在さかんに動きつつある所だけに變り方も早かつた。彼の家のある田舍は、また一段と町に食ひ込まれてゐた。新しく道路がついたりして土地は減らされたが、それでもまだ昔の百姓家といくらかの土地とは持ちこたへられてゐた。兄はしかし、もう百姓はしてゐなかつた。彼は小さなつとめ人であつた。女手ばかり三人、母と兄嫁とノブとで、時には男手も雇つて、どうにも自分たちだけが食ふくらゐのものはわづかばかりの土地から取つてゐた。今はつとめ人の妻である兄嫁も百姓の家から來たものなら、家政女學校を出てゐるノブも今時の若い娘らしくもなく、百姓仕事には好きで身を入れた。

杉原が何を考へてゐるものか、家の者にもよくはわからなかつた。たくさんの經驗をし、夢を抱くことも裏切られることも數を重ねて來たやうな彼のことだから、今はただ休息を求めてゐるのであらう。そしてやがて小さな安住を生れた土地に求めるであらう、さう思はれた。今はただ

そつと見まもつてゐるのがいい、さう思つて家の者たちはあたたかな眼で見てゐるだけで、進んで言ひ出しはしなかつたが、手を差し伸ばす時をそれとなく待つてゐた。が、さういふ彼等の前に突然杉原が持ち出した話はまことに意外な感じのするものであつた。

川島の家は北海道に土地や鑛山を持ち、事業會社にも多く關係してゐるもので、本家と分家とあつたが、本家の方はこの頃若い主人の代に代つた。若い主人といつても四十は越してゐて、農科大學を出てのちアメリカの大學に學んだこともあるといふ。その家の番頭である原口は杉原の家とは懇意であつた。ある時その原口が杉原に川島が數年前手に入れた東北地方の土地の話をした。水田と畑と原野と山林がある。惠まれぬ土地なので小作も少ししか入つてゐない。前の地主から引きついだまま、今までそのままにしておいたが、去年から積極的に土地開發に乘り出し、新しく移民を入れてゐる。まだはいる餘地がある、といふのである。家の旦那も物好きな人だ、もとより欲しくて手に入れたといふ土地ではないが、あんなところはただおいといて稅金を拂つた方がましだらう。なまじつか土地開發なんてことを言ひだしたらどんなに金を食ふか知れやしないよ。何しろうちの旦那はなんでも向うを見て來た眼で、その流儀でやらかさうとするんだから、と言つて、原口はアメリカ歸りの善良な紳士を嗤つた。しかし、その話を聞いた時、杉原の腹はきまつたのである。

彼は原口を通じて申し出た。そして川島の農場にはいることにきまつた。

新しい道に向はうとして準備してゐる杉原の姿は寂しさうに見えた。しかしまたしんとした力も感じられた。さういふ杉原を見てゐたノブが、ある晩、母も二人の兄もゐるところで言つたのである。

「私も兄さんと一緒に行きます。」

誰も、とやかく言ふ餘地のない決意に彼女は滿ちてゐた。

今かうして病んで寢てゐると、その晩の妹の顏や聲音がつい昨日のもののやうに見えもし聞えもする。しかしもう足かけ四年經つてゐる。過ぎた月日は何よりも若い彼女の肉體の變化の上にあとをとどめてゐる。男のやうな眞直ぐな姿勢で裸馬を乘り廻したりするやうな彼女だ。苛酷な勞働で太くなつた首や腰のあたりにはかなしさがある。

自分が今後たどる道のためには、どんな犧牲も求めてはならぬと意を決した。しかし事實は肉親の一人を自分が氣づいてゐる以上のむごたらしさにおいてゐるのではないか。

音がしてノブが歸つて來たらしい。走つて來たらしい足音である。上つて來て、戸をあけると、

「工合はどうですか。」と、言つてはずむ息をおさへてゐた。

「うん。」と言つて、杉原は、たつた今眼が覺めたといふやうに、床のなかのからだをのばした。

「すぐごはんにします。」

さう言つて去ると、やがて障子の向うがぽーつと赤くなつてゐろりに豆殼のはじける音がした。

秋の忙しい期間が過ぎてからは、共同炊事もやめになつてゐるのである。

二十六

部落總會の日には、杉原もまだすつかりなほりきらぬからだをはげまして出席した。人々の集りはよかつた。場所はいつものやうに細谷の家であつた。小池も來てくれた。毎日の仕事の上で顏を合はしてゐる人々ではあつても、かういふ風にして集るといふことはまた格別のことである。秋の收穫期をすぎてから、これは最初の集りである。それは今年の總決算の意味を持つてゐる。また祝ひでもある。さらに又明年度への對策のための集りでもある。

杉原が行つた時には、廣い爐邊にはもう十人に餘る人々が集つてゐた。彼が人々に挨拶して坐る間にもあとからあとからと人は續いた。爐をかこんでゐた人々は座を開いてあとから來る人を迎ひ入れた。さう寒い夜ではなかつたが、人間のぬくみだけでもあたたかかつた。

臺所には女たちが立ち働いてゐた。この家の女たちのほかに手傳ひに來てゐるものの姿も見えた。夜食には蕎麥が打たれてゐた。汁の煮えるいいにほひが流れてゐた。女たちの笑ひ聲が起つた。

「部落の集りといへばいつも細谷さんとこの厄介になる。來春は是非、部落の集會場を建てたいものだね。」と、高橋が細谷の方を顧みて言つた。

「いや、わしのことなら何ともないが……しかし部落集會場は欲しいものだね。」
「われわれの家を建ててもらふ時に、集會場も一つ作つてもらへやよかつたんだ。」
「氣がつかなかつたんだ……あの時組んだ豫算のなかへ入れときやよかつたんだが。」
この農場へ集つたのは、北海道と、東北の各地と越後の人々だつた。なかにはほとんど裸身一つで來たものもあつた。川島は彼等のために住宅を建てた。農業資金を貸し與へた。馬を買つて與へた。後に共同經營の形をとるやうになつてからは、畜舎や堆肥小屋の建築資金も出した。
「今から話したつていいだらうか。」
「さうはいかない、……さうなんでもかんでもといふ風には。はじめ三年間といふ約束でいろいろと補助してもらつたんだからね。」と、細谷が言つた。
「補助々々つていふけれど、あらかたは借金になつてるんだからね。」と、山本が薄ら笑ひした。
「まあ、名目はさうだが……」と、細谷は言葉を濁した。
「返さないつもりかね。」と、高橋が言つたので大きな笑ひ聲が起つた。
「どうせ建ててもらふなら、少し立派な部落會館の方がよかつたね。共同作業場のやうなものへは、縣から相當な補助金が下りるんだから。」
「しかし、そりやお前この頃のことだらう。部落會館なんぞはなくつたつてすむが、作業場ははじめつからいるんだから。」

さういふ不急の事柄から話がはじまるといふところにも餘裕があるといへば言へた。雜談はそんなところから當然今年の作柄のことに移つて行つた。自分たち自身のことは話し盡してゐるといふこともあらう、他部落のことや他村のことが主として熱心に語られた。山間部のどこは皆無作であるとか、どこは三分作、どこは四分作、どこはこの秋から食ふものに事缺いて、青稗を食つたといふことだ、どこでは、學校の子供が稗團子どころではない、どんぐりを袋へ入れて晝の辨當に持つて行つてるさうだ、といふやうなことである。新聞ももうそろそろ煽情的な筆で書き出してゐた頃だ。噂は噂を生んでゐたが、決して誇張されたものとのみ思へぬ實情である。いくらか歩いてみた村々の姿からも杉原はそれを察することができる。水害地の慘狀はまだ眼にある。さうして水の害こそなけれ、一層ひどい冷害を受けた山間部の實情がどういふものかといふことは想像することができる。
蕨や山百合や山の芋やいけまやかたくごやかうほねや野人參やしろねなどの根を掘つたり、楢の實や栃の實を拾つたりするといふやうなことは、この部落でも女や子供の仕事としてやつてゐた。ほかの部落よりももつと早くやつてゐた。それは杉原などが主唱してやらせてゐたのだ。今頃の季節となつてはもはや食へる野草は根ばかりとなる。しかしそれ以前、嫩芽や葉や莖についても、杉原がさういふ救荒食物については注意し、文献などを調べ、共同炊事の献立のなかに盛り込んだといふことはさきに言つた。いろいろな根や木の實についても、どうして食つたらいい

かといふことを、單に本で調べるだけではない。ノブをして實際に作らしめてもゐるのである。彼のかういふ經驗はもう去年から積まれてゐる。

この部落でもかういふことをやつてゐる。しかし事情は山間部や水害地が草の根を掘つてゐるといふこととはずゐぶんちがふのだ。向うではもうぎりぎりのところまで追ひやられたあげくのことだ。こちらではまだ一つのそなへにとどまる。採つて來て、乾して、貯へたりしてゐるものもかういふものは食はずにすむだらうと、漠然たる空頼みを心の底に持つてゐる。

この漠然たる空頼みは一體どこから來てゐるだらう？　他村の窮狀について言つたりしてゐる人々の態度にも話し振りにも、杉原はある特徴的なものを感じた。それはなんとなく餘裕のあるものだといふことである。いくらか得意らしく言つてゐるものもある。とも角、振りかからうとしてゐる火の粉は、ひとのものであつてわがものではないといふ安心に住してゐるもののやうである。そしてかういふ安心は彼等のほんたうの實力から來てゐるものだらうか。今年の彼等はたしかに周圍の部落よりは勝つた。ほかの部落が皆無作とか三分作とか言つてゐるときに、ここでは、田によつて出來不出來はあるが、先づ七――八分作といふところで食ひ止めてゐる。餘裕ある態度はおもにここから來てゐる。今まで自分たちを冷眼視してゐたものに向つてざまあ見ろと言ひたくもなる。しかしそればかりではない。彼等はいざといふ時には尻を持つてゆくところがあると、言はず語らずのうちに互ひに了解し合つてゐるのだ。それはどこへ。それは地主へであ

る。身ぐるみ脱がなければならなかつた苛烈な經驗に身をさらしたこともある鹽辛い人々は、アメリカ歸りの人のいい地主の人間を一目見た時から見拔いてしまつてゐた。さつきの、一番はじめの會話のなかにも彼等のさういふ氣持はあらはれてゐた。

二十七

みんなが集つたので會ははじまつた。協議事項は進められて行つた。

秋期收穫後のこの會はいはば臨時總會なのである。共同組合の會計年度は、二月にはじまり一月に終ることになつてゐて、年度の終りには定期總會をひらく。定期總會ではその年の成績、收支決算、分配、積立、組合財産の現狀等について報告する。それから又、それにもとづいて新しい年はどうやつて行くかについて協議する。しかし今日のこの會ではそれらの詳細にはわたらない。春から秋までの收穫の實際、農業收入の實際について、報告することが主たる目的である。そしてそれはまた、地主へ納入すべきものについて、考へるためなのである。

先づ、細谷が報告をはじめた。今年の作付總面積、三十六町四段五畝歩、そのうち畑十二町六段二畝歩、さらにそのうちの內譯、麥がいくら、稗がいくら、大小豆がいくら、玉蜀黍がいくら、馬鈴薯がいくらといふやうに作付段別を述べ、水田と畑の各々についてその收穫量を述べた。水稻は普通作にくらべてほぼ二割から二割五分の減收、大麥は二割五分、小麥は二割、馬鈴薯、粟、

稗はそれぞれ幾らの減收といふやうに詳しく述べた。そしてそれらの收穫物の大體の評價額を、内譯と合計とについて述べた。次に支出の方になる。農具積立金、救助積立金、（組合員及び家族の病氣、不作等のために備へて積立てるもの）肥料代、飼料代、畜力損失、農具修繕費、靖鐵代、光熱費、臨時雇入れの人夫賃、稅金、消耗費、雜費、といふやうにそれぞれの項目について詳細に述べた。さてこれらの支出の合計を、さきの總收入から引き去つてそこに殘つたもの、――そのもののなかに地主への小作料と、組合員への分配金とが含まれてゐるわけなのである。

もしこの時、組合員のぎりぎりの生計費を基礎にした分配金を先づ算出し、さきの支出のなかに加へて全體から引き去つたならば、あとに殘るものはどういふことになるか？

またもし、この時、地主への規定の支拂ひ分の方を先に計算し、これを支出のなかへこめて全體から引き去り、その殘るものを見たとしたならばどうだらう？

しかし實際には、計算の手續きはこのやうに行はれてはならぬことになつてゐるのだつた。規定によれば、支出を引き去る以前の、總收穫物を四と六の割合にわけ、前者を地主に納入し、後者を組合の所得とする、といふことになつてゐるのである。

細谷の說明はしかしどつちの道を取つたとしてもいいわけだつた。最初に四割を天引し、組合員へ實際に分配されるものの、非常に小さな額を出して見せてもいいわけだし、それとも、その分配されるものを正常の大きさとして算入し、さう計算して行くと、かの四割に該當すべきもの

が決して四割にはならぬことを明らかにして見せてもいいわけである。

何れにしても細谷の說明の目的はそれで達せられるのである。そして彼は、帳面の數字に見入りながら、その兩方の道から說明した。彼は人々の顏を見まはした。みなわかつたといふ顏つきである。

咳ばらひや、煙管を火鉢のふちにたたく音などが起つた。

そこでちよつと間をおいた細谷は、やがてややあらたまつた調子で、小池への感謝の言葉を述べた。今年、この部落が、ほかにくらべてこのくらゐの被害ですんだのは、冷害を早く豫知して對策を立てたのによるけれども、しかしそれとても小池の耐寒早稻といふものがなかつたならばだめなことである。試驗所の折紙づきで、今日冷害にはもつとも强いとされ一番廣く作られてゐる〇〇號でさへ、この地方では五分作、山間部では三分作、もつとひどいところさへある。小池の耐寒早稻は、一無名靑年の作り出した品種だけに今まで疑はれてゐたが、今年の經驗で、全くその眞價が明かにされた。じつに喜ばしいことだといつて、譽め稱へた。

若い小池は、人々のなかで、日頃君、僕の聞がらでゐるものから、改つてそんな風にほめられ、心持ち顏を赤めたが、しかし嬉しさうに微笑した。そしてうながされるままに、今年の作について彼の見るところを語つた。

今年は融雪期が後れたために、すべての作業が順ぐりにおくれ、植附けも穗孕みもみな一週間

以上おくれた。もしこのことがなかつたならば、もつとわづかな減收ですんだだらう。しかし、我々としては融雪期がおくれたのは仕方がないとして了ふことはできない。來年もおくれるかも知れない。それはしよつちゆうのこととして對策を考へなければならない。それで私は自分のつくつたこの品種の改良の主點を、今後は、出穗期をもう少し早める、といふところにおかうと思つてゐる。今年は人々に頼んで、たとひ少しづつでも、いろいろ土地の條件の異なるところに廣い範圍で自分の種を植ゑてもらつた。さうして春から秋までずつと觀察しつづけて來た。何しろあちこちと土地が廣く離れてゐるので、毎日驅けずりまはるといふのも容易なことではなかつた。しかしこの觀察の結果は自分の今後のために實にためになつた。家へ歸つてからは毎晩、その日見たところを詳しく記した。溫室や冷風裝置といふやうな人工的に與へた條件の下での結果には薄弱なものがある。自分の田や、近親の者たちの田での結果だけでも不十分である。自分としてはまことに、可愛い子に旅をさせた、の感が深い。そして、その旅をさせた子は、到るところで健やかに育つた。それにしてもこの部落が、自分の頼みを聞いて、全段別をあげて自分の品種のために提供してくれたといふことは實に有難い。それは共同組合にしてはじめて出來たことだ。知られるやうに自分は今まで信用されなかつた。仕事は認められなかつた。ことに指導員とか、さういふやうな人々の間においてさうであつた。何の權威も背景になかつたからだ。村人たちは事大主義的だし、それに何によらず自分の近くからのものにはケチをつけたがるといふ氣風もあ

つた。そんなこんなで自分は杉原君を通じて自分を理解してくれるこの部落に近づき、どこの部落のものだかわからぬやうなことになつてしまつた。人は勝手なもので、この秋の結果を見た今になつて、自分の部落の者たちは、小池は怪しからぬ、自分の部落のことはほつたらかしにしておいて、ほかへばかり一所懸命になつてゐる、などと言つてゐる。……

聞いてゐる人々は笑つた。この春の部落の集りの時に、自分の部落でさへまだやるときまつてゐないことを、人の部落へ來て押しつけようといふのはどういふものか、それはいらぬおせつかいといふものではないか、と言はぬばかりの口吻を、小池を前にして洩らした者も、そんなことはとうに忘れてしまつてゐて、一緒になつて笑つた。幸福な笑ひであつた。

小池は續けて言つた。

「むろん、私は私の部落の連中がそんな風に言ふやうになつたことをほんたうに喜んでゐるんです。それこそ私の望んでゐた勝利なんだから。……ところで、それにつけても來年の種籾のことが心配です。我も我もと、種籾の分讓を申し込んで來るものがあるにちがひありませんからね。今からもう私の所へ、いろんな人がやつて來てゐる。縣からなんぞも人が來たし、しかし方々のさういふ求めに應ずるといふのは、とても出來ることぢやありません。我々の共同採種圃なんぞぢや間に合ひつこはないんだし。それでどうしても、今年收穫したもののなかからずゐぶんの大量を、飯米とせずに、種籾として確保しておく、といふやうにしなければならぬと思ふのです。

私もそのつもりで今からかかつてゐるんですが、組合でもどうか一つその方針で行つていただきたいんです。」

「しかしさういふことを言つたら、みんな種籾にしたところで足りやしますまいが。」と、谷口が言つた。

「わしらの食ふぶんはそれぢやどうしますか。ふだんの年だつて餘つてなぞゐやしないんですから。」と、梶野が言つた。

「種籾の分讓を受けるものが、引換へに金でも米でもすぐに持つて來てくれりやいいが、さうはいかないんだから。みんな今年ひどい目にあつた連中ばつかりなんだからな。」と、鹽谷が言つた。

小池はそれらの聲に對して何か答へようとした。するとその前に群野が言つた。群野は年長者であるのと、この土地にはいつたのが古いといふことで、副會長の役にゐる男である。

「まあ、そりや人のためになることだ。小池君の言つたやうにしないぢやをれんことぢやないか。何しろこの際のことだからな。わしらは儲けものしたと思やいいんだ。その儲けを吐き出すと思やいいんだ。……」

「それでどうするといふんだい？　とつつあん。」

「なに、わしらも今年は取れなかつたんだと思ひ諦めることよ。特別よかつたなんぞとは思はんで、ひどい目にあつた他部落の連中とおんなじやうにしてやつて行くんだ。拂下米ももらふし、

救農土木工事さも出るし、稗團子も食ふし、どんぐりの實も食ふし……」

「納めるものも納めねえし……」と、誰かが口眞似したので、みんな笑つた。群野も笑ひながら、

「どだい、今から十年前のことを思やあ、ほかの村よりこつちがいいなんていふのは、逆ま事なんだからなあ。さうならなくちやならないが、ほかよりいいのが當り前と考へるやうぢやいかん。」

老人は若い者等をたしなめるやうに言つた。

「無論、組合の基礎の確立を考へながら援助していただかなきやなりませんが……」と、小池は言つた。

二十八

細谷がさきへ話を戻した。

「それで川島へ納めるものについてだが……」

人々はこの非常に重要な問題について協議しはじめた。ほかの年とはちがふといふことは言ふまでもない。大體どのくらゐの減收かといふことははつきり數字の上に出てもゐる。しかし川島はほかの地主とはちがふ。こつちから何割といふことを言つて、「要求」の形で持ち出さねばならぬやうな人ではない。こつちから言ひ出さなくたつて、何もかもわかつてゐるやうな人だ。今

までとても度々こまかな心づかひは示してもらつてゐる。今年の作柄についても細谷あてに心配した手紙が來てゐる。川島は元來がこの縣の古い家の出で、今でもH市に屋敷があるのだが、そこへ來たと聞いた時には、細谷は出かけて行つて逢ふことにしてゐるし、向うから招ばれて行つていろいろ最近の様子について話すこともある。この春にも、細谷と杉原とは行つて逢つて、今年はどうやらうまくないことになりさうだと話したのであつた。

さういふ川島であり、また川島との間柄なのだ。今さら何も世間普通の地主に對するやうな對し方で行く必要はあるまい。實情をよく報告して考慮してくれるやう願へば、わるいやうにはしてくれぬだらう。さういふ態度で臨むことにきまつた。

「それでねえ、杉原君、」と、細谷は杉原の方を向いた。

「言ひ忘れてたけど、實は川島さんから言つて來てるんだ。組合の事業報告書を、出來るだけ詳しく書いたものを、今度自分が行くまでに作つておいてくれ、とさう言つて來てゐるんだがね。」

「事業報告書？」

「うん、經營の狀況や、財產、會計、などについて詳しく書いた報告書をといふんだ。」

「そりややつぱり、冷害の對策のための參考にしようといふんだね……」と、高橋が言つた。

「そりや無論さうだが。それから、杉原君、縣廳の農務課からも同じやうなことを言つて來てるんだよ。これは、それ、この頃、農家の共同經營といふことについて、役所や農會なんぞも注意

しはじめて來たんで、それの參考にしようといふんだらうね。今まではぼろ組合扱ひで、見向きもしなかつたんだが、この秋の成績で、急にびつくりして眼をつけはじめたといふわけさね。」と、細谷は得意らしく笑つた。「それで、君、面倒だけれど一つその報告書を作つてくれないかな。材料はわしの所に一應揃つてゐるから。」

「何日頃までかな。」

「川島の旦那は、來月の五、六日頃に行くと言つて來てるんだが。」

それからなほ二三の相談事があつて、おもな話は終つた。杉原は、農繁期以外の共同炊事を持ち出してみたが、冬期の共同炊事はいろいろな點から言つて無理だといふことで、誰にも賛成されずにしまつた。春以來の共同炊事にもずゐぶんいろいろな無理があつた。しかしともかくそれを相當長い期間押し通して來たために、勞力の點でも物資の點でもどれだけ節約ができたかしれはしない。炊事の方で節約された女たちの勞働力は畑の方に生かされてゐる。食料はたしかによほど先まで食ひのばされた結果になつてゐる。押し通してそれをやつて來た心の底には、この秋はどうなるかわからぬ、今から備へが必要だとの、切迫した感じがあつた。しかし今はどつちかといへばほつとした氣持でゐる。杉原は救荒食物をたくみにとり入れた共同炊事はこれからの時期こそ必要であると思ふ。しかし冬の配給は容易ではない。又、配給されたものが途中ですつかり冷えてしまつて、各人の家で又あたため直すといふやうなことでは、共同炊事の意味がない、

といはれ、それは、そのためにわざわざ火をおこす、といふのであれば無意味だが、冬はどこでもゐろりに火があるのだから、ちよつとした手數ではないか、と答へたりしてゐるうちに、杉原は大勢の不賛成者を説得しようといふ氣持をだんだんに失つて、だまつてしまつた。何もそんなにまでしなくたつて、普通にしたらいい、といふ人々の安心した氣持が、もはや拔きがたいものであることを感じたからである。

集りが終つて杉原は暗い夜道へ出た。病み上りの彼はかなり疲れてゐた。彼は手に、書類や帳簿を包んだ風呂敷包を下げてゐた。事業報告書作製のための材料である。報告書を作らねばならぬといふことは彼の頭を支配してゐた。作るそのことではなく、作らねばならぬといふ事情について考へてゐた。川島はなぜ今日、急に事業報告書を見たいと言ひだしたか？　細谷も高橋も、その他の者も、今年の冷害の對策を考へるための資料だとして疑はず、川島らしいことだと考へてゐる。杉原にはしかし彼等は單純で甘いとしか思へない。地主が自分の農場の事業報告書を求めるといふことは當り前なことで何も特別なことではないやうである。しかし、川島は最初から非常に自由放任主義で來た人である。共同組合にせよ、といふことは彼が主唱した。しかし普通さういふやうな組合においては、組合長には、農場主から雇はれたものがなり、それが地主の代理人として、組合の事業を絶えず監視するといふやうな仕組みにするものである。しかし川島農場では全く小作人の自治に任してゐる。經營の狀況については、勿論、その大綱は、今までとて

も報告を求めてゐるし、報告してゐるが、こまごましたことまで聞かうとしたことはない。今度の事業報告書の求め方とはよほどちがふやうに思ふ。

それを聞いた瞬間から、杉原は、細谷やその他の者の思ひ及ばぬことを直感してゐたのであつた。彼は川島が、ここ數年の間に、惠まれぬ自然的條件のなかにある組合のために、もはやずゐぶんと多額の金を注ぎ込んでゐることを思ひ起してゐた。彼は又、北海道の方に事業の主體がある川島の家の近頃の狀態について、いくらか耳にしてゐることもあつた。S市の銀行の、不動産貸付課につとめてゐる兄が手紙のはしにそれを書きつけて來てゐた。抵當にはいつてゐる川島の土地について、銀行によつて評價されてゐる最近の彼の信用狀態について。……杉原は又、鄕里からの新聞の上で、直接間接に川島などの關係してゐるらしい事業の不況についても讀んだことがあつた。それは、兄の手紙と符節を合するものであつた。

今日集つた仲間たちのうちのある者の安心し切つた姿、農場主にもたれかかつてゐる姿が、彼には不快だつた。自分が彼等とは出身がちがふといふことを反省のなかに入れて見ても、この感情はぬぐひ去ることができなかつた。小作料の減額にしても、要求の形をとらぬ、といつてゐるのなどは、謙虛に見えてじつはさういふものではない、むしろさう出ない方が、向うの弱氣を壓し、その好意を煽るものであることを知つてゐるのだつた。借入金の償還も、來年一年間をおいて、その次の年からである。が、それもどうにかなるだらうぐらゐに考へてゐる。ちよつとした

言葉のはし、笑ひなどにそれが感じられる。すべてこれらは杉原の賛成せぬところだ。徳義の上から言ふのではない。そのやうな脆弱な心根の上に、眞に堅固な生活組織が打ち立てられるとは思へぬからである。

二十九

部落の集りがあつた次の日から、杉原は、薄暗い部屋のなかに閉ぢこもつて、朝早くから夜おそくまで、机の前に坐りきりであつた。机のまはりには、あの晩細谷のところから風呂敷に包んで持つて來た帳簿や書類などがちらかつてゐた。筆を取つて、誰にものみこめるやうな形に事業報告書を書く前に、彼は先づそれらの帳簿や書類をくはしくしらべてみなければならなかつた。そしてしらべてゆけばゆくほど、彼は仕事のむつかしさを感じて來た。ある苦しさを感じて來た。

小さな低い机は、長時間その前に坐つてゐるものを疲れさせた。このやうな仕事ではかへつて昔より根氣のなくなつてゐるやうな自分を感じた。彼は時々手を上げて、揃へた指の小端のところで首筋や肩をとんとんと叩いたりした。古新聞や雜誌を机の足の下に敷いて高くしたりした。

「あんまり根をつめてまたからだにさはつたら……」

日暮れ方、仕事から歸つて來たノブが、朝彼女が出て行つた時と全くおんなじ姿勢で机に向つてゐる兄を見て、心配さうに言ふことがあつた。

「うん……」と言つて彼は原稿紙の上に、帳簿から何かの數字を寫し取つてゐた。そして間もなくノブが汲んで來た濃い茶をうまさうに飲んだ。

「ノブ、炬燵をつくつてくれないか。なんだか少し寒い。」

ノブが歸つて來るのを待ちかねてゐたやうに、疲れた顏を上げて言つた。

ノブはとりあへず消炭をおこして埋み火をつくつた。杉原は炬燵の上に足をのせて、氣持よささうに長くなつてゐた。「あーあッ」といふやうな、深いところから出る吐息を、ノブは臺所の仕事をしながら寂しく聞いた。夕飯の支度ができたと言つて呼んでも、すぐには起きて來なかつた。障子をあけて言ふと、眠つてゐたらしく、「うん？　ああ、飯か。」と言つて、顏をこすりこすり起きて來た。

「これは山ごぼうの葉だね？」と、食事の膳に着いた杉原は、皿の上のものを、口へ運びながら訊いた。

「ええ、さう。」

「乾しといたやつを茹でたんだね？」

「さうです。」

「こいつの根はやつぱり食へないもんかな。」

「さア、試してみたこともないけれど。毒があるつてことになつてるから。」

「葉や實が食へて根が食へぬ、またそれとはまるで反對なものがずゐぶんあるんだね。毒のあるものことなんかも昔の人は知つてるけれど、この頃の人は段々知らなくなつてゆくんだな。」

救荒植物の、食つてはならぬといふ部分を食つて中毒を起したといふやうな話は、彼の部落においてではなかつたが、この秋にはいつてからでも二つ三つ耳にしてゐた。ひどく下痢したとか吐いたとか便祕したとかいふやうなはなしであつた。この地方の山野で採取されると想像される救荒植物については、この春の頃から杉原は調べて、一覽表のやうなものをつくつてゐた。それは小池の家にあつた餘り人に知られてゐない古い書物によつて調べたり、年寄りについて聞いたりしたものであつた。この部落で、春からの共同炊事のなかに、てきぎに救荒植物を織り込んで行つたといふのは、おもにこの一覽表に從つてやつてみたことであつた。

この一覽表はこの部落ばかりではなく、他部落の人々の間にも配られたが、杉原たちの冷害の對策が顧られなかつたやうに、この表も亦顧られなかつた。春さきから野原の草の葉や根のことを考へねばならぬなどといふことはばかばかしく思はれた。しかし、實際は春のうちから考へてかからねばおそいのであつた。霙が降りかかる頃になつてからわらびの根を掘るといふやうなことではもうおそいのであつた。

「中山(部落)あたりぢや、毎日、女子供總動員で山へ出かけて行つてゐるといふがね。」

「樫の實やしだみやなんかでせう？　そんな木の實だつて今年はふだんの年のやうにはならないんだから。栗の實は全然だめでしたものね。栗のいがはちやんとできて、赤くなつてゐるんだけれど、なかの實がまるでつぶしたやうに薄つぺらなんです。」

「さうだらうな。北海道なんかぢや、普通の年でも、栗の實はそんなのが多いものね。」

兄妹は話しながら飯をすました。

「お前、この春からの、救荒植物の食ひ様のことは、みんな書きとめてあるだらうね？」

「ええ、書いてあります。」

「今度見せてもらふから整理しておいてくれよ。ほかには餘りない貴重な經驗なんだから。」

一覽表は書物と人の話とによるもので、要するに受賣りにすぎない。それは、葉が茹でて食へるとか、根から澱粉がとれるとか書いてあるにすぎない。それはその通りだとしても、實際にさうやつて食膳に上して食つてみた經驗といふものが尊い。このものは、このやうにして食ふのが一番いいと思ふ、といふことが、實際に料理した人間自身の經驗において語られてゐて、はじめて人々に對する指針ともなることができる。

ノブは春以來の共同炊事には、當番の一人としてずつと出てゐたし、自分の家の臺所でもいろいろと試みてゐるし、豐富な經驗を持つてゐる。杉原はそれを一々書きとめさせて來た。この記錄をまとめて彼は、この地方の人々へも、縣の方の指導の任にあたる人々へも見せたいと思つてゐる。

それは今すぐ出來て人々に配られたとしても、もはや今年のこの凶作の間には合はない。それはまた來るべきおなじやうな年にそなへるためのものである。そしてその日は、おそらくはさほど遠からぬうちにまた必ず來る。

ノブは立つて行つて、一冊のノートを持つて來て彼に示した。それは今さらべつに整理する必要もないくらゐ、よくわかるやうにしるされたものであつた。その頁をめくつて見てゐると彼の胸にはこの春以來のことがまざまざと思ひうかんで來た。さうしてある情なさと寂しさとが胸に迫つて來た。草木の葉とか根とかの料理についてこのやうにしるさねばならぬといふこと自體に對してであつた。この經驗を紙に刷つて人々にくばる。その時はちよつと珍しがられる。間もなく人々は忘れる。さうしてまた警告がはじまる時、人々は依然警告を無視して、またおなじことが繰り返されるだらう。

「救農工事はこの村でもやるんでせう？　いつごろからはじめるのかしら。」

「縣の方では何を愚圖々々してゐるものかね。もうすぐ雪が來るといふのに。」

ああ、と欠びして杉原は立ち上つた。「さあ、もう少し仕事しようか。」

「報告書はまだ？」

「まだまだよ。弱つてゐるんだ。」

彼はさう言つてまた部屋に閉ぢこもつた。そして夜おそくまでも机に向つてゐた。

三十

その弱つてゐるといふことについては、杉原はまだ誰にも説明はしてゐなかつた。共同組合の會計の事務は群野が擔任といふことになつてゐた。實際にはしかし組合長の細谷がその方のことも多くつかさどる結果になつてゐた。もとより慣れぬ百姓の手になる帳簿の記載はゴタゴタして調査も、生産物の分配表も不十分であつた。

亂雜になつてゐるこれらの書類を整理し、記載すべきものは記載し、調べの行きとどかぬところは調べなほすといふ、事務の煩雜を彼はきらつたわけではむろんなかつた。彼は數を扱ふ事務には堪能といふ部類の人間ではなかつたが、そろばんをパチパチとはじいて、足したり引いたり、掛けたり割つたりして、小數點以下のこまごまとした數字を根氣よく割り出していつた。

組合の經營は、小作人の住家、共同作業場、その附屬具、家畜、一般農具、厩舍等の一切が、地主からの借り入れになつてゐた。今の地主がここの土地を取得して以後に入植したものは無論その借金を負うてゐるわけだが、以前から人植してゐたものも、共同經營開始にあたつて、一定の補償を受けてその持つてゐる馬とか農具とかを組合に提供し、あとからの人々と共通の條件の下に立つたのであつた。これらの借入金は、五年間、無利子据ゑ置き、その翌年から二十ヶ年の年

賦償還といふことになつてゐる。

總收穫の四割はこれを地主にをさめ、六割が組合の所得となるといふことはさきに言つた。ところでこの組合收入の分配はどのやうにして行はれるかといふに、その百分の二を、病氣その他の場合の救助金として積み立てる。百分の三は、厩舍、共同作業場、堆肥舍、機械類、農具等の修繕や補ひのための費用として積み立てる。

この二つの積立金を差引いた殘りの十分の三が戸別分配であつて、その家族數や、出役人數に關係なく、各戸平均に分配される。また十分の七は比例配分であつて、それの根據は、組合員及びその家族の出役の比率、つまり各戸が實際に出した勞働量の割合によるのである。

この勞働量の算定といふことは實際問題としてなかなかにむつかしいことであつた。それは勞働能率と出役日數とによつて決定されなければならぬ。一人前の勞働力を持つ男を一、女を〇・七とし、次に二十歳以下十四五歳までをそれぞれの年齢に從つてまた幾通りかにわけて、能率の標準を決定する。規定の勞賃に、この能率と、出役日數とを掛け合はして得たものが、その實際の取得になるわけである。

そしてその勞賃はまた、春の畑起し、代掻き、田植、除草、稻刈り、運搬、脫穀調整等、それぞれに異なる作業に從つてそれぞれに違ふのであつた。たとへば田畑の耕起が一圓の時、田植は一圓二十錢、脫穀調整は九十錢といふやうな風にである。

一つの作業は、その期間を通して、またはそれをさらに二つ三つにわけて、責任者がきまつてゐた。勞働日誌にその日の出役狀態をしるすといふことは、責任者の一つの仕事である。それらの勞働日誌も、今杉原の手許に集つて來てゐる。

かういふ經營といふものが、今日まで、どうにか圓滑におこなはれて來たといふのは何の力によるのであらうか？　農業的には條件のわるい、開墾後年の淺いこの土地でどうにかやつてこられた。七面倒くさい、個人の自由のきかぬ經營の仕組みに對して、陰でも表でもぶつくさ言ふ聲は始終あとを絶たず、今年一年のやりかたをきめるといふ春の總會には、毎年きまつてその聲がまとまつた一つの力として叫びをあげ、共同經營を無力ならしめようといふ方向をとるのだつたが、それにもかかはらず、どうにかかういふ形でやつてこられた。それは何の力によるものであつただらうか？

それはなんの力でもない、金の力だ。地主の金の力に助けられてのことだ。

地主は四割の小作料を取つてゐる。それはべつに安いなどといふことはできない。先日の部落の集りの日に、細谷組合長は、その報告のなかで、總收穫のなかから四割の小作料を引き去り、その殘りのなかからさらに、肥料代、飼料代、人夫賃、畜力損失等の、營農資金に屬するもの全部を差引き、その殘りが實際に分配されるもののやうに說明してゐた。そして聞く方もわかつたやうな顏をして聞いてゐた。しかし、もしも實際がその通りのものであるとするならば、分配さ

れるものとして一體どれだけのものが殘るであらうか？　そしてまた決して生活を維持するに足りないそれらの分配額を、組合員がだまつて聞いてゐるべきわけがあらうか？

實狀はしかしさうではなかつた。川島は四割の小作料を取つたけれども、それは取り切りに取つてしまふものではなかつた。彼は組合の一年間の營農資金をそのなかから前もつて出して貸し與へることになつてゐた。この現金の融通を受けて、組合の經營ははじめて圓滑であることができたのだ。一年の仕事がはじまる前に借り、收穫が終つた時に取つたものを賣つて返すといふことになつてゐるのだが、これも實狀は借りただけ餘さずきちんと返すといふことは今までに一度もないのだつた。まだ基礎がかたまらぬとして、彼等は大目に見てもらつてゐた。

そればかりではない。組合員個人としても川島から借りてゐるものがある。それは積立金のなかからもう借りることができなくなつたものが、なんだかんだと名目をつけて借りてゐるのであつた。ほとんど借りてゐないものはない。この事實は今はじめて知つて杉原はおどろいた。一人借りると、ほかのものが借りるのにおれが借りずにゐるのは損だといふ氣になるのだらうか。借りる時には、一應組合長の手を通すので、組合長の判がいるといふことになつてゐるので、書類のなかにその控へのやうなものがある。

それにしても川島の人の好さといふものにおどろかずにはゐられない。そしてそれはほんたうの腹の太さから來てゐるものではない。理解もあり同情もある、進んだ考へを持つたやうな顏を

すつとして來たものの氣の弱さにすぎない。

そして組合員たちはさういふ川島を見拔いてしまつてゐる。

杉原はかういふ組合の經濟の基礎についてむろん今まで知らなかつたのではない。知つて深く感じてをればこそ、來年一年おいて、その次の年から來る、借金償還とそれに伴ふあたらしい經營の段階について思ひをめぐらしてもゐるのであつた。ただそれはまだ彼の頭のなかでいろいろと思ひめぐらすといふ程度にとどまつてゐた。この春以來、冷害をどんなにして乘り越えるかといふそのことで彼は一ぱいになつてしまつてゐたのである。

知つてはゐたが、今このやうにして詳しい報告書をつくらうとして、いろいろと具體的に數字を扱つてみると、組合の經濟が、いかに薄弱な、危なげな基礎の上に立つてゐるかといふことを、痛感しないわけにはいかなかつた。

そして、詳しい事業報告書を提出するやうにと、今まで言はなかつたやうなことを言ひ出して來た川島の腹のうちが、全く當然な要求であるにもかかはらず、ある重大な感じをもつて迫るのであつた。

冷害はどうにか乘り越えたが、新しい困難が近づきつつあるといふ豫感を拂ひのけることはできない。

三十一

やつと報告書の草案を書き上げた日の夜、杉原はそれを持つて、細谷ではなく、小池を訪ねて行つた。彼は新しい困難について誰かと共に語らずにはゐられなかつた、そしてその最初の人は同じ組合内の細谷ではなくて、小池でなければならなかつた。

「この間の集りの晩に細谷が言つてゐた報告書の草案なんだけれどね、君ひとつ見てくれないか。」

「事業報告書は今までつくつたことはなかつたのかい？」

「簡單な概算書をつくつてね。それにもとづいて説明するといふ程度のことだつたんだよ。」

「ふむ……」

小池は草稿を取つて、眼を通して行つた。さうして見終ると、だまつてそれを膝の近くにおいて、煙草に火をつけた。ざつと一應眼を通したにすぎなかつたが、鋭敏な頭腦は、この報告書が示してゐる重要な意味と、杉原がこれを自分のところへ持つて來ずにゐられなかつた氣持とを、たちまち悟つてしまつたのである。

「このままの形で、内へも外へも出すつもりかい？　つまり手心はちつとも加へずと……」

「どうともまだきめてはゐないんだがね。しかし僕一人としては手心は加へなくてもいい、といふよりは、加へるべきぢやない、このまま出すべきだと思つてゐるんだがね。」

「細谷へはもう見せたの？」

「いや、まだなんだ。」

「彼はなんといふか……」

「細谷はおそらく反對するだらうね。いろいろと數字の上に小細工を施したがるだらうね。それも組合員に見せるものと、川島へ見せるものと、……それからさらに縣の農務課に見せるものと、三通り、それぞれ違つたものにしよう、ぐらゐなことは言ひ出すかも知れないね。」

「君のこの、文章で説明してある部分ね、ここをも少しどうにかぼやかして書いたら、數字だけで行つたら、細谷なんぞは見逃してしまふかも知れないがね。」と、小池は笑つた。

「ぼやかしやうもないしね。」と、杉原も笑つた。

「しかし、僕はね、もうそんな時ではないと思つてゐるんだ。臭いものに蓋式で、見るべきものも見ないやうにして一時を糊塗しようとするやうな時はもうすぎたと思つてゐるんだ。益々ぬかるみに足を突つ込んで、出ようとしても出られなくなるばつかりだからね。事實を正面からちやんと見て、向つて行かなけりやならないと思ふんだ。

「うん。」

「なんだらうね、外部の人だけれど、君なんかにはもうずつと前から、組合のかういふ薄弱さは

わかつてゐたんだらうね。」
「そりやわかつてゐたよ。外部のもののことだから、數字的なことはむろんわかりやしなかつたが……、遠からず組合自身によつて眞劍に考へられなきやならないことだと思つてゐたんだ。」
「組合員にも地主にも、もうはつきりした事實をつきつけて、決意をうながすといふことにしなけりやだめだ。組合側としては新しい出發を考へるべきだ。今までのやうな形で地主の庇護を受けるといふことはやめてだね。さうしてやつてみる。やれるかどうか知れないがやつてみる。それでやつてゆけぬとありや、どうにも仕方のないことなんだ。さうなつたらまたその時のことなんだ。」
「川島は何かほのめかして來たのかね。今までとちがつた態度でも……」
「いや、べつにさういふことはないらしい。しかし詳しい報告書を出せといふ彼の腹は、これは僕の推察だが、組合との今までのやうなルーズな關係を、無方針な恩惠を、打ち切らうといふのにある……それにちがひないと僕は睨んでるんだ。さういふ推察が根據のないことではないといふのは、川島の北海道の方の事業が面白くない、だいぶ左前になつて來てゐるといふことを聞いてゐるもんだからね。さうなるとやかましい番頭達が、先づ第一に、見込みのない、まるで道樂仕事のやうな東北の農場に無用なつひえをするのはやめろ、といふことになるのは當然ぢやないか。しかし僕は、川島のさういふ腹とは無關係に、こつちから進んで、今までのやうな庇護から

は脱けて出なけりやならぬと思ふんだ。」
「僕はかねがね感じてゐることがあるんだがね。たとへば、この間の君の方の集りの晩でもさうなんだが、細谷がいろいろと說明するだらう。聞いてゐるとずゐぶん疑問だとおもはれることが多いんだが……しかし、みんなそれについてあまり質問をしないね。わかつたやうな顏をしてゐる……」
「さうなんだ。さうなんだよ。」
「自分等の生活のことだからもつといろいろ氣になりさうなものだと思ふんだが、一向氣にもせずにゐる、といふやうなところがある。この前の集りはああいふ集りだからで、春の總會にはさうぢやあるまいと思ふが、それにしても。――僕はあれはやはり安心があるからだと思ふんだね。もたれかかつてゐるものがあるからだ。なあに、どうにかなる、といふよりはどうにかしてくれる、ほかは困つてもおれたちは困らずにすむことができるんだと、口には出さないが、みんな腹の底ではさう思つてゐる。今年なんぞ、まアよく大した苦情も出ずにやつて來たと思ふくらゐだよ。」
「自分たちの實力が、どの程度のものかつてことも知らないんだ……」
「ああいふもたれかかる精神といふものを先づどうにかしなけりやだめだよ。しかも決して賴りにし切ることのできないものにもたれかかつてゐるんだから。」

「さうだ、そしてそれには自分たちの力に對する自覺が先づ必要なんだ。今のところでは、組合員は、自分たちの生活を維持してゆくのに、一體どこまでがほんたうに自分の力で、どこまでが人の力かといふことについて、しつかりした自覺がないんだからね。あるものはそれを知つてゐる。知つてゐるものはしかし頰冠りですませる間はすまさうと思つてゐる、食へるだけは食つてやらうといふ風に思つてゐる……」

「おれはねえ、杉原君。君の前だけれど、君の組合の人たちは、……全部が全部ぢやむろんないし、質がいいとかわるいとか、そんなふうな大ざつぱな言ひ方は好きぢやないが、敢て言へば質は餘りよくないと思つてゐるんだ。世間が何となくあの部落のものを白い眼で見てゐる、といふのはやはりさういふ風にさせるものが部落の人たちのなかにも何かあると思ふんだ。思ひ切つて惡口を言へば、流れて來たものにありがちな根性だね。人のことなんかどうでもいい、取るだけ取らねば損だ、と言つたやうな……それがどう形として現れて來てゐるわけでもないさ。しかし何かそんな風なものを底の方に人は感じてゐる、といふことはあると思ふのだよ。」

「自分を護るものは結局自分だけだ、といふことを思ひ知らされて來たやうな人たちだからね。農民らしい純朴さは失つてゐるといふことはあるだらうが、ふてぶてしい強いものもあるんだ。その自分を護るといふ、しんにおいては強いところのあるものが、すなほな形をとらないで、ゆがんだ形を取つてしまつてゐる、……そこにいろいろな問題があるわけだらうがね。」

「組合の經營の基礎が何に依存してゐるかといふことをはつきり組合員に言ふ、さうして決意をうながす、……つまり川島から借金しないでやつて行けるやうにする、といふわけだね？」と、小池は念を押すやうに言つた。

「さうだ。」

「それでさうしてやつて行ける自信はあるかい？」

「今すぐそれだけの力といふものは殘念ながらとてもないと思ふよ。しかし力がないと言つて、いつまでもさうしては居れぬことだからね。おそかれ早かれ一本立ちにならねばならぬときは來る。約束の上では再來年から借金はすまして行かねばならぬのだからね。經營の合理化について今こそほんたうに考へたい。これについては君にもとくに力を貸してもらひたいんだ。川島の助力は受けぬ、と言つても、おたがひに今までのやうなルーズな關係はやめたいといふので、全然その助けを借りずにやつていけるわけはない。組合員にも川島にも實情をしつかりのみこんでもらつて、新しいはつきりした取りきめをしたいんだ。それによつて組合員の自覺をうながしたいんだ。」

「うん……しかし、さう出れば、おそらくこれを機會に動搖があると思ふね……さう思はないかい？」

「うん、……そりやまぬがれぬかもしれないな。」

「再來年から借金は返して行かねばならぬといふが、僕は、組合員の大多數は、はじめつから借金を返すつもりなんかないんぢやないか、と思つてゐるんだ。」

「動搖はあるだらうね。しかし一時を糊塗してゐるわけにはいかない。どうしても一度はくぐらねばならぬものなら、早い方がいいだらう。」

「ただ、どんな形でそれがあらはれて來るか……」

二人はそれぞれの思ひに沈んだ。

このやうな組合の內部の問題は、杉原自身の組合內の立場にも關係して來ることではあるが、彼はさういふ自分の事についてはその晩は言はなかつた。

三十二

愼重な杉原は　なほ一日、出來上つた報告書の草案を、小池以外のものには見せずに手もとにおいた。そして晩になつてから細谷を訪ねようと思つてゐると、ノブが、今晩向うから訪ねて來るとことづてを持つて來た。夕飯がすんで少しすると彼はやつて來た。

「こりや、どうも。」と、杉原は迎へた。「今晩、私の方から訪ねようと思つてゐたところです。報告書の方も出來たしするもんだから。」

「出來たかね？　そりやどうも御苦勞さん。」

細谷は草案を受け取つて、眼を通しはじめた。讀むでもなく、眼を走らせるだけで、パラパラと頁をめくつて行つた。「今日はちよつと話があつて來たんだがね……」

何か氣がかりがあるらしく、彼の心は草案の上にも落ち着いてとまつてゐないやうであつた。

「川島の方からはその後何か言つて來たかね？」

「いや、べつに來てないが。」

「來るのは豫定どほりなんだらうね。

「さうだらうと思つてるがね。」

「それで、報告書の方はどうだらう。あんたが見て、これでいいといふことになれば、すぐに謄寫版に刷ることになるが。」と、杉原は、細谷がどういふ相談事を持つて來たにしろ、報告書の方のことをきめてからにしようと思つた。

「家へ持つて歸つてよく讀んでみることにしますか？　その前に少し說明しておかねばならないんだが。」

「いや、いいよ。君がこれでいいつていふもんならそれでね。わしら、べつに何か言ふほどのことはあるまいテ。

「細谷さん、川島が今度、今じぶん、あらたまつて事業報告書を出せなどと言つて來たのは、どういふ腹からだと、あんたは見てゐるかね？」

「そりや、むろん、今年の冷害つてことだらうが。冷害で痛手を被つただらうから、なんとかしてやらにやなるまいといふ腹だらうが。」
「さう思ふかね？　それだけだと思ふかね？」
「え、なぜ？」
細谷は、一體どういふことなんだ、といふ顔をした。
「そりや、それだけといふことぢやないかも知れんさ……それでまアこの機會に、農場全體のことを詳しく知つておかうといふ……あのくらゐ手廣く仕事をやつてゐれば、なにもかも主人の一存、といふよりは、主人の手で事をまかなふといふわけのもんぢやないだらうからね。しかし使つてゐるものに、川島みづから一々農場のことを說明してやるといふわけにはいくもんぢやないし、さういふ點からも報告書は入用だらうぢやないか。
「ふむ……もしもさういふことだとすると、わしのこの報告書は多少工合がわるいといふことになるかも知れないよ。少くともまア、いつかも逢つた番頭の大橋、あれらには喜ばれるやうなもんぢやないことはたしかだな。」
「ふん、どういふことなんだね？　そりや一體。」
「わしのつくつた報告書が、どうかうといふやうなことぢやないんだよ。わしはただ組合の實狀を、あんたから受けとつた帳簿や書類に從つて、ありのまま、この報告書といふ形に綴つただけ

のことなんだからね。報告書が問題ぢやなくて、組合の實狀が問題なんだ。……細谷さん、おれや、今度、はじめて知つて……いや、はじめて知つたなんていふことであるわけはないが、ともかく自分の手で數字にはつきりと出してみて、じつはおどろいたんだ。うかつな話だがね。おどろいたし、組合の將來についてじつに心配にもなつて來てゐるんだよ。
「ふん、そりやどういふ？」
「正直なところ、わしはわしたちの共同組合の經營が、こんなにも大きく地主の力にすがつて、初めて成り立つてゐるとは思つてゐなかつたんだよ。今の狀態ぢや、まるで川島の首の振りやうひとつで、組合全體が死ぬとも生きるとも、どうともなるといふやうなものなんだからね……。」
「そりや仕方がない。そんなこと言つたつてそれや出發してまだいくらもたつちやゐないんだから……」
「しかし、共同經營の形態をとるやうになつてからもう四年なんだからね。四年はまだはじまつたばかりと言へば言へる、――わしらの建設全體の上から見ればいかにも短い、はじまつたばかりだが、しかし借金を返してこれから一本立ちになるといふ點から言へば、明らかに一つの句切りだからね。ところが一本立ちには明日からならねばならぬといふ時になつて急になれるといふもんぢやない。それまでにそれに必要な力が內部に蓄積されてゐなけりやならない。さういふ點でわしは組合の今は全くだめだと思ふんだ。

「そりや元來が惠まれた條件の土地ぢやないんだからね。それに二度も冷害に逢つてゐるんだし、四年や五年ぢや、とても……」

細谷は、辯解するやうに言つた。

「そりや全くその通りなんだけれどもね。力が蓄積できなけりやできないで、どうにも仕方のないことなんだ。しかしわしは、組合の方針、――といふよりは精神だな、そこにどうもまちがつたものがあるやうに思ふんだがな。これは一人二人のことぢやない、われわれみんなのことなんだが。かういふことぢや、もつと條件がよく、冷害なんぞなくても、力が蓄積されるわけはない、と言はせるやうなものがあると思ふんだが……」

「すると君は、何かい、川島の力にすがつてゐてはならぬ、川島の助力を拒否する、とでもいふのかい。精神は結構だが、現に今言つたやうに力がないんだ、その上さ持つて來てからに……」

「いちがいに助力を拒否しようなんぢと言ふんぢやない。さういふことでは立つて行けなくなるのも事實さ。ただわしは今までのやうな授助のされ方ぢやだめだと思ふんだよ。――もともとわれわれは力がないね。それで助力を受ける。助力を受けることで力が鍛へられるといふよりは、かへつて力が弱められるやうな原因をつくる、といつたやうな、さういふ助力のされ方はやめなければといふんだよ。」

「杉原君、もう少しはつきり言つてくれ。それで一體どうであればいいと君は言ふんだね？」

「それはかういふことなんだ。さまざまな共同施設をわれわれは地主から提供してもらつてゐるね？　資本のかういふ借入れは、そもそもの最初からちやんとした約束のなかにあることで、これはべつに言ふことはない。それからわれわれはまた、その年々にいる營農資金は前以て借りられる、出來秋にそれは返す、といふことにしてゐるね？　これは最初からの約束のなかにあつたわけぢやないが、困つた年にさういふことにしてもらつて、それからずつとさうしてゐる。これもまあいいさ。――かういふ授助のされ方はいい。しかし、たとへば、最初に提供してもらつた農具以外に、あとからあとからと必要になつてくる新しい農具といふやうなものは當然われわれ自身の力をもつておぎなつてゆくべきものぢやないのか？　しかし事實はさうなつてはゐない。組合はなんだかんだと言つてはそれを地主に負擔させてゐる。それから今の出來秋に返すといふことだつて、きちんきちん返すといふことは曾つてしてゐないものね。どうしても出來ないといふ時でなくつてもね。そのほかにもいろいろな名目で資金の融通を受けてゐる。個人的にも、積立てした救助金では足りなくて、地主に泣きついて借金してゐる。これらは全部合はしてみればすゐぶん大きな借金だ。困つてどうにも仕方がなくて、といふよりは、何かかう……ちよつと習慣的な感じなんだな。そしてわしがこれではならぬと言ふのは、最初からの規定による借入れではなくて、かういふ、いはば臨時の借金に、組合の經營のじつに大きな部分が依存してゐるといふことなんだよ。これらはじつに頼りにならぬものに全身を預けてゐるので、あぶないことだから

ね。それを、さういふ助けをあたりまへのことのやうに考へるやうになつて來てゐる……豫算を立てる時だつて、言はず語らずのうちに、さういふものをアテにしてゐる氣持が、おたがひの腹のなかにあるんだね。

わしはかう言つたふうのことを根本からあらためていかねばならぬと思ふんだよ。ある句切りをつけるんだ。ここまではいい。しかしここからさきは絶對に助けは借りぬ、といふ句切りだね。その線を守るためには餓ゑたつていい、といふ覺悟だよ。さうしなくつちや實力も鍛へられないし、われわれの建設だつて益々遠のいてゆくばりだと思ふんだ。みんなで申し合はして、おたがひにもつと自分をひきしめることだな。……細谷さん、決してあんたのことを言ふんぢやなし、あんたひとりの問題でもないんだが、たとへば、今の臨時の借入れといふことだつて、組合のものも個人のものも、あんたの腹一つできまる、あんたが突つぱねりや、それつきり、といふところだつてずゐぶんあるんだからね。

「ばかに殊勝な考へになつたものだね。」細谷はにやりと笑つた。「出してくれにや仕方がないさ。しかし、出してくれてゐるんだからね。出してくれるぶんは出してもらつたつていいぢやないか。向うは持つてゐる人なんだから。」

「しかしそれはみな、われわれの上にのしかかるじつに大きな、重い負擔になつて來るんだからね。しかも現實にその重さに苦しまねばならぬのは、もうすぐのことなんだから。」

「それは君みたいになんでもさう几帳面に考へりやさうさ。」と、彼はまた同じやうな笑ひをもらした。「……しかし何もさう杓子定規にばかり考へる必要はないからな。一度時をきめたからつて、話をしてのばしてもらふつてことだつて何もできないときまつたことぢやないんだし。」

「さういふ物質上の負擔もだが、さういふことではいつまでたつても一本立ちにはなれぬからね。こつちの言ふ通りになる中はさうさせにや損だ、といふやうな精神ではね。」

三十三

二人はそれきりしばらくだまつた。なんとなく氣まづい空氣が二人の間に流れた。

「杉原君、」と、細谷が言つた。「君なんぞは、まだまだ、いはゆるインテリといふやつだねえ。百姓は、君みたやうな、さういふものの考へ方はしないものだよ。」

杉原は、思はずつきさされたやうに、ぎくりとした。

「根つからの百姓はね、持つてるものに對してそんな遠慮な氣持なんぞは持たぬものだよ。」

杉原はだまつてゐた。

少ししてから彼は言つた。

「こつちの言ふ通りに出してくれてるうちはいいとして、出してくれなくなつたらどうするかね？」

「それはまたその時のことだよ。實際に問題になつて來た時に考へたらいいぢやないかね。……そんなことより、相談したいことがあるんだがね……」と、細谷は、訪ねて來た用向きにふれて行かうとした。

「ところが、それが、もう目の前の問題になつて來てゐると思ふんだがね。考へるに早すぎるどころか、おそいぐらゐに。」

「といふと？」

「來月のはじめ、川島に逢ふね、この報告書を持つて行つて。その時おそらくさういふことが、具體的に問題になつてくると思ふんだよ。」

「そりや、話は出るだらうが。」

「川島が、報告書を出せといつて來たのはね、冷害對策を考へる——さつきあんたが言つたやうな必要からだけとはわしは思はないんだよ。もつと彼としてもさしせまつた必要からなんだと思ふ。おれはね、細谷さん、川島は、農場の經營について今までとはちがつたいはば强硬な態度で出てくると思ふよ。今までのやうなルーズな關係は許さぬ、といふ態度で出てくると思ふよ。それは今度逢ふ時にさうかどうか、それはわからぬけれどもね。おそらく今度の經營年度までには。」

「强硬な態度つて？」

「資金の融通はやめるだらうし、借金は規定どほり取り立てるのさ。」

「あの川島の旦那が、しかも冷害のあつた年にかね？」

細谷はあざわらふやうな笑ひをもらした。

「君の想像かね、それは。」

「それは想像だがね。しかし何も根のない想像ぢやないよ。わしは北海道だから知る機會があるわけだがね、川島の家の事業はもう昔のやうなものぢやないんだよ。この頃、整理にかかつてゐるんだよ。」

杉原はさう言つて、彼の知つてゐる川島の家の事業の內情について說明した。

「それや川島さんはいい人さ。溫情的な態度以外にはとれぬやうな人さ。しかしあんたもさつき言つたぢやないかね、なにもかにも主人の一存といふわけにはいかぬだらうと。その通りなんだ。それどころかこの頃では主人には何一つ任しちやおけぬ、といふところまで行つてるんぢやないだらうかね？　外國の大學なんか出てゐたつて、あの人は決して事業家なんぞぢやないからね。さういふことははじめからわかつてゐたらうが、何しろ總本家の當主がやるといふものをやらせぬわけにはいかない。……が、もうどんなものかといふことが、本人にも周圍の人間にもはつきりわかつて來たんだよ。それで退陣さ。當主たる地位はどうにもなるまいが、新しがつてゐた彼のやり方だね。わしはさう見てゐるんだ。」

細谷の顔ははじめて不安な緊張を示して來た。

「親戚や番頭連のなかにはしよつぱい連中がゐるからねえ。だまつて見てゐるわけなんかないよ。……たとへばわしがこの農場に來るについて世話になつた原口ね。あの男なんかは、東北の痩せつこけた土地に資本を注ぎこんで何になるといつて、最も強硬な反對者の一人なんだよ。わしがこつちへ來たいといつた時なんかも、馬鹿なことを、と言つてわらつて相手にしなかつたんだが、無理にたのんで來たやうなわけだつた。……さういふやうな連中が何人もゐる。今までは齒がゆいやうな思ひをして見てゐただらうが、自分の主人がそろそろぼろを出しはじめたのを見て、それ見たことか、といふやうなもんだ。さうして彼等が乘り出してくるとすると、わしや、相當厄介なことになると思ふんだ。われわれの共同組合も、少くとも今までのやうな氣持ではやつて行けぬと思ふんだよ。」

「ふむ……」と、小心な細谷は、強い實感で高まつてくる不安のいろをもはやかくすことはできなかつた。

「今急にさういふことにでもなると、弱つたことになるが……實はね、組合内部にもまたぶつくさいふものが出て來たんで、それについて少し相談しようと思つて來たんだがね。内にそんな聲がある時に、外の方からそんな風に攻め立てられでもするとねえ……」

「ぶつくさ言ふものがあるつてどんなこと？」

「いや、ね、何も特別なこつちやない。今までにもう何度も聞いたやつだ。共同經營に對する不滿さ」

「またか！」と、杉原は思はず言つた。

「冷害對策といふことで、さすがに緊張して、しばらくはそんなことを言ひ出すものもなかつたんだが、一段落ついて、しかもさほどの被害でもなかつたと思ふと、ぼツとすると同時に今までおさへてゐたやつが又ぞろ頭を持ちあげて來たんだね。じつに厄介な連中だ！」

「誰かやつて來たのかい？」

「わしんとこへ直接愚圖々々言ひに來たのは、高橋に梶野に山本の三人だが、三人はいはば代表ともいふやうな恰好なんで、外にもむろんおんなじ考への者がたくさんゐるわけさね。」

「一體彼等はどういふことを言つてゐるのかね？」

「いろんなことを言つてゐるが、結局は、所得の分配に對する不滿だといつていいね。出役勞働の能力の算定が先づ正確を期し得られぬといふ。だからそれを唯一の規準としてゐる賃銀は公平だといふわけにはいかぬといふ。それから各戸平等の戸別分配に對しては、家族勞働力の多い家が不平なんだね。おれたちはたくさんの勞働力を出してゐるぢやないか、といふのだ。戸別分配と、勞働力を基準とする分配と、兩樣にしてゐる意義なり精神なりを說いてやつても聞かないんだよ。たくさん勞働力を出す家は、各戸平等の分配といふと、ただそれだけでもう自分たちが何

か損をしてゐるやうな、不公平だ、といふ氣になるらしいんだね。」
「ふうむ。」と、杉原は考へこんだ。
動搖はどんな形であらはれて來るだらう、と小池と話し合つたのは、ついをととひのことではないか。杉原が彼等の決意をうながすための何の働きかけもまだせぬうちに、動搖はもうそんなやうな形で向うからやつて來た。
「それで彼等は一體どうしろといふんだね？」
「どうしろと言つたつて……たとへば、今の戸別分配について言へば、全所得のうち、この方法による分配の率が高すぎるとか、なんとか言つてゐるが、――高すぎるんならそんなら低くすればば納得するかといふと決してさうぢやないんだよ。奴等の腹は、結局どんな形のものにしろ、共同經營そのものがいやなんだ。なんとかして個人經營に歸りたいんだ。それでなんだかんだと不平のタネをつけては難くせをつけて來るんだ。」
「すると、共同經營をつづけてゐる限り、それはやまぬ、といふわけかね？」
「まあ、さうだな。さう思つて、ふんふん言つて聞き流すつもりでゐるんだがね……」
「なんといふことだ。今年の冷害で、ほかの地方や村はあんな慘憺たる目にあつたのに、われわれの部落だけ、ほとんど言ふに足りない、こんな程度のことですんだといふのは、ほかの何が原因でもない、ただ共同經營の力によるものだ、といふことさへもわからぬ連中なのか。」

杉原は憤懣と情なさと寂しさとをこめて言つた。
「……それで新しい年度の總會がもうやがて來るから、それまでにといふんで、準備工作のつもりで動きはじめたんだよ。」
「今度の總會は、こりやもめるね。」
「うん、さうだらうと思ふなあ。」
「こなひだはそんなやうな氣配も見えなかつたが……群野やなんかとも話し合つて見たかね？」
「いや、まだだ。」
「今度四五人で一度寄つてみるかね？」
「それもいいが……しかし思ひがけぬものが高橋や梶野の肩を持つてゐないとは限らないんだから。誰がどういふ腹でゐるもんだか、どうもわしにはよくわからないんだ。」
「内にかういふ問題がおこる。そこへ外からさつき話し合つたやうな川島の問題がもしもぶつかつて來るやうなことになると……」
じつに容易ならぬ感じでそれが二人の胸に迫つた。内崩瓦解といふやうな言葉が實感をもつて迫つた。
「おたがひにしつかりしようぜ、細谷さん。」
杉原は心からさう言つた。しかし彼にはなんとしても細谷その人が頼りなげに見えてならなか

つた。
細谷はだまつて、さつき下においた報告書をまたとりあげた。彼は新しい眼でそれを見なほさねばならぬもののやうであつた。
「組合の經營は、さつき君が話したやうなものとして、ここには書かれてゐるわけだね？」
「うん、さうなんだ。さういふ弱い基礎の上に立つたものといふことを、敢て包まず、はつきりと書いておいたんだが。」
「川島の番頭たちに口實を與へる材料になりはしないかね？」
細谷は自信なげに頁をめくつてゐた。
「どうせ隱されるもんぢやなしね。すべてをはつきりさせて、その上で新しい關係を結んだ方がいいと思ふんだ。」
「それもさうだが……しかし、これはこのままでは縣の農務課には見せられはしないね。」
「なぜ？」
「なぜつて、農務課は、共同經營の模範事例として求めてるんだものね。」
「いいぢやないかね、これで。冷害對策はたしかに模範事例だものね。」
なほいろいろと話をして夜ふけて細谷は歸つて行つた。
「これは借りてゆく」と言つて報告書の草案は持つて行つた。

お前なんぞはまだインテリだ、百姓はそんな風な考へ方はせぬものだ、と言はれた時のどきツとした氣持が、いつまでも心の底に殘つてゐた。

三十四

月があらたまつて間もなくのある日、川島からH市着の通知が來た。何日何時から逢ひたいと言つて、逢ふ場所の料亭の名もしるしてあつた。
手紙は細谷あてに來たのだが、その時、杉原はその家へ行つて話してゐて、配達された手紙を細谷と一緒に見た。
「川島からだ。」
さう言つて、細谷が封を切り、見終るとだまつて杉原に渡した。受けとつて杉原もだまつてその簡單な文面に眼を通した。
「あさつてだね。」と、細谷は何か考へてゐた。
杉原はその手紙を手に取つた時から、おや、と思ふことがあつた。簡單な文面からではない。筆蹟からである。それは川島自身の手ではない。H市在住の川島家の番頭の、兒玉のそれでもないが、それには見おぼえがある。
「原口が來てゐるんだね。」

「え？」
「一緒について來たんだね、原口が。」
「原口？」と、細谷はまだ解せぬ樣子である。
「これは原口の字だよ。彼が書いたんだ。ついて來たんだね、一緒に。」
細谷も原口には逢つたことがある。原口と大橋、この二人は川島の家で、先代から子飼ひの最も有力な番頭である。
原口が主人について來たといふことがわかつても、細谷は、ただ、さうか、と思つて聞くだけのやうに見えた。主人の旅行に番頭が誰かかれかついてあるくのはいつものことで不思議はないと思つてゐるやうであつた。しかし杉原はちがつた。彼は原口がどのやうな人物であるか、主家の經營について日頃どのやうな意見を持つてゐるものであるかといふことを知つてゐた。原口が一緒だといふことに特別なものを感じ、かねてからの想像と危惧がいよいよたしかだといふことを感じないわけにはいかなかつたのである。
しかし、彼はまた一方には一種の氣易さも感じた。何かたのむ心、希望といふものも感じた。たとへばついて來たものが原口でなく大橋であるといふ場合よりもずつと心がらくであつた。原口と杉原とはその鄕里において、家と家とが知り合つてゐる間がらである。杉原自身、この農場へはいることになつたのは、原口の世話によるものである。

さういふ緣故にすがつて何かものを言ふといふ筋合の事がらではないといふことはわかつてゐる。また原口がそんなあまい人間ではなく、公私を混同する人間でもない、主家を思ふ番頭としての彼はきびしい人間だといふこともわかつてゐる。が、それにもかかはらず彼はやはり氣易さとたのむ心とを感じたのである。
「なんのこともなければいいがね。」
細谷もさすがに心配さうに言つた。

三十五

今年はいつもの年よりも寒さの來ることが早いやうであつた。前の日の日暮れ頃から白いものがチラチラと落ちて來てゐた。夜ねる前に杉原は眞暗な外へ出て、空を仰いだ。冷たいものがさらさらと顏にかかつた。
「まだ降つてる？」と、もどつて來た時ノブが訊いた。
「うん。」
「明日は出かけるんでせう？」
「うん。」
さうして寢て、朝起きた時、野にも山にも白いものがうつすらとつもつてゐた。それは初雪で

あつた。

雪はもうやんで、今朝の空は思ひ切り青く、高く澄んでゐた。日向はあたたかく、軒からしづくが音を立てて垂れはじめてゐた。

杉原に細谷の二人は、じとじとして來た道の泥を踏んで、バスの通つてゐる道の方へと急いだ。このバスが通るのも、もうここしばらくの間のことである。

汽車の窓を通して照る冬の日はあたたかかつた。箱のなかには乘客も少なかつた。動き出して間もなくとまつた驛から乘つたカクマキを着て籠をしよつた女が、籠のなかから、打身のあとが黑くなつた落ち林檎を取り出すと、皮もむかずにぼそぼそ食ひはじめた。腐つてやはらかくなつた林檎の實を、齒が拔けてゐるのでしやぶるやうにして汁を吸つてゐる。兩の眼が赤くひどくただれてゐる。

杉原の近くには、どつちも揃つてシベリヤの住人がかぶるやうなもくもくした毛の帽子をかぶり、軍人が肩からかけてゐるやうな、外側に赤い色鉛筆などはさむところがある革の鞄を持つた二人連れがゐて、膝の上に、五萬分の一の地圖や、大きな判で割印のある書類の綴ぢ込みなどを一ぱいにひろげて、ひそひそ聲で話し合つたり、不意に大聲で笑つたりしてゐた。

杉原と細谷とは、雪がとけてゆく窓外の風景をまぶしさうに見たり、聞くともなしに山師らしい二人づれのひそひそごゑに氣をとられたりして、彼等どうしはあまり口をきかなかつた。

「今年はどうやら雪が早いやうだね。」

「うん、去年は十日すぎ、――たしか十二日の晩からだつたからな。」

と細谷は、さういふやうなことについてはこまかなことまでもよくおぼえてゐる男である。

「こんなに早く雪が來て、救農土木工事なんか一體どうなるんだらう。」

河川や道路の改修工事につき、いろいろ聲はあがつてゐたが、彼等の村ではまだ仕事ははじまつてゐなかつた。どの場所をどう工事するかといふことについての、計畫の根本が上の方でまだきまつてゐないのである。

「なにを愚圖々々してゐるもんだかね。今度も、さア始めろと言はれた時にはもう雪が積つてゐるといふやうなことになるんだらうよ。畚を二た擔ぎか三擔ぎしたらもう中止で、また來年の春からといふことになるんだらう。」

しかし工事に出なければならぬやうな多くの人々にとつての問題は、その冬の間をどうして過さうかといふことなのだ。

二人はそのやうな話を、時々思ひだしたやうにぽつりぽつりしながら汽車にゆられて行つた。

三十六

默しがちなのはやはり心にかかることがあるからであつた。

川島と逢ふ場所になつてゐる料亭はH市の町はづれにあつた。二人は二階へ通された。その部屋からは松や杉のこんもりとした森の向うに、古い寺の五重塔の半分から上が望み見られた。背景になつてゐる山は、濶葉樹の葉が落ち盡し、紅みがかつた落ちついた紫いろで、どつしりした重量感で非常に近く眺められた。

二人が通つたとき、部屋には誰もゐなかつた。が、席に着くとすぐに兒玉が上つて來た。彼は前から來てゐて、用事でちよつと下へ行つてゐたのだつた。

「やあ、ようこそ。」と兒玉は言つた。「ついさつき電話がありましてね。旦那ももうすぐ見えられるさうですから。」

「わたしも旦那の來る前に、もう一度あんたのとこへ伺はにやならんとしよつちゆう思つてゐながら、ついどうも自分の仕事がせはしないもんだからね。……それに今年は思ひがけなく被害をまぬがれたのを見てすつかり安心しつちまつたもんだから。」と、兒玉は笑つた。

兒玉は町で大きな雜貨商をいとなんでゐる。彼の家は古い代から川島の家から恩顧を受けて來たものである。秋の收穫直後に兒玉は一度村へ來て、樣子を見て歸つたのであつた。

「いや、思ひがけなく、などといふと、杉原さんにはすまんことになりますがね。」と、彼は杉原の方を見て、また笑つた。「杉原さんにはなにからなにまでちやんと見通しのついてゐたことなんだから……」

彼は愛想笑ひをした。

細谷と兒玉との間に、その後の村の話などが、雜談風にとりかはされた。それは全く雜談風に、であつた。深く、突つ込んで話のなかへはいつてゆく、といふことがなんとなく兩者の氣持の上で避けられてゐるやうに感じられるのであつた。細谷に、さういふ氣持が見られるといふのはわかる。しかし兒玉までがそのやうであるといふのは？

杉原は、そこからもある一つことを感じ、想像せずにはゐられぬのだつた。

「N――村なんぞぢや、二百町餘りの耕地全部につき、免租を申請したつていふぢやないかね。」

「あそこいらはひどかつたでせうな。せめて薯だけでもよかつたら助かつたでせうが。あそこいらは毎年薯をうんととるところで……それが、ベト病といふ奴でまるでだめだつたんだから。」

「拂下米の狀態なんぞはどんな風なのかね？」

「ええ。二三日前にも役場さ行つて見ましたら、小さな米の袋――あれは一升五合もありますかねえ――が四十ばかり來てゐましたが。」

「組合の方はあれの世話にならなくつてもいいんだから、何しろ結構なことだ。」

「村で一番困つてゐるのは稅金の集らぬことですよ。救農土木工事なんぞやつて見たところで村の負擔額が出せるわけぢやなし。給料の未拂ひがあんまりたまつたもんだから教員も仕方なく逃げだすといつたやうなわけで。かと言つて、差押へができるわけのもんぢやありませんしな。」

「よしんば押へて見たところで、さかさにして振つて見たつて何一つ出る氣づかひがありやしまいし。」
「原口さん、お出でになつたんですか？」と、杉原は訊いた。
「ええ、旦那と一緒です。」と、兒玉は答へた。
彼等がさうやつて話をしてしばらくたつた時、おもてに自動車のとまる音がした。それを聞きつけると、兒玉はすぐに立つて行つた。
兒玉が案内して、川島と原口とがあがつて來た。席に着いて、人々は互ひに挨拶を交し合つた。川島は和服姿でくつろいだ風をしてゐた。いつものやうに溫和な目もと口もとであつたが、濃い疲勞の色が面にうかんでゐるのを杉原は見逃さなかつた。そしてそれは決してさう長くもない旅の疲れなどでないことを感じた。
丁度晝の食事時にあたつてゐた。久濶を述べあつてゐるうちに、女たちが次々に膳を運んで來た。田舍町の、名のある料亭にふさはしいやうな仰々しさとどぎつい趣味とが食器のはてにまでもあらはれてゐた。
酒がまはつて、彼等は程よい醉ひを感じて來た。膳が下げられ、食後の果物が出る頃に、川島が言つた。
「杉原君、この秋は君方の力で農場の方の被害も少なかつたさうで。」

ややあらたまつた口調だつた。
「いや……」と、杉原は恐縮して言つた。
「じつは氣にもなつてゐたし、秋前には一度こつちの方へ廻つて來ようとは思つてゐたのだが、なにせ、忙しくつてね。春以來のことは、細谷君から手紙でいろいろと聞いてはゐたが。」
「君ももうすつかり農場の生活には慣れたやうだね。」と、原口が笑顏を向けて來た。「わしは自分で君を推薦しながら、腹では危なつかしいと思つて見てゐたのだが。」
「私は畑の方の仕事は、免除してもらつてゐるやうなわけなので……。どんな理由からにしろ、そんなことぢやいけない。來年からは變へようと思つてゐるのですが。」
「いや、組合には杉原君のやうな人がどうしても一人はゐてくれなけりや、困るんです。」と、細谷が言つた。
原口はノブのことも尋ねた。そして故郷にゐる杉原の肉親の消息を傳へた。故郷の町の近頃の話題の二三について話したりした。さういふ時の彼は至極の好々爺で、腹に一物持つてこの場にのぞんでゐる人のやうにも見えなかつた。
いつも非常に元氣な男だが、よく見ると彼もずゐぶん年をとつて來てゐた。ほんの子供の時から、杉原は原口を見知つてゐる。川島の家の北海道での最初の事業は、金貸し業と土木事業とだつた。その後だんだん新しい事業にまでも手をのばして行つた。それに從つて土木の親方然とし

てゐた原口も普通の紳士らしくなつて行つた。
「僕がはじめから言つてゐたことだが、あの地方で水田をやるなどといふことは、策を得たものではないのぢやないかね。絶えず危險にさらされてびくびくしてゐなけりやならぬのだから。」と川島が言つた。
「しかし、食糧を自給しうるだけの水田といふものは、どうしてもなければなりませんから。」と細谷が言つた。
「陸稻はどうなのだい？」
「をかぼといふ奴がまたじつに天候に支配される奴でして。それにあいつは勞力をひどく食ひます。中耕の手をちよつと拔きますと、雜草に追ひ立てられるやうなことになりまして。」
「そりや、何作物だつてさうだらう。」
「はい。」
「をかぼは今年もやりましたが、成績は割合よかつたのです。をかぼはしける年の方が却つていと言はれてゐるやうですが。」杉原が言つた。
「ふん。どうして？」
「小池君から聞いたのですが、未熟堆肥を下に入れて、鎭壓が不十分なものだから、乾く年には一層乾いてをかぼはだめだといふのです。それでしけるやうな年には却つて反對にいいといふの

ですが。」
「ふん。」
「細谷君、君の送つてくれた組合の事業報告書は見ましたよ。」と、原口が言つた。
「はあ。」
杉原の書いた事業報告書は細谷がなほよく見たいといふので持つて歸つた。すると歸つたその夜、家には川島からの手紙が屆いてゐて、報告書はできたか、至急こつちへ送るやうにして欲しい、と書いてあつた。それで急に謄寫版に刷つて送つたのであつた。
「報告書、報告書つて一體なんだらう。」
さうその時言つて細谷はいらいらした不滿を示すことで臆病な心をあらはした。報告書など、こつちへ來たついでに、ちらと眼を通す程度のことと思つてゐたかつた。それを發つて來る前にわざわざ送らせるといふのはいかにもそれに重きをおき、ゆつくり時間をかけて檢討したいと言つてゐるやうで、彼を刺戟した。杉原が言つてゐるやうな危惧を、感じまいとしてもだめであつた。
「これはずゐぶん詳しく書いてあるやうだが、しかしよくわからない、曖昧なところもあるね。」
と言つて原口は、内かくしから封筒にはいつた報告書をとりだし、卓子の上におき、折目をのばした。それからそれをめくつた。それをめくる彼の指はおそろしく太かつた。農夫である細谷

の指なども及ばぬほどに太かつた。

三十七

「ひとつ説明してもらはう。」

彼は何か言ひにくいことを、思ひ切つて切り出したといふやうには言はなかつた。それだけに杉原は壓されるものを感じた。

「それを實際に筆をとつて書いたのは私ですから。」と、杉原は言つた。

「ふむ。」

原口が報告書の頁をめくつたところには、赤鉛筆でしるしなどがしてあつた。

「わしは今まで、農場の方のことには一向關係せずに來たわけだが、社長にお聞きすると、今までこの程度の報告書も、一度も出したことはなかつたさうぢやないか。」

社長とは、いふまでもなく川島のことである。杉原も細谷もだまつてゐた。

「兒玉君などは土地の人なんだから、組合のことは一から十までよくおわかりなんだらうけれども。」

原口は皮肉たつぷりに言つた。溫厚な兒玉は恐縮して小さくなつてゐた。農場のことは一面兒玉の責任であり義務でもあつた。この土地での川島の代理人として、彼は組合を監視もしくは指

導していかなければならぬ地位にある人間なのであつた。しかし實際は年に二度か三度、部落へ來て、細谷ととりとめない話をして歸つてゆくといふ程度にすぎなかつたのである。

「記帳生活といふことは、普通の百姓の間にさへこの頃はやかましく言はれてゐることだといふぢやないか。それは經營の合理化の、健實な經營の基礎となるものだからね。まして共同經營組合といふからには、その點がしつかりしてゐなくつちや。」

「記帳はちやんとしてゐるのですが、整理の方がどうも……」と、細谷が言つた。

「整理が出來てゐなくつちや、記帳そのものもないとおなじぢやないか。」

「はあ。どうも組合經營になつてからまだ間がないものですから、つい……」

「間がなければこそ、一層さういふことはだいじですよ。それがなくて一體なにに基づいて次年度の計畫を立てるんです？　あるひはかういふ風に整理したかたちのものができてゐなくても、自分たち自身にはちやんとわかつてゐるから一向差支へないと言はれるかも知れない。しかし共同組合の仕事が君たちだけのものであり、君たちがもう一本立ちになつてゐるといふならそれでいいかも知れんが、まだそこまでいつてはゐないんだからね。君たちの仕事が川島の事業の一部だといふことを忘れちやいけない。」

彼は釘を一本、急所に打ち込むやうに言つた。

「よくわからない、曖昧などと言つたが、それはこの報告書をいきなり見せられたもののこと

で、わしには何もかもよくわかつてゐるよ。今さらその點について君方に說明してもらふまでもないことさ。曖昧だといふのは當然書かれるべきものが書かれてゐないからのことなんだが、その書かれてゐないもののことだつて、なぜ書かれなかつたかといふことだつて、わしにはよくわかつてゐるさ。」

杉原は顏の赤らむやうな思ひをした。二三の數字などについて、その報告書にはわざと省いてあるものがあつた。それは最初から書かれなかつたものではなかつた。小池や細谷に見せたときには書かれてゐたのだが、いざ謄寫版ずりにするといふ時になつて、細谷の意見に從つて削つたのだつた。そんなことで一時を糊塗しよう、また、できるなどと思つたわけではなかつたのだが……。

「べつにあらたまつて說明してもらふまでもないことだがね。」と原口は繰り返した。「經營組合の規約といふものがここにある。收支決算その他についてここにはとりきめがある。出資者と組合側との間の約束についてもここに明かになつてゐる。さういふ取りきめに、君方の今までのやり方といふものはまるでその違反の上に組合の經濟が成り立つてゐるやうなものぢやないか。そのことがこの報告書にはちやんとあらはれてゐる。それぢやどうにもならんぢやないか？　君方自身がつくつた規約を、君方自身が破つてゐるのだ。」

細谷も杉原も何一つ言へなかつた。兒玉も言へなかつた。そして川島も全く默つたままであつ

た。上座に坐つて默りこくつてゐる彼は、まるで床の間の置物のやうに無能に見えた。

「よしんば組合の經營がうまく行つてゐるとしても、さういふやり方によつてはじめてさうだといふのではまことに頼りないことぢやないか。一體そんなやうなことで、いつまでやつていけると思つてゐたのだえ？」

「かういふことではならぬと、そろそろ氣づきはじめてゐたのです。いつまでもお世話にならずに組合自身の力で獨立しうるやうにならなければならぬと自覺しはじめて來たところなのですが……。なにぶん組合經營になつて間もないことですし、いろいろと面白くないことがつづいたりしたものですから。」と、杉原は言つた。

「自分自身で踏ん切りをつけてかかるんでなくつちや、いつまでたつたつて、これでいいといふ時が來るもんぢやない。……一體、君方は恩に狎れすぎてゐるよ。」と、原口の言葉は鋭かつた。

「口やかましくなく、なんでもうんうんと應じてくれる寬大な主人を持つてゐると思へば、それだけ自分をおさへ、控へ目になるといふのが人間として當りまへの態度だと思ふがどうかね？　それを主人がさうだといふので却つてそこにつけこむ……さういふ腹ではないかも知れないが、實際にはそれとおんなじことになつて、とれるだけとつてやれといふやうなことでは面白くないよ。そんなことでなけりややつていけぬ組合だといふならば、組合なんぞ、解散してしまつた方がいいのだ。

……それでわしに提案があるのだが、……いや、提案などといふのでなしに、これはどうしてもそのまま受けとつてもらはにやならぬことなのだが、今までのやうなやり方は、來年度からきつぱり打ち切つて、新しく踏み出してもらひたいのだ。すべて規約にもとづいてやつてもらひたい。營農資金を年度のはじめに融通し、出來秋に返してもらふといふことも――實際にはそんな風になつてはゐないが――來年度からは打ち切る。農具その他の補充も自分自身の力でやつて欲しい。組合員の個人的な借金の申出なども今後は應ずるわけにはいかない。元來さういふ場合のために積立金といふものはあるので、その積立金の充實をはからずに農場主にたよつて來るなどは全く組合精神を忘れたものと言はんけりやならない。」

「おつしやることは一々ごもつともです。私共としてもいつまでも御好意にあまえ、今までのやうにルーズな關係ではゐられぬと、よりより話し合つてゐたところなのですから。今お聞かせ下すつたことはその通り來年度からは實行致したいと存じますが、ただ、年度はじめの營農資金の貸與といふことだけは、どうか今まで通りにしていただきたいと存じますが。無論出來秋の返濟については今までのやうなことは致しません。かたく我々が責任を持ちますから。」と杉原は言つた。

秋に米を賣つて返すといふことが事實上不可能といふ時もないではなかつた。しかし又、返せば返せるものを、少しぐらゐ殘したところでやかましく言はれぬのがわかつてゐるのに何も眞正直に皆濟することはない、といふ腹があつて殘したといふこともあるのであつた。

原口はむづかしい顏をしてゐた。

「そりやならん。さういふことを言つてゐたらきりがない。そりや君方の方にもいろいろ事情はあるだらうが、さういふ事情なんていふものはいつまでたつてもなくなるもんぢやなし、これでいいといふ時が來るわけのもんぢやないのだから。」

杉原はなほおして二言三言いつた。しかし原口は決して動じなかつた。

「その代り、今まで貸しになつてゐるぶんは今すぐにといふやうなことは言はない。それの返濟方法については、いづれだんだんに君方と協議しよう。わしはなにもできんことを無理にしろと言ふんぢやないんだから。わしは何も新しく君方に要求はしてゐない。いつの間にかするずるとだらしなくなつていつたのをあらためて、最初の約束にもどらうと言つてゐるだけの事なんだ。」

さう彼は言つて、

「君等がほんたうに更生するためには、却つて今にして人にたよることをやめるといふことが必要だらう。それでやれぬやうな組合なら解散してしまつた方がいいのだ。」と、再び繰り返し極言した。

杉原たちが豫想してゐたと全くおなじ結果になつてしまつた。覺悟してゐたことだし、またとへ先方からさう言ひ出されなくても自發的にだんだんさうしていかねばならぬと考へてゐたことだ。しかしいざはつきりとそのやうに宣告されてみると、動搖を感ぜぬわけにはいかない。

彼等はしばらくだまつてゐた。

今まで一言も口をきかなかつた川島がその時、はじめて口をひらいた。

「原口君からいろいろと話があつたが、責任はむろん君方にのみあるのではなくて、僕にもあるのだ。共同組合的な經營組織をとることをしきりにすすめ、さうさせたのは僕なんだから。僕はアメリカとか北海道とかを見てゐるもんだから、東北地方のあんな地帶でだつてもう少しなんとかやりやうがあるんぢやないかといふことをはじめ考へた。それで入植して來た諸君にいろいろと僕の考へを言つて見たりしたもんだが、その人たちは受け入れない。やつぱり從來どほりの日本の百姓のやり方でやつて行かうとする。しかし僕はさういふ人々をどうでもかうでも自分の考へによつて引きずつて行くといふほどの力も持たなかつた。それに僕自身農場に止まつて、實行しなければならぬことだからね。ただ方針を與へるといふだけではできることぢやない。はじめはごく少數の人で廣い耕地をといふ考へだつたが、普通のやり方といふことになるとそれではいけなくて、入植者の數もふえてゆくことになつた。しかしただそれだけならば、僕があんな土地を引き受けたといふことの意味も全然ないわけなので、——僕は多少でも思ひ描いてゐるところがあればこそ引き受けたんだからね——共同經營組合の組織でやつてゆくといふところにその意義を見出したわけなんだ。この提案は多少のゴタゴタはあつたが、熱心な支持者を得てともかく實現した。そしてどうにかかうにか今日までやつて來たわけなんだが……。そしてやうやくどうにか軌道に乘りかけて來たといふときに、僕が手を引くといふのは全く相ひすまぬことに思ふんだが、どうもいろんな事情から今までのやうな形で援助してゆくといふことがむづかしくなつて來たもんだからね。」

彼はいかにもすまなさうに、言ひにくさうに言つた。

「しかし僕はこれからとてもできるだけのことはしたいと思つてゐる。僕は決してみんながやつていけぬことはないと思つてゐるのだ。」

原口は露骨に苦々しげな顏をして聞いてゐた。川島の言葉には、原口への反撥の感情があらはれてゐた。杉原は複雜なものを感じた。農場の問題が彼等の間にとりあげられ、このやうな形であらはれて來るまでの、いろんないきさつといふものが眼に見えるやうに思つた。

「それから今年の年貢のことは、この間細谷君からも手紙をもらつたが、君たちの特別な努力であれだけの減收に食ひ止め得たので、さういふ風にしてとれたものを、普通にとれたものと同じやうに考へてそれに年貢をかけるなどといふことは出來ないことだ。さういふ旦那の特別な思召しから、平年の大體五分作見當と見なして、その割合で引くといふことにしたからどうかそのおつもりで。」

原口が言つた。

それ以上のことを望むといふわけにはいかなかつた。細谷も杉原も、「どうも」と言つて頭を

下げた。
兩者はたがひにもう言ふだけのことは言つてしまつた。まだいろいろとこまかなことは殘つてゐる。しかしそれはあとのことでいい。ともかくきまるべきことはきまつてしまつた。
「ぢやあ、これからまだ會はなきやならぬ人もあるしするから、今日はこれで失禮しよう。」
川島がさう言つて立ち上つた。彼はもはやその場に長くゐることに堪へぬやうであつた。原口も立ち上つた。

三十八

二人を送つてから、あとの三人も間もなくその家を出た。
しばらくだまつて歩いて、三人は町の方へ出て行つた。腰かけて休む店へ立ち寄つた。
「どうも今日は、せつかく出て來てくれたのに。」と、兒玉は自分のせゐででもあるかのやうにしきりに氣の毒がつてゐた。
「川島の家の經濟が面白くないつていふことはあるよ。しかしそればかりぢやないよ。君方に向つてあんなふうに出てくるつていふのはね。原口の一黨が不平だつてこともあるんだよ。川島の事業も手廣くなるにつれて、いろんな新しい連中がはいつて來て、幹部になつてゐるものもある。さういふのは學校出やなんかだから、土方上りの原口なんぞとは合ひつこはないさ。原口に

して見りや、自分の支配の範圍がだんだん狹まつてゆくやうな氣持がする。事實は狹まつたのぢやなくて、ただ彼の支配の及ばぬ新しい範圍が出來て來たといふのにすぎないんだが。青二才共、何をいふ。川島の家をそもそも今日までに築き上げたのは誰の力だといふやうな腹が事毎にある。たまたまこの頃事業のなかに失敗があつたので、えたりかしこしと攻擊しはじめたのさ。あれもいかんこれもいかんといつて、お家の一大事といふやうな顏をしてゐるので、旦那も、先代以來の原口のことゆゑ、一應そのいふことをきかぬわけにはいかないんだよ。旦那はあの通りおとなしい人だからね。」
さういふ原口よりも、彼に引きずりまはされてゐるやうな川島が印象的に心に殘つた。幾分の理想と幾分の善意とを持ち合せながら、行動の力の伴はぬ人間。そのためにすべての仕事が趣味的、道樂的にしか見えぬことになつてしまつてゐるやうな人間。
細谷と杉原とはそこで兒玉と別れた。そして二人は歸りの汽車に乘つた。
彼等は精神に疲勞を感じてゐた。なんともいへぬ後味のわるいやうなものもあつて殘つてゐた。それは、もつとああもいふべきだつた、かうもいふべきだつた、さうしたならばちがつた結果になつたかも知れないといふやうな、かういふ場合にはつきものの未練がましい氣持でもあつた。そのことが彼等を無口にさせた。
「今日のきまり通り、部落のものみんなに話したものかそれとも話さずにゐたものか。」と、細

谷が言つた。
「春の總會までだまつてゐる――總會の席ではじめてはなすか、その前にはなすか、といふことかね？」
「まあ、さういふことだね。」
「そりやどうせわからずにはゐないし、早くわからした方があるひはかへつていいかもしれないね。おそかれ早かれわかることなんだから。早くわかつてみんなの腹がきまつた方がいいかもしれない。……役員に話さないわけにはいかんからな。總會準備のために役員があつまつて相談する。さうすりやそれでもうひろまつて了ふのは當りまへなんだから。」
「……しかし今日のことは當分君とわしだけの腹にをさめておいた方がいいと思ふ。役員にだつて話さずにおいた方がいいよ。動搖が恐ろしいからね。先夜も君に話したやうな空氣が組合内にある時だ。うつかり今日の話なんかしようもんならどんなことになるかもしれやしない。」
「ぢやあ、ひたかくしにかくしておいて、今度の總會の席上でいきなり發表しようつていふのかい？」
「……」
「そんなことをしたら却つてみんなひどく騷ぎ出すだらう。第一それまでには來年度の豫算の原案をつくらなけりやならない。それには役員が何度も集らなけりやならない。そこではどうした

つて事實をありのままに話さないわにはいかないからね。」
「ナニ、豫算は、例年と同じ條件の下でつくつておけばいいよ。」
杉原は細谷の心のうちがよくわからなかつた。彼は一體どんな考へでゐるのか。單に事實に正面からぶつかることを恐れ、回避しようとする心か。それとも何かほかのものか。
どつちにしろ、事ここに至つてもなほ据ゑるべきところに腰を据ゑかねてゐるやうな、思ひきりのわるい細谷の態度に杉原はもどかしさを感じた。
「この間もわしは言つたが……、向うがたとへああいふふうに出て來なくたつて、こつちとして新しい行き方をしなけりやならない時なんだから、發表の時をどうかうといふやうなそんな小細工の間に合ふ時ではないと思ふんだ。」
「小細工？」と言つて、細谷は不愉快さうな顔をして杉原を見た。
杉原はかまはずにつづけた。
「……臭い物に蓋式の考へはもう一切やめなきやならぬと思ふんだ。いつはらぬ内情はこのやうなものだ。責任はみんなにある。今後も今までのやうなことでやつて行つたのではとても立つていかない。みんなが立つていかない。それでここにかういふ新しい方針がある。今後はこれによつて一つやつて行かうではないかといふやうに、誠心を披瀝し、少しもかくし立てすることなくざつくばらんに言つて、しかしそれだけではなく進んでそこに積極的なものを提示して協力を求

めたならば、みんなだつて自分たち自身の問題だ。ぶつぶつ言つてだけをれる筈のもんぢやない、必ず、よし、やらうといふ氣持になつてくれるにちがひないと思ふんだ。」

「新しい方針といふのは？」

「それこそわし等の間で協議し、つくりあげていかうとするものぢやないか。それをつくりあげるためにも、事實は事實としてまつすぐ自分たちも受けとり、人々にも受けとらせねばならない。……わし個人としては少しは考へてゐることもあるがね。まだ成案にはなつてゐないが。要するに、共同經營運用の方針と實際について、もつと科學的にそして現實的に考へることなんだ。今までもうかなりの經驗を積んで來てゐるんだから、その經驗を十分に咀嚼して、なほすべき點はなほし、新しいものをつくつて行くんだ。今まで忙しさにまぎれてさういふ基本的な仕事を怠つて來たからね。……そして、この間聞いたやうな、共同經營についての組合員の不平の根を斷つことだ。」

「なかなかさう口でいふやうに簡單にはね。」と細谷は薄ら笑ひをもらした、「現に君や小池君などは、しよつちゆう、うちの組合員の質がわるいといふやうなことを言つてるぢやないか。」

杉原は思はずどきつとした。細谷のそんなやうなものいひの底にあるものを感じたのである。ぼんやりとしたものではあるが、それは敵意だ。「うちの組合員」といふやうな言ひ方にもその感じはあつた。困難の前に自信を失ひ、窮地に落ち込んだものが、その困難を克服しようとする者

に向つて却つて白い齒をむいて來る女々しさの一つの場合だらうか？

「經營の上でいろいろ改めていくと言つて、どういふことをするのか知らんが、今まで年度はじめに經營資金を持つてかかつたものが、それを持たないでやつていける道でもあるといふのかい？　新しいやり方がいいものだとしても、實際に經濟の上にその結果があらはれて來るのは一年なり二年なり後のことだからね。しかし問題はこの次からの經營のことなんだから。」

今まではとにもかくにも細谷は組合の問題を自分自身のこととして取り上げ考へて來てゐた。しかし今や彼はそれについて、あたかもひと事をでもいふかのやうに言ひ出しはじめてゐる。

「ぢやあ、どうしたらいいといふんだい。あんたの考へでは。」

「何もさう急ぐことはありやしないよ。總會までにはまだ間もあるしすることだからね。」

そして少し間をおいてから細谷はいつた。

「原口はあんな風なことを言つてるがね……それがすぐ實際にさうなるものときめて考へるのもずゐぶん短慮かも知れないぢやないか。川島の旦那は反對なんだからね。だつて出來るだけのことはすると言つてくれたぢやないか。年が明けるまでにはまたどんな風に變つてくるものかわかりやしないからね。」

さうか。彼の眞意はそんなところにあつたのかと、杉原は情ない氣がした。

困難が拔きさしならぬものになつて來るにつれて、このやうな人たちの本質はしだいにばくろ

されてゆく。もたれかかるものなしには、やつてゆく氣もなければ、やつてゆくこともできぬ人たちなのだ。このやうな人達と一緒に仕事をしていかねばならぬ困難を杉原はあらためて感じた。

「それはさうだ。それは川島さんはあいつてくれてゐるが、同じ世話になるにしても、我々はこれからは世話になりやうが今までとはちがはねばならぬと思ふんだ。好意をひつたくる、善意を踏みにじるやうなやり方で援助を受けるといふのではなくて、その好意に値するものになるやうに積極的に努めることによつて、獲得するといふのでなければならない。……たとへばだね。我々がただ手を拱いて、向うがこつちに都合のいいやうに變つてくれるのを待つといふのではなしに、新しい方針を立ててそのなかにこつちの精一杯のところを見せるんだ。この條件の下でこれ以上はもうどうにもやれぬといふぎりぎり一杯のところを示すんだ。我々はかういふ決意で新しくはじめようとしてゐるといふことを具體的に示す。それが誠意といふものだらう。さうすればその誠意に感じて向うもあるひは變つて積極的になつて來てくれるかも知れない。……さういふ風にして受ける援助がほんたうの援助であり、またその受け方だらうと思ふのだが。」

「わしはね、今までの共同經營組合といふものには、どうしても無理なところがあつたと思ふのだ。」

「ふむ。」

「今度のことを機會に當然行き着くところへ行き着くものと思ふのだが……」

「といふと？」

「共同經營をやめて、個人經營にもどることになると思ふのだが。」

「ええ？」と言つて、杉原は思はず細谷の顏を見た。

「さういふ傾向が組合内にあるといふのか、それとも……」

「たしかにあるんだ、それは。」

「そのことはこの間の晩にも聞いたけれども、それに對してあんた自身はどうだといふのかね。さういふ組合員の傾向に對して……」

「わしは物事は何でも自然にさからつてはならぬ。自然にさからつたことは必ず破れると、かうかたく信じてゐるものなのでね。」と、細谷はなんともいへぬ卑屈な、臆病さうな笑ひをもらした。

「組合員がたとひさうだからと言つて、さういふ間違つた傾向が出て來てゐるとすれば、それとたたかつてゆくのが指導者といふものぢやないか。」と、杉原はたかぶつてくる心をおさへながら言つた。

「わしはべつに指導者でもなんでもないよ。組合長といふのは組合員の意志を代表してゆくものにすぎないからね。……組合長としてわしが不適當だといふことになれば、わしは辭職するばかりだよ。」

多くの人間が言ふやうなことを、たうとう彼もまた言ひだした。
「やめて事がすむなんていふもんではないぢやないか。」と、杉原はあやふく呶鳴りたくなるやうな心をおさへて言つた。
「共同經營から個人經營に移ることを、君は間違つた傾向、と言つたが、何もさういふ風にきめられやしないからね。農民生活にとつてどつちが都合がいいかといふことなんだから。實際にはたらいてゐるものが、共同でやることが不便だと言ひ出したとしたらどうにも仕方がないぢやないか。」
「しかし、その不便だ、などといふのは果してどういふことかね。さういふ點をこれからの工夫によつて直していかうといふんぢやないか。ほかのことをいふ必要はない。今年の冷害、それをどうにか乘り切つて、ほかのどこよりも少い被害ですんだといふのは、それはみんな共同組合といふ組織をとつてゐたからこそできたことぢやないか？　どんな立派な方策を立てたところで、てんでんばらばらであつたら、あの效果はあげることができやしなかつたんだからな。」
杉原は口をつぐんだ。彼はしだいに激してゆく自分に氣づいた。この調子で行つたならば、爭ひになることは避けられぬと思つたのである。
この間の晩、組合の内部にぶつぶつ不平の聲が上つてゐると言つて告げに來た時の細谷は、まだ憂ひを持つてゐた。さういふ聲に屈服してはならぬと思つてゐた。ところが、わづか數日の間

に、――といふよりは今日の川島との會見後の一二時間の間に、彼はがらりと變つて了つたのである。
「多少の退團者は豫期してかからねばならぬ！」
杉原は激した心のうちにさう思つた。
車内にはもう日がささなかつた。朝あんなに照つてゐた日は午後になるともう曇つてゐるのであつた。物蔭の窪地には、半ばとけてそのままになつて了つたやうな白いものが殘つてゐた。二人はだまりこんだまま、それぞれの心で外を見てゐた。

三十九

日暮れに、杉原よりも一足早く歸つて待つてゐたノブは心配さうな顏で今日の出先きでのことを聞いた。
「厄介なことになるかも知れないよ。」
と彼は言つて、今日のことを詳しく話して聞かせた。「部落の人たちの言つたりしたりしてゐることで、お前も何か氣づいたことがあつたら知らしてくれ。」
今まではともかく自分と歩調を一つにして進んで來た細谷と自分との間に溝ができたといふことは、彼にとつて大きな打撃であつた。しかもそれは今日の樣子では益々深くなつて行きさうな

感じがするものである。

そして細谷につき從ふものは多いだらう。杉原の同情者は數においても少く、無力な人々だらう。

杉原は何を爲すべきかを思つた。細谷を屈服せしめるために今から行動を起すべきか？　かつての彼はそのやうな時にはただちに「策動」を開始したものであつた。裏面において種々工作する。反對者を打ち倒し、大勢を自分の考へに從へるための地ならしをする。そしてある日忽然として勝利者としてあらはれる。彼はそのやうな意味での政治的な組織的な才能において優秀だとさへ言はれたことのあるものであつた。しかし今彼はそのやうな自分の才能を使はうとは思つてゐない。そのやうな才能は自ら封じ込めて再び用ひようといふ氣はないのである。

裏面工作をやらねばならぬやうな對立者はゐてはならぬし、また事實どこにもゐない。わづか三十戸足らずの小さな部落ではないか。そんな内輪のなかで、そのやうな手を使はねばならぬとすれば、ただそれだけで部落の將來は見え透くだらう。

ほかのことではない、みな自分たち自身のことだ。自分たちの生活を建設するために一番いい方法を見つけ出さうといふのだ。膝をつき合はせて話して、わからぬといふ筈はない。

杉原はその日から共同經營の改善策について心魂を傾けはじめた。

凶作の冬は進みつつあつた。この部落はともかく、他部落にとつては拂下米も一向足しにはな

らなかつた。救農土木工事ははじまつたかと思つたら雪のために止めねばならなかつた。豫算面では多額な金も途中でどこへか消えて了つて、人夫の手にはいる金は日に八十錢だつた。それも地元の負擔の分が拂へぬため、實際に手にはいるのは五十錢にしかならなかつた。

その頃にはもう野には草の根を掘る人々の姿もない。

缺食兒童が多くなつて小學校では一食三錢の給食をはじめた。人買ひの横行や身賣娘のうはさも珍らしくもなく聞くやうになつた。

何もかもおなじだ。何年おきかにやつて來た今までの冷害、凶作の年々に異なる何の新しいことがあるわけではない。

そしてそれに伴つて、上の方での、中央での叫び聲といふものも亦だんだんに高くなつて來た。凶作地を救へといふ聲、凶作對策といふ聲が高くなつて來た。

さまざまな會議。多種多樣な印刷物のはんらん。中央から地方へ、地方から中央への人々のさかんな往來。

そして次のやうなことが「新しく」きまつたと報道された。

一、栽培法は善研究。二、適良種子配給。三、耕種法改善指導。四、凶作防止施設の指導。五、農民精神作興。六、氣象調査。

それから、東北地方の振興方策に關する審議調査のために新しい役所が出來、官制が公布され

た。具體的にはどのやうな仕事をするところかと見ると、

官有林について、移民等について、負擔輕減について、資金融通の方途について、「考慮すること」

と、審議項目のなかにあがつてゐる。

自然科學畑は、今時になつて今年の春からの天候や氣象について、詳細な調査を發表した。そして到底冷害、凶作をまぬがれ得なかつた必然性を、嚴密な科學の立場に立つて論證した。

政黨は大げさな視察團を派遣した。彼等は役場へ寄り、自動車を連ねて村の道を行き、一軒か二軒の農家の前でとまり、ぞろぞろとつながつた彼等は目白押しにならんで入口からちよつとのぞいて見て、視察は一時間足らずで終つた。町へ引き上げて宴會の酒に醉つぱらつた。「地方へ金を落してゆく」と、彼等はいふのである。

特派記者たちの感傷的な美文調は益々高調に達した。ひとりさめてゐるやうなのは社會派だつた。彼等は相も變らず、「冷害といふ自然的災禍もじつは社會的經濟的現象にほかならぬ」といふ原則論を一歩も出ず、すべての技術的對策を、事物の根源にふれぬ改良的な試みだとして嗤ふ底意をちよくちよくほのめかすことで、進歩的な顔をひけらかした。

何といふ退屈なながめであらう。

これらも亦すべてこの前の時と少しも變りはない。

人々は事の起らぬ以前には決して騒がない。警告者はむしろとがめられる。事が起つてしまつてどうにもならなくなつた時にはじめて蜂の巣をつついたやうに騒ぎはじめる。——「今度も亦さうだらう。」と、春に、杉原たちは豫想した。そして多が來た時、それは果してさうであつた。一體幾度このやうな經驗を重ねねばならぬのであらうか。

このやうな社會、このやうな人間の愚かさをまぢかに見ながら、杉原はしかし絶望よりは勇氣を感じた。彼は餘りにも無力な自分を感じた。周圍に限界の壁を息苦しいまでに感じた。しかし彼はその時一種の勇氣にふるひ立つたのである。

この周圍の愚かさに向つて彼はたたかつていかうと思つた。そのたたかひとはしかし直接彼等に力をもつて迫つて行かうといふのではない。彼等を相手取ることはしない。彼等に向つてはむしろ頑強に默りつづける。外へは向はずに內へ向ふ。內へ、——この部落に立てこもる。この部落のなかに自分の熱いこころを燃やす。この部落を育て上げることをもつて、社會への、無言の、最も力强い抗議とする。

部落は決して孤立してゐるものではない。社會の一單位をなしてゐる時、その社會の根本を考へず、ひとり部落をのみ考へたところで、どうなるものでもなからうとは杉原のとらはれぬわけにはいかぬ今までの考へ方であつた。懷疑も動搖もさういふ根から來た。今、彼はさういふ考へを棄てようと思つた。棄てようと思つてすぐに棄て得るものではないにしろ、棄てたいと思つた。

今日の社會の法則。さういふものからむしろどれだけ自由でありうるか、どれだけ自由でどれだけ自立しうるか、――いはば一歩退いた身構へのなかに、彼は自分のたたかひの意志を燃やさうと思つた。

冬の毎日を杉原は妹と一緒に共同作業場へ通つた。そこで繩をなつたり、藁莚を編んだりした。集つて來るものは女たちが多かつた。男たちの多くは、どうにか過すことのできるこの冬、炬燵にうつらうつらして骨休みをしてゐるらしかつた。

繩をなひながら、部落經營についての杉原の構想はしばしば空想的なまでに羽をひろげた。部落が當面してゐる困難については組合員はまだ誰も知らなかつた。川島との會見後一度役員會をひらいたけれどもその時には話は出さなかつた。すべてはまだ杉原と細谷と二人の腹に祕めておかれた。

細谷の心の動きをそれとなく杉原はさぐつてゐる。

それにしても年の明けが待たれた。新しい年度のための總會の日のことが思ひやられた。

四十

ある日の朝、共同作業場ではたらいてゐる杉原のところへ、細谷から使ひが來た。お客さんだからすぐ來て欲しいといふのだつた。杉原が行つてみると、二人の洋服姿の男が上つて休んでゐ

た。彼等のうち一人の方には杉原は見おぼえがあつた。それはこの春、杉原を役所へ呼びつけて叱つた佐久間であつた。杉原はだまつて二人に鄭重な禮をしてそこへ坐つた。

「縣の農務課の加藤さん。」と言つて、細谷は、初對面の、佐久間よりは年上の男を紹介した。加藤は名刺を出して挨拶した。

「佐久間さんは、君、お會ひしたことあつたな？」

佐久間はちらと杉原の方を見た。そしてまた細谷の方を見て、ええ、ええとうなづくやうにして笑つた。その笑ひのなかには妥協を求めるものの色があつた。

「いつぞやは失禮いたしました。」と、杉原は言つた。

「いや、僕こそ……」と、佐久間は恐縮したやうに頭を下げた。

二人とも卷ゲートルをはいて、それを脱ぎもせずに坐つてゐた。挨拶する時だけ、窮屈さうにゲートルの足を重ねたが、ゲートルの上にはところどころ泥のはねがあがつてゐた。

「御視察ですか？」と、杉原は訊いた。

「ええ、この頃は毎日かうして歩いてゐるんですがね。」と、加藤は笑つた。不精ひげをのばして、くすんだ疲れたやうな顏をしてゐた。

「先日は組合の事業報告書を送つて下すつて有難うございました。かねてから一度こちらへ伺はうと思つてゐながらその機會がなくて。」

「加藤さんはあの報告書にもとづいていろいろ部落のことをおききしたいとおつしやるもんだからね。それで實際に筆をとつてあれを書いた君に説明してもらふのが一番よからうと思つて。」

細谷がさういつた時に杉原はいやなものを感じた。細谷の浮足立つた臆病な氣持を感じた。面倒なことにはかかりあひたくないと願つてゐるやうな氣持を感じた。

報告書は文字にした不完全な説明にすぎないではないか。文字による表現を正視することをきらつたところで、説明されてゐる實體からは逃れることはできない。

「いろいろ參考になつて……我々も大いにためになりました。」

佐久間が、ぎごちなくそんな風に言つた。彼はこの春のことを氣にしてゐるらしく見えた。春のことには直接ふれずにおいて、しかし自分の杉原に對する氣持が以前のやうなものではないことを、杉原に通じたく思つてゐるやうであつた。

「共同經營組合の方は大へんうまく行つてゐるやうですね。縣としても奬勵してゐることなので、その實例はできるだけたくさん、他縣のものまでも蒐集して參考にしてゐるんですがね。」

杉原はべつに春のことにふれたい氣はなかつた。しかし佐久間の態度が變つたのはどういふ理由からだらう。杉原たちが立てた方針に從つてやつて、この秋の冷害からまぬがれた實際を見て、急に見直したといふわけだらう。もしも失敗してゐたならばどうだらうか。現に今も二人は、話の樣子では、どうやら紙背に徹する眼力をもつてあの報告書を讀んでゐるのではない。彼等は見

抜くべきものを見抜くことができずにゐる。原口ほどの眼も持つてゐない。それを書いた杉原が意識して書かずにゐるもの、消極的な意味で筆をまげてゐるものがあるのだから、まんまとごまかしにのつてゐるとさへ言へるのである。もしも實際を知つて、組合の實質が決してそんなものではないことを知つたとしたならばどうだらうか。彼等はつねに成功、不成功といふ結果から、逆に人を見るといふことをするのである。

四十一

加藤は部落のことをいろいろと訊きはじめた。報告書にもとづいて、と言つたけれども報告書を持つて來てゐるわけではなく、また細谷に家にあるものを見せろといふのでもなかつた。彼の質問は、きはめて常凡なものであつた。通り一ぺんのものであつた。なんのひらめきも鋭さもなかつた。問はれる方としては、少しの汗も流さずにすむものであつた。

杉原は幾度かほんたうのことを言はうとする欲望を感じた。彼の方から積極的に彼等の訊かぬことまで話さうと思つた。さう思ひながら問はれることだけに對してぽつりぽつり答へてゐた。細谷は、石のやうに沈默してゐた。そのだまりこくつてゐる細谷を、杉原は必ずしもはばからなかつた。

ほとんどさきの欲望に杉原が從ひさうになつたときに、突然加藤が次のやうに言つて、杉原の

心はみるみるつめたくなつて行つた。

「いや、よくわかりました。本縣のやうな原野の多いところは、移住民を入れて開墾しなければならないのですが、それには共同經營組合の組織が一番適當だと思ひましてねえ。この部落などは縣下での優良部落として報告するのに價してゐると思ふのです。」

さつきからの質問の進め方からしても、加藤の腹は、今ははつきりとわかつた。彼は最初からある目的を持ち、その目的に結びつけて、この部落に對してもあらかじめ考へをきめてかかつてゐるのであつた。この部落を優良部落、模範部落ときめてかかつてゐる。無理にもさういふものにしたい。あらかじめひとりぎめにしたさういふ部落認識が破れぬやうに、それにそふやうにとばかり質問もつづけて來た。なるほど、なるほどとうなづきながら。

「いや、よくわかりました。」と言つた時、彼は早く切り上げたかつたのである。彼には突つ込んで訊く意志ははじめからないのである。

彼はただ役目による報告書を作りたいのである。自分の管轄區域から、共同經營組合のうまくいつてゐる例を上役へも外部へも報告したいのである。そもそも事業報告書を出せといつて來たのからしてそのつもりなのであつた。春には、冷害の豫知について云々したといふことで責められた杉原等は、今度加藤等の報告書のなかで最も誇るべき實例として賞讃されるかも知れない。どこへ報告するにしても、みづからその土地へ行つて調べたといふのでなければ權威は持たぬ

だらう。今日、ついでに立ち寄つて、杉原とちよつと話し合つたことが現狀の調査といふことになるのである。

それをはつきり感じとつた時、杉原はそれ以上押して眞實を言ふ氣持を失つて了つた。何も言ふことはいらぬと思つてしまつた。

「農村のことはなんでも指導者本位ですよ。今度などもかうしてあるいてみて、被害は同じやうに被つてゐながら、これは立ち直りが早いな、とすぐにぴんと來るところがあり、來ないところがある。それは村へちよつとはいつてみればわかることですがね。さうしてそのぴんと手應へのあるところには必ずちやんとした指導者がゐるんです。それはもう爭はれぬものですよ。」

加藤はさも滿足げにそんなことを言つた。

「毎日さうしてお廻りになるのはずゐぶん大へんなことですね。」と、一段落ついたと見てとつた細谷は新しく入れかへた茶を注ぎながら言つた。

「私たちのかういふ實地調査がもとで對策が立つわけですからね。」と、加藤は言つた。

「しかし調査から、計畫、實行となるまでには時間がかかりますからね。それぞれに係りの人間もちがひますし。自分が調べて意見を具申したことがどうなつてゐるものか、行方知らずといふやうなことが多うございますんしてね。それにまた上の人がしよつちゆう變りましてね。その變るたんびに一度前にやつたことも改めて新しくやらされるんですから。をかしなもんでああいふ人とい

ふものは、前任者をそのまま踏襲するといふことは事のよしあしにかかはらずきらひでしてね。それはいいんだが、それならそれで最後までずーつと押し通せればいいんだけれども、すぐにまた途中で變つちまふんだから。するとまた新しいのが來て、新しくやり直す……」

「現實はその間に、遠慮會釋なくどんどん進行しますしね。」と、佐久間があとをついだ。

「ははははは。」と、彼等は笑つた。

「あなたなんぞも、あちこち奔走して歩かれて、さぞお忙しいでせうね。」と、佐久間が話しかけて來た。

「いいえ、この頃はほとんどどこへも出ません。」と、杉原は言つた。

「さうですか。やはり部落を固めることに專心される時でせうかな。しかしあなたのやうな人は單に一部落のことにのみかかづらつて居るべきではないと思ひますね。」

佐久間は白々しくそんなことを言つた。

四十二

時間を見て、二人が歸らうとして立ち上りかけた時、加藤は言つた。

「今朝、こちらへ來る途中、熊谷の役場へ寄つて來たのですが、これから小學校へ行く豫定になつてゐるのです。あそこは御承知のやうにひどい村ですから、缺食兒童の樣子なんかも見たいと

思ひましてね。その給食狀態はどうなつてゐるか……」さう言ひさして彼は杉原を見た。「杉原君は熊谷の方のことは詳しいさうですが。あそこの役場の人があなたをよく御存知でしたよ。」

「ああ、木下君ですね。……この頃は熊谷へも殆ど行くことがありませんので。」

「どうですか。一緒にいらしてみませんか？」と、加藤は、杉原と細谷とを等分に見くらべるやうにした。

「ああ、熊谷のことなら、そりや杉原君だ。」と、細谷は言つた。どうやら彼は行きたくないらしかつた。加藤は二人のうちの誰かに一緒について行つてもらひたいといふ氣持をなんといふことなく持つてゐるらしかつた。

「ぢやあ、私、おとも致しませう。」と言つて、杉原は立ち上つた。

もうちよつとゆつくりして、何もないが食事をして行つてくれ、と細谷がしきりに言ふのを二人は辭退して、ゆるんだゲートルの紐をしめなほした。上り口においてあつた小さな風呂敷包を指して、晝飯の支度はちやんとここに、凶作地の巡回に飯の心配をしてもらふわけにはいかぬから、と笑つた。缺食兒童への給食の狀態が見たいのだとすると、細谷のいふやうにしてゐる時間の餘裕もないわけであつた。

共同作業場から仕事着のままここへ來てゐた杉原は、一走り急いで家へ歸つた。そして着物を着かへ、自轉車に乘つてもどつて來た。

三人は肩をならべて走り出した。この村と熊谷との間には、もう一つの林の先の方が帶のやうに細く入り込んで來てゐて、熊谷との境界を川が流れてゐた。その川の堤では救農土木工事がはじまつてゐた。男も女も年寄りも十六七のものもまじつて、四十人ほどが工事に出てゐた。堤防を築く仕事はまだほんのはじまつたばかりのところだつた。砂利や赤土が山の方から馬車で運ばれ、そこに堆く積まれてゐた。畚を擔いだ人々が行つたり來たりしてゐた。畚が落して行つた土の上を踏みしめ踏みしめしてゐる人々もあつた。堤防の内側を築く大きな石を抱へ込んで、一つ一つ積み重ねていつてゐる人々もあつた。

二三日前にみぞれ雪が降つたあとなので土は濡れ、地下足袋の底は重さうであつた。濡れた土が裸の脛の濃い毛の上からべつたりとくつついてゐた。曇つた空には、時々鈍い明るみが射したが、濡れた土からは湯氣は上らなかつた。踏み固めるには丁度いいしめりのやうに見えたが、夜に入ればあの土の上皮は凍つてさくさくするのだらう。

三人が川に沿うた道へ出ると急に寒い風がまともから吹きつけて來た。一日その風に吹きさらされてゐる人々は乾いたやうな赤い顏をして、仕事の手をちよつと休めながら、しよぼしよぼした眼をあげて三人を見上げた。そしてすぐにまた仕事にかかつた。畚を擔いで來た二人の、後肩は棒を下して畚の繩をおさへ、先肩はまだ肩に棒をのせたまま振り返つてみた時の何かもの言ひたげな表情が、非常に印象的であつた。

、灰色に沈んだ風景のなかに、まだ二十歳前の若い娘の荒い絣と赤いたすきと赤い頰とが明るさを添へてゐた。

すべては自轉車で傍を走り拔ける數瞬間の印象であつた。

風をまともに受けて三人は走つた。間もなく木橋の假橋を渡つた。秋にこの橋を押し流してしまつたやうな流れも今は水嵩が減つてガタガタゆれる假橋の下に白い泡を嚙んでゐた。橋を渡つた對岸は熊谷村である。渡ると道は上り坂である。高くはないが兩方から山が迫つてゐる間に細長い耕地がひらけてゐる山林の感じが次第に深くなつてゆく。

水の害はなかつたが、冷害はことにひどかつた村である。

高くなつた道の下の方に、谷の間に、一枚がせいぜい五坪から十坪ぐらゐしかあるまいと思はれるやうな田が、瓢箪形をしたり不規則な三角形だつたりしてぽつんぽつんとあつた。地下水の高いじくじくした田で、銅色をした水がたまつて光つてゐた。おれたちのところはたんとは取れんが、米の食味にかけてはどこもかなふまい、と自慢してゐたこれらの田も、この秋はほとんど皆無作であつた。

やがて三人は土地が高いなりに平坦な、廣々とした盆地へ出た。そこには農家がかたまつて部落をつくつてゐた。學校や役場やその他の團體の事務所などもここにあつた。

四十三

三人が學校について、沓脱ぎで靴の底の泥をこすつてゐると、自轉車で構内へはいつてくるところを教員室の窓から見てゐたらしいもう髪の毛に白いもののまじつてゐる先生が急ぎ足で出て來て親しみのある笑顔で迎へた。

「やあ、お待ちして居りました。さあ、どうぞ。」

垢じみたネクタイの結びがゆるんで、少し横ちよになつてゐた。膝のところにはつぎさへあたつてゐた。これが杉原ともかねてから親しいこの學校の校長であつた。

校長が先に立つて名ばかりの校長室へ案内した。晝の休みまでにはまだ少し間があつた。加藤と佐久間とは、兒童を通してみた村の生活についていろいろと質問した。校長は朴訥な口調でぽつりぽつり話した。小さな小學校で三百五十人ほどの生徒數であるが、そのうち缺食兒童數はほとんど四分の一の八十五人に達してゐるといふ。

「凶作の年に生れた子供や母の腹にはいつた子供は、成長してから智力も體力も劣るといふことは、過去の凶年の例から言つて動かすことのできない事實なのです。そんなやうなことであつては、國家のためにまことに由々しい大事ですから、我々の身は削つても子供たちにはひもじい思ひはさせたくないと念じて、この給食といふことには一生懸命かかつてゐるのですが。」

「費用の方はいかがですか？　縣からの金で足りますか？」

「とても足りるわけはありません。縣からはこの十二月までの給食費が下つて來てゐますが、最初申請した時から見て缺食兒童の數はずつとふえて來てゐますから。私たちとしましてもむろん各家庭の事情は十分に調べて、たとひ今は給食を受ける必要はないとしても、一月たち二月たつて飯米がだんだん缺乏してくるにつれて、當然給食を受けねばならなくなることが見えてゐるもの、――それからまた、親たちのなかにはかういふものがあります、氣位が高いといふか、世間體を重んじるといふか、子供に缺食させてゐることが事實なのにそれをひたかくしにかくして、學校の給食を受けたがらない、給食を施行するやうになるとなんだかんだと理由をつけて子供に學校を休ませたりする、――さういつたものもあるのですが、それらすべてを現在給食を受けつつあるものとみなしてつけ出したのですが、それでも豫定數よりは遙かにふえて行つてゐるのです。」

「その給食を受けることを肯じないといふものはどうなりましたか？」

「それは教師がさういふ家を訪問してよく說いて聞かせたりしましてね。給食を受けることが決して不名譽でもなんでもないこと、つまらぬみえやなんかのために、大事な子供の將來にも影響するやうな禍根を殘してはならぬこと、それは大きくは國のためにならぬことだといふことを、よくよく話して聞かせるのです。さう親切に言つて聞かせますと、なかには感動して泣き出す親たちなんぞもゐましてね。また、親は頑固でわからなくても、子供は學校を休むのをいやがつて

進んで給食を受けに出てくるものもありますし、それと全然反對なものもあります。この子供がいやがるといふ方はずゐぶん困るのですが、これもやはり教師のみちびきやう一つによることです。教師が缺食兒童と一緒に、同じ給食の稗めしを食つて、これはなんでもないことなのだ、お米のとれなかつた年にはかういふことはあたりまへなことなのだ、といふ考へを自然に抱かせるやうにしていくのですね。」

「それでその費用の足りないぶんはどのやうにして補つてゐるのですか？」

「何よりも困つてゐるのはやはりその金の問題なのですよ。これにはほとほと弱ります。田舍の教師などといふものは金の捻出なんかといふことについては全く無能といつていいですからね。しかしどうしても必要だ、どうしてもこれはやらなければならぬといふことになれば私だちのやうなものにもある程度のことはできるのです。金の見通しがつかなくなつて、非常に暗い氣持になつてゐる時に、校庭に遊んでゐる子供たちの姿を見ると、どうしても爲通さなければならぬといふ決心と勇氣とが湧いて來ます。――しかし方法は結局寄附あつめとわれわれのやうなものが身錢を切るといふこと以上には出ません。そのほか上級の學童に藁工品をつくらせるといふやうなこともやつてみましたが、うまくいきませんでした。寄附はせんだつてこの村出身の成功者からやや大口をもらふことができてほつと致しました。そのために私は村長と一緒にわざわざ東京へ行つて參りました。村にゐる物もちは、自分たちも今年は困つてゐるといふことであまり出し

たがりませんからね。――私たちが身錢を切るといつたところでそれはむろん知れたものです。しかしこれは直接兒童の給食といふことに關係はありませんが、百姓の家へ訪ねて行つて、見るに見かねていくらもないポケットの金をおいてくるといふやうなことが多いのです。さういふことをしてゐない教員はおそらく私の學校にはありません。」

彼は窮乏してゐる農家の實際の姿をそこへまざまざと描き出して見せた。

「また學用品を自分の金で買つておいて兒童にやるといふやうなこともします。さういふことが果していいことかどうか、教師としてなすべきことかどうかといふことには問題はあると思ひます。しかし實際、さういふことをしてやらなければ、學校へは來れなくなるやうな子供は多いのですから。それから榮養不良が原因で子供の病氣はじつに目に見えてふえてゐます。これはむろん子供ばかりではありませんが、子供が一番私共の眼にはつきます。この村は御承知のやうに無醫村なんですからねえ。」

「昔からなんですか？」

「昔からです。以前に、縣の方の世話で來てくれた人がありましたが、まる一年しかゐませんでした。それも來たかと思ふともうすぐ次の年度がはりを待ちかねてゐるといふ風だつたんです。醫者が村へ落ちつく條件といふのは妙なものでして、この村のやうにあんまり貧乏では無論いかず、さうかといつてまた餘り裕福でもいかず――」

「村が裕福だと無醫村といふのはどういふわけですか？」と、佐久間が訊ねた。
「いや、それは、町の近い村の場合ですが、それも無論ややもすればさういふ傾向になりがちだといふまでのことでして、」と、校長は微笑した。「金廻りがいい村で、町が近くですと、村に醫者がゐても小馬鹿にして村の醫者にはかかりません。なんでも町の醫者がいいもんだ氣になつて出かけるといふ風になりましてな。」
「しかし、私が金のこと以上に頭を惱ましてをりますのは……いや、これも金に關してゐることなのですが、」と、校長はつづけた。「教員の轉校といふことです。さつきお話したことでもおわかりになりますやうに、村の教員といふものはいろいろなことをやらねばなりません。ただ單に教壇の上で教へてゐればそれですむといふわけのものではありません。それで幸にこの學校なども、自分の學校のことではありますが、非常にいい先生がたに惠まれましてな。その人々が、校外の村の生活、家庭生活のなかへまではいつていつて、いろいろとやつて下さつてゐたので、どうやら今までかうしてやつてこれたのです。ところがさういふ優良な教員といへども食はねばなりませんからな。はじめのうちは身錢など切つて居りましたが、だんだんするうちにそれどころではありません。自分が缺食しかねない狀態に立ち至つて參つた。申すまでもなく、俸給の不拂からです。俸給の不拂は、稅金の集まらぬこと、稅金の集まらぬのは今年の冷害からですから、これはなんとしても致し方がありません。私みたやうに、もともとがこの村のもので、今も、村

にいくらかの生活の地盤といつたものがあるものはいいのですが。それで教師たちは仕方がありませんから、もつといい條件のところへ移らうとするやうになります。この頃では縣の視學とか縣會議員とかに向つて運動するものがじつに多いんですよ。今から今度の新學期の移動にそなへてゐるといふわけです。この學校でも、私にわるいものだからだまつてゐますが、みなそれぞれにやつてゐるやうです。そしてもしもそれがきかれなければ教員をやめるまでだと腹をきめてかかつてゐます。だからその態度は強いですよ。非常に優秀な人物でもうすでにやめて行つた人もありますしね。」

四十四

鐘が鳴つて、廊下の向うにざわざわといふ物音が起つた。廊下に靴音がきこえ教材を手に持つた先生たちが教員室にどやどやとはいつて來た。入口からは校長室のなかが見える。杉原たちに默禮してそれぞれの席についた。

紺の洋服を着た女の先生が、教材を卓子の上におくとすぐにまた足早に出て行つた。

「では、あちらへ御案内しませう。」

校長が言つて立つたので、杉原たちはその後ろに從つた。

案内された教室に缺食兒童たちは集つてゐた。彼等は隣り合つた二つの教室にわかれてゐた。

青い顔をした彼等は席についておとなしく待つてゐた。校長が客を案内して入口のところへ來たのにも一向無關心のやうだつた。かういふことには慣れてしまつてゐるのかも知れない。ずるずる青洟をすする音がきこえる。

小使と上級の男の子四人女の子四人が、鍋とか鉢とかを運んで教室へはいつて來た。彼等は炊事場との間を二度三度往復した。大鍋は四つあつた。鍋の蓋をとると白い煙が立ちのぼつた。香ばしいうまさうなにほひがただよひはじめた。その煙のなかから杉原は、三つの大鍋のなかに炊かれてゐる眞黑な飯を見た。もう一つの鍋のなかには油揚と菜葉とが煮てあつた。

「あの飯は、米六分と稗四分との割合になつてをります。」と、校長は小聲で說明した。

さきの八人は一つ鍋に二人づつついた。そして井のなかに飯を盛り、その上に油揚をのせていつた。

各列から二人づつ當番の子供が出て來た。そして、飯の盛られた井をみんなの間に配つて行つた。飯を盛る。配る。默つた靜けさの間にその動きはつづけられた。井が廻つて來ても、子供たちはすぐに箸をつけようとはしなかつた。湯氣の立ちのぼる机の上の黑い飯の井をながめ、また忙しさうに飯をよそつてゐる鍋の方をながめやつた。そして前よりも一層高い音を立てて青い洟をすすりあげた。

女の先生は、自分では飯はよそはなかつた。彼女は子供等のわきに立つて、心こまかに全體に

注意をはらつてゐた。そして時々何か氣づいたことを言つた。

最後に、教師がその前にかける卓子の上にも同じ井がおかれた。

みんな席についた。女の先生も教壇の上の席についた。先生が壇にのぼると、子供等はその方を注視して、手を膝の上にきちんとおいた。

「禮！」

若い女の先生の張りのある聲が、凛としたなかにあたたかさをもつてひびいた。

「いただきます。」

「いただきます。」

「いただきます。」

可憐な聲々が起り、さうして彼等は箸をとつた。

校長と杉原たちとはもとへ戻つて來た。彼等はそこで彼等の食事をした。杉原はとくに缺食兒童たちへの給食とおなじものを取り寄せてもらつた。校長は山村のこととて何もおかまひできないが、もう辨當の用意を言つた筈だからと、しきりに言つてゐたが、杉原は押してたのんで、黑い飯にしてもらつた。杉原は自分のさういふ行爲が何かとくに異を立てるきざなものに見えはしないかと顧みたり、どういふものを食つてゐるのか、知つておく必要があるから、と必要を意識したりする餘裕などまるでないほど、ただひたむきな氣持で、どうしてもさうせずにはゐられぬ

氣持で黒い飯を求めたのであつた。

ぼろぼろの稗飯に、鹽からい油揚の煮しめを食つてから、彼は校庭へ出てみた。子供たちも校庭へ出て來てゐた。しかし駈けたり飛んだり組み合つたりして遊んでゐるものはひとりもなかつた。曇り日の空が少し裂けて薄い冬の光りが、校舍の壁と地上とへ半々に折れまがつて落ちてゐた。盆地になつてゐるここは風の吹きかたも弱かつた。その日だまりへ、髪のみだれたぼろぼろの着物の子供たちが、ふところ手をしたり、つけひものついてゐるところから手をさしこんだりして、できるだけからだを動かすまいと努めてさうしてゐるかのやうに、じつとうづくまつてゐるのであつた。

四十五

陰鬱な冬が進んで、細谷、杉原等の組合も、役員たちの會合をしばしば持たなければならぬ時になつて來てゐた。次年度の仕事の概要を役員會でとりきめ、總會にのぞまなければならなかつた。

その頃になると、細谷と杉原との間の隙間は益々大きなものになつて來てゐた。彼等は會つても何氣ない話ばかりするやうな傾向になつてゐた。肝腎なことにはふれず、いよいよといふ時になるまで、それはそつとそのままにしておかうとしてゐるかのやうであつた。そしてそれはむろ

ん細谷の態度から來てゐた。

彼は杉原との衝突をおそれ、避けようとしてゐるのである。しかし彼は決して杉原に從はうとはせず、組合經營についての考へを、杉原とは反對の方向へ、益々深めつつあるのである。

一人對一人では彼は自分とぶつかることを避けようとしてゐる。しかし衆を頼んで來る時には彼は少しも遠慮しようとはせぬだらう。彼はむしろ衝突を豫想し、望んでさへゐるだらう。

杉原はさういふ細谷を見拔いた。そして杉原も亦細谷の考へにはどうしても從ふことができぬといふ腹を、益々かためていくのほかはなかつたのである。

ほかの役員たちはどういふ態度を示すだらう。しかし彼はその腹をさぐらうとして、彼等をあらかじめ訪ねるといふこともしなかつた。

役員會の日取りその他について、事務的な打ち合せをするために細谷を訪ねた時にも、そこで相談さるべき事柄について、あらかじめ二人の間に話し合つておくといふことはしなかつた。

さうして役員會の日に人々は集つた。

最初に總會の日取りをいつにするかといふことについて相談した。二月から新しい年度がはじまるのだから、それはどうしても一月中には開かれねばならなかつた。大體、一月十日といふことに暫定した。

事業計畫についての話にはいらうとした時、杉原が最初に口をひらいた。

じつはその前に話しておかなければならないことがあるんだが。これはもつと早くみんなの耳に入れておかなければならなかつたんだが、適當な時がなくてつい今日になつたわけなんだ。それは先月わしと細谷さんとで川島を訪ねた時の事だが、その席に支配人の原口も來てゐてね。その原口からかういふことを言はれたんだ。」

さう言つて杉原は、その日のことを説明しはじめた。

話しながら彼は自分のすぐ横に坐つてゐる細谷を感じてゐた。話なかばに人々の間にあきらかに動搖が起つたことを知つたが、彼はかまはずおちついて話していつた。

「さういふやうなわけで、來年度からはもう川島からは、今までのやうな形の援助は期待することができないんだ。で、我々はその事實の上に立つて、いろいろな計畫を立てなければならぬと思ふ。それについてみんなの考へはどうだらう？」

談笑してゐた人々の間に笑ひは消えた。彼等は弱點を鋭くつかれた人々によく見るやうな不機嫌な顏をした。

「さういふ重大なことは、もちつと早く、話があつたらすぐにみんなに話すやうにしてもらはないと困るなあ。」と、谷口が不平らしく言つた。

杉原はだまつてゐた。

「さういふことは、言つてみりや、組合の死活にも關する重大な問題だから、少しも早くみんな

に知らしてもらつて對策を立てるんでなくちや。」と、梶野が言つた。

「總會まであともう幾らでもありやしない。今から對策といつたところで、どうしようがあるものかね。間に合ひやしないよ。」と、群野があとをついだ。

杉原はこれらの非難をもつともなものとして聞いた。話すことが今までおくれてしまつた原因は細谷にある、細谷がみんなに話すことを肯じなかつた、そんなら話さずに事を未然に解決してしまふやうな成案が何か彼にあるのかと、細谷といふものをよく知つてはゐながら、そこは慾目で待つてゐたのだが、そんなものがあるわけでもなく今日になつてしまつた、——杉原はしかしさうは言はなかつた。彼は當然の非難として聞きながらも、彼等の調子のなかに自信を失つたものの狼狽を感じて寂しく思つたのである。

「報告がおくれたことについては、わしはあやまるが、ともかくさういふわけなので、新しい方針について考へて欲しいんだ。今から對策と言つたつて間に合はぬなどと言はずにさ。ともかくどうにかしてやつていかなくちや仕方がないんだからね。」

「なんだつてまた今頃突然そんなことを言ひ出したものだらうなあ。」と、群野が未練が殘るといふやうに言つた。

「川島の家の財産狀態といふのはもうそんなにつまつて來てゐるのかね？」と、谷口が言つた。

それから、それについて、がやがやとしばらく取沙汰がつづいた。

「今杉原君が言つたことは、それは支配人の原口の言ふことでね。……川島の旦那は、それほどまでには思つちやゐないんだよ。」と、今までだまつてゐた細谷が言つた。

「今にはかに對策を考へろ、と言つたところで、どうも困らあね。今まで通りの條件の下で、仕事にかかるものとして、おれなんぞもいろいろ案を立てて來たもんだからね。どうもさうなると全然考へ直さなくちやならない。……」

「しかし、考へ直すといつたつてお前、資金の援助をさうしてまるでとめられてしまつて、それで組合の經營が成り立つかね、一體。あんまり俄かだからといふんぢやなくて、わしなんぞには、たとひ日をかけて考へてみろといはれたとこで、いい考へが浮かびさうにも思へないがね。」

「そりやさうだ。はじめからさうでなかつたのならともかく、毎年ずつとこのやり方でやつて來たんだからね。すべての仕組みが年度はじめに前借りしてやるといふ、その上に立てられて動いて來たんだから。その一番の大本を斷ち切られちや、全體が變つちまふより仕方がないぢやないかね。」

「全體が變つちまふつていふと？」と、杉原が梶野を見た。

「いや、……たとへばさ……」と、梶野は口ごもつた。彼はなぜかもじもじした。そして急にきほひ立つたやうに言つた。「だつてさうぢやないか。それがあつてはじめて共同經營が成り立つてゐる、その土臺が駄目になつちまふんだから……」

「さうだよ。さうなるといふと、共同經營といふものが、成り立たんといふことになる。」と、谷口がすぐにあとを引き取つて言つた。

一種の空氣が座を支配した。杉原は、谷口や梶野が、——そしてこの二人ばかりではなく、他のものも、そしてまた細谷までも、そのさきを言ひたくて言へずにゐるもののことを感じた。彼等の腹のなかを感じた。言ひたくて言はずにゐるといふのは、杉原への遠慮であり、また自分たち自身にとつても何かすまぬ氣持のされることだからである。

彼等は、今度のことを、結局いい機會だと思つてゐるかも知れないとも想像されるのだつた。

「杉原君は、どんな對策を考へてゐるのかね？」

群野が訊いた。みんなもあらためて杉原の方を見た。彼等は一致して杉原にあたるといふぐあひに、いつのまにかなつてしまつた。

「わたしにもべつにさういい考へがあるわけではないよ。しかし折角ここまで築きあげて來たものを、こんな障害のために、——それも外からの障害のためにつき崩されるといふのはいかにも殘念なことだからねえ。いや、どんなことがあつたつて、そんなことになつてはならないんだ。……外よりももつとだいじなのは内だよ。内がしつかり一つ意志に統一されてゐれば、物質的援助のとまつたことぐらゐ、恐れるにあたらぬ、とわしは思ふんだ。……しかしわしは何も援助はいらぬなどといふんぢやないんだ。それについては、わしは原口にもう一度あたつてみるつもり

だ。」
「年度始めの營農資金だけは、今までどほりにしてくれといつて、それも斷られたつていふ、あんたのさつきの話だつたぢやないか？」
「もう一度あらためてあたつてみるつもりだ。この間も細谷さんと話したんだが、今までの援助の受け方がまちがつてゐたと思ふんだ。つまり向うとしてみれば、こつちの誠意が感じられなかつただらうと思ふ。それでこつちの誠意のあるところを示す。具體的には新しい案をもつてのぞむ。わしはまだみんなに示すことのできる形に書いてはないが、今まで川島から受けてゐた援助は、今までの半分以下でもやつていけると思ふ。わしの計算ではさうなる。……原口だつて川島がこの農場を持つてゐる限りは、我々が立ち行かなくなることを何も望んでゐるわけぢやないからね。今度の役員會までにはわしは案を謄寫版にしてくばつておくから、その時いろいろ考へを言つてくれないかね。それを原口へ送つておいて、それから年明け早々北海道へ行つて彼に逢はうと思ふんだ。」
「それでももしきかれなかつたらどうする？」
「その時は開墾第一年目にかへつたつもりでやり直すさ。なんでもないぢやないか、そのつもりになれば。家は建つてゐるし、家畜はゐるし、農具はそろつてゐる。不の根つこから掘り起した時に返つた氣持になつてみれば、惠まれすぎてゐるんだ。十分な營農資金をあらかじめ持つて、

それにもとづいてちやんと豫算を立てて、仕事にかかるといふやうな開墾百姓ばかりぢやないからね。さういふのが成功するとは限らないからね。こまかな點まで、考へに考へぬいて、さきのさきまで見て仕事にかかるといふ細心さと、どうなるかわからないが實行する、やつてみることで現實を理解する、といふ大膽さとは、そむきあふものとしてではなしに、我々のものになつてゐなければならないんだ。」
杉原は昂然たる面持で言つた。

四十六

しかし杉原が毎晩おそくまでもかかり、想を練りに練つてつくりあげた、經營に關する新しい案が刷り物になつてくばられ、次の役員會が召集された時、集つて來たものはほとんどなかつた。細谷のほかに一人のみだつた。細谷の家での會合であつたから、細谷は集つて來た一人とはいへぬのである。
前の役員會の日に、次の會の日取りは決定されてゐた。ところが前の日になつてからその日は都合がわるいから、と言ふものが出て來た。それでほかの日をきめようとしたが、どの日をあげても必ず故障を言ふものが出て來て、容易に決定を見なかつた。さうして最後に日がきまつたかと思ふと、その當日になつて、今度はさういふことであつたのである。

「年末だもんだから、みんなそれぞれ、何かかにか用事があるんだね。」と、細谷は取りなし顔で言つた。しかし彼は豫期してゐたもののやうであつた。彼は氣がなささうに、杉原が徹夜してつくつた刷り物をパラパラとめくつた。

「かういふふうに、誰が見てもわかるやうになつてゐるんだから、とくにこれのために集るといふ必要もないやうに思ふね。役員だけでなく、總會の席にいきなり出してみた方がいいと思ふよ。」

杉原は、ぐつと胸に來るものがあつたが、おさへて何も言はなかつた。それでその會は流會となつた。

細谷と他の一人との考へだけでも聞かうと思つて、杉原は話しかけてみたのだが、うんうんとうなづいて見せるだけで、積極的に自分の方から言ひ出すといふことがなかつた。

「原口へはきのふこの刷り物を送り、その說明をかねた長い手紙を書いて、なほ逢ひたいと言つてやつたんだが、その時わしと一緒に行つてくれるのはいいでせうね？」

「さア、その必要もあるまいテ。」

「ええ？　なぜです？」

「わしが行つたつて行かなくたつて大したちがひはないからね。わしは組合長だといふ名前ばかりの人間なんだから。原口を說くのは君一人でたくさんだよ。忙しい時に、費用もないのに、二

人連れで行つたりする必要はないだらう。」

杉原はその夜の歸り途に、小池のところへ寄つた。今度の案をつくるに當つても彼は小池を唯一人の相談相手としてゐた。小池は家にゐた。杉原の言ふことをだまつて聞いてゐたが、

「さうかね。やつぱりさうかね。じつは少し小耳にはさんだことがあつたもんだからね。」

「なんだい？」

「高橋とか梶野とか谷口とかいふ連中がこの頃、毎晩のやうに集つてゐるといふことを聞いたんだ。聞いた時にはなんとも思はなかつたが、今君の話を聞くと、なるほどと思ひあたるところがあるよ。」

「ふむ。」と、杉原は考へ込んだ。

「奴等は何を策してゐるのだと思ふ。」と、少しして彼は言つた。「奴等は共同組合組織の解體を考へてゐるんだ。」

「ふむ……さうだらうな。」

「中心はおそらく高橋だよ。高橋を中心に谷口とか梶野とかが集つてゐるんだ。そして、細谷も群野もそつちの方へ引かれて行つてゐるんだ。」

「ふうむ。」

「こりや、負けかも知れないな、おれは。」と、杉原は言つた。

彼は家へ歸つて來た。すると歸つて來た兄を見るなりノブが不審さうな顏をした。

「もう會はすんだんですか？」

「いや、」といつて説明しようとすると、

「たつた今そこで、谷口さんと梶野さんとが連れ立つて行くのを見ましたよ。わたし、これから會へ行くのだとばかり思つて見てゐましたが。」

「會はお流れになつたんだ。」

彼は簡單に説明した。

「彼等はおれをのけものにして何か策謀してゐるらしいんだよ。」

ノブは兄がおかれてゐる狀態、彼及び組合が當面してゐる問題を理解した。愛する兄が他人のなかで孤獨におちいつてゐるのを見る時の苦痛を感じて彼女は默つてゐた。

杉原は策謀してゐる人々の動きを想像することができた。その目的がどういふところにあるか、部落がどのやうな方向に向はうとしてゐるかといふことが彼の眼にはよく映つた。

そしてそのなかにあつて彼はひとりのけものにされてゐる。部落が動いて行かうとしてゐる方向に對して杉原は反對である。彼はもつとも頑强な反對者としてあらはれるだらう。しかし彼がのけものにされてゐるといふことは單に意見の對立といふ以外の何ものかから來てゐる。彼は部落内での異質分子である自分をあらためて感じなければならなかつた。この小さな部落のなかに

おいてさへ充分に人々の中へとけこんでゐなかつた自分を思はなければならかつた。

その異質分子であるといふことは、ある時には人々によつて重寶であるとされた。しかしまたある時には、そのおなじものが殆ど理由のない反感のたねにならぬわけにはいかない。……

さういふ自分を深く感じながら、杉原は彼等の策謀を、ただまつて眺めてゐるだけだつた。同じやうな手段をもつて何等彼等に答へようとはせぬところに、自己への深い凝視があつたのである。

四十七

さういふ空氣のなかに杉原は原口からの返事をひたすらに待つた。返事はなかなか來なかつた。雪は降つては消え、消えては又降つた。暮の二十八日の晩から降つた雪はそのまま積つて今年の根雪になるもののやうであつた。救農土木工事に出てゐる人々の姿ももはや見られなかつた。食ふものがなくなつた人々の間に感冒が非常ないきほひではやつて、死んでゆく人の數も例年になく多かつた。河原の雪を掘り、土を掘つて、そこで棺を燒く人々の群が、遠く近く、一日に二組も三組も見られることがあつた。

年が明けてから原口から手紙が來た。それは葉書ではなく封書であつたが、手に取つてみるとペラペラであつた。ひらいて讀んでみて、杉原は大きな失望を感じた。

たつた一枚の書簡箋に、文言は簡單であつた。農場經營についての貴兄の私案は一通り眼を通しただけで、まだ詳しくは見てゐない。それで自分として意見を申し述べるまでには至つてゐないと書いてあつた。またこつちへ訪ねて來るとのことだが、自分は正月早々、用事で樺太の方へ出張することになつてゐて、旅行はだいぶ手間どる筈だから御指定の頃にお逢ひするといふことはできないと書いてあつた。最後に一月十日の總會の模樣は詳しく手紙で知らして欲しいと書いてあつた。

手紙は事務的な冷淡なものであつた。原口のやうな型の人間から、それ以上のものが聞けるとは思つてゐたわけではない。しかし自分が苦心して、熱いこころを傾けて書いた草案が、「あしらはれた」といふ感じで受けとられたらしいことは寂しかつた。

總會の模樣を詳しく知らして欲しい、と書いてゐるところにだけ、杉原は原口の集中された關心を感じ取つた。ある關心を、期待をもつて總會の成行きを見まもつてゐる、その原口の心が感じられた。そして原口の總會に對して抱いてゐる期待といふのは何であらうか。それを思ひやつた時、杉原は、「さうか」と納得し、思ひあたることがあつた。

物質的援助を拒否した原口はそもそもの最初から、部落の辿る道を見拔いてゐたのではないだらうか。いな、それを見越し、さうなることを希望してそのために援助の拒否といふ態度にも出たのではないだらうか。組合の經營は部落の新しい共同體制の基礎になつてゐる。そこでは地主

と小作人との關係も、從來の古い封建的といはれるものとはちがつてゐる。小作人は屈從的でない卑屈でない新しい集團生活を建設しうる組織をもつてゐる。地主は持てるものの義務を、自分の所有地の上に果さうとしてゐるのである。

さういふことを原口は喜ばぬのだ。彼は兩者を、東北地方の一般の地主と小作人の古い關係に引き戻さうと考へたのである。それが目的であつた。その目的から來た彼の打つた手であつた。彼は自分の打つた手によつて部落内に動搖の起ることを期待してゐる。動搖の結果が、どこにもある古い關係に向つて落ち着くことを期待してゐる。

そしてその動搖は先づ最初に今度の總會にはつきりした形となつてあらはれるのだ。原口の手紙の短い文言の間から、特別な關心が讀みとれるといふのはうなづかれることではないか？

大體において、原口が欲するとほりに物事は進行してゐる。

杉原は自分が氣をまはしすぎてゐるとは思はなかつた。原口の人間をよく知つてゐる杉原は、自然な考へとしてさう思はぬわけにはいかない。

原口のさういふ底意を知つた時に杉原はどうしても新しい建設への道は護られねばならぬといふことを強く感じた。凶作におびやかされてゐる瘠せた土地の上にも新しい生活を打ち建てたいといふ願ひ、打ち建てることはできるといふ信念が結び合つてはじめられた仕事である。どうしてもこの道は護らねばならぬ。

しかし一月十日までに彼は原口に逢ふことが出來なかつたし、提出した私案に對して何等かの意志表示を得ることもできなかつた。その意志表示とは今のところ動搖してゐる部落の人々を納得させ、落ち着かせる唯一のものでなければならぬのである。

さういふものなしに彼は總會にのぞまなければならなかつた。一月十日は近づきつつあつた。

四十八

總會の日は、朝から粉雪がちらちら降つてゐた。會場は此度は共同作業場をすつかり取り片づけ、板の間に筵を敷いて座席を設けた。集會の度毎に集會場のことが問題になるが、そしてそれは今までよく組合長の家があてられて來たものだが、どういふものか今度は細谷はそれをきらつた。狹いといふのが表面の主張であつたが、それればかりではなく、彼の組合への氣持の變化が、そんなところからもうかがはれなくはなかつた。

しかし實際にまた個人の家では狹過ぎはした。この總會には男ばかりでなく、子供を背負つた女房たちや娘たちまでも集つてくるのであつたから。

晝少し過ぎた頃、肩のあたりにふりかかる粉雪を拂ひ落しながら、人々は會場へあつまつて來た。一家から二人も三人も來る家もあるので、狹い共同作業場はぎつしりになつた。

「はいつたら戸を早く閉めろよ！　風がスウスウするぢやないか。」

ストーブの近くに陣どつた者の間からそんな聲が戸口の方へ向つて投げられた。バタンと大きな音を立てて戸はしまつた。そんなことが何度か繰り返された。

「雪拂ふな、戸を閉めてからにしたらよささうなもんぢやねえか。氣がきかねえもんだなあ、どいつもこいつもこの……」

熊の皮の胴着を着た眞赤な顏をした百姓が大きな聲で怒鳴つた。彼は酒氣を帶びて來てゐるらしかつた。

「滿洲なんぞぢや、部屋の戸うあけてまごまごしてるつうと、薪代を請求されるつちゆう話だぞ。」

髮の毛の眞白な老人が、やはり飲んで來てゐるらしいてかてかした額を振り立てて言つた。

おくれてはいつて來たものはストーブに近いところに座席を求めてうろうろしたが、すぐに諦めて後ろの方へ行つて坐つた。ストーブはふだんは取りつけてなかつた。會のために物置きにおいてあつたのを出して急に取りつけたのであつた。古くなつてところどころに小さな穴があいてゐた。灰掻きが少し强くぶたらうものならその穴は大きくなりさうに思はれた。部屋のなか全體の空氣はそれだけではなかなかあたたまりさうにもなかつた。足袋もはかずに顯われた足を冷たい筵の上に組んで默然としてゐるやうな人々の姿も見られた。

「ビツキ（小兒）しよつてるもなア、會がはじまる前にみんな一ぺんおしつこでもなんでもさせ

とけよッ。會がはじまつてから立つたり泣かれたりぢやうるさくてなんねえから。」

子供を背負ふか連れるかしてゐる女たちは多かつた。立つて歩けるほどの子供たちは決してじつとしてはゐなかつた。大人たちの間を縫つて駈けまはつたり、作業場にくつついてゐる物置きの暗がりのなかへはいつて行つてそこにあるものをガタガタ言はせたりしてゐた。それをまた姉娘が追つかけて行つて叱るといふ風で、會のはじまる直前の場内は騒がしかつた。

「おめえ、なんだ、この部落ぢや子供等が飛んだり跳ねたりして騒ぐ元氣があるだけでも有難いとしなきやなんねえよ。中山あたりさ行つて見ねか。餓鬼どもあ、眼え引つ込ませて、乾菜つ葉みてえな顔いろして、部屋の隅つこさ行つてちぢかまつてゐるよ。たまに元氣になつて飛んだり跳ねたりしようもんなら親がどなりつける。動けば腹もへるしそれだけ多く食はにやならねえ勘定だからな。冬の蛇みてえに、食はねえで穴のなかさじーつとすくたまつてゐようていふんだ。大人はいいが子供はかはいさうで見てゐられねえがな。」

女たちの間に坐つた老人が、女たちの顔を見まはすやうにして言つた。

杉原は早くから來て待つてゐた。正面に小さな机が据ゑてある、そこから少し離れて壁に背をもたせて坐つてゐた。細谷をはじめほかの役員たちもその近くに坐つてゐた。杉原はやや蒼ざめた顔をしてゐた。彼は二三日前から少し風邪氣味であつたのである。やや熱つぽいだるさを脊骨に感じてゐた。

「今日はよく集つたな。そろそろはじめようかな？」と、細谷が、あたりのものをかへりみて言つた。

「うん、……さうだな……」と言つて、杉原は場内を見まはして、多くもない部落の人々の一人一人知つた顔を見ながら、心にかかることがあるやうだつた。なほ躊躇してゐるやうな樣子であつた。

集りはいつもの會よりは數も多いが、また活氣づいてもゐるやうに見える。酒氣を帶びてゐる人々が少からずゐることなどもさういふ感じを強めてゐる。これだけのことはどうしても言つてやらうと、何かきほひこんでゐるらしい人々のけはひも氣のせゐか感じられるのである。

「倉橋が見えないが……」と、杉原は何氣ない風で訊いた。

「あれは感冒ださうだ。熱が高くて出られんと、妹がさつき來て言つてゐたよ。」と、細谷が言つた。

その妹と父親とは早くから來てそこに待つてゐる。そして當の倉橋の姿がいつまでたつても見えないといふことが杉原の氣になつてゐたのだつた。細谷から彼の不出席をきいて、杉原は淡い失望を感じた。

今日の會はおそらく論爭といふやうなことになるだらう。役員のすべてが反對の側にまはつたらしい今日、自分の確實な支持者といふものを杉原はほとんど考へることができなかつた。多く

の人々は積極的に役員を支持するか、あるひは自分にしつかりした考へはないままに、彼等の言ふ方へずるずるにひつぱられてゆくか、そのどつちかであるやうに思はれた。そのなかで若い倉橋などが、わづかに頼りになる一人に考へられてゐたのである。

杉原は去年の春、植ゑつけを前にして開かれた總會での倉橋の態度、彼の發言を印象ぶかく記憶にとどめてゐた。その時、事前に何の申し合せがあつたわけでもないのに倉橋は小池や杉原を正しく理解し支持した。

まだ若い倉橋は部落の役員にも何にもなつてゐない。杉原とはとくべつに深い交りが日頃からあるといふのでもない。倉橋のやうな人間と、もつと深い心のまじはりを結ぶやうにつとめるべきであつたのだと、何も今日のやうな日のためといふのではなく、杉原はかへりみられるのである。

部落の會には今までよく他村の人である小池が出席し、發言もして部落の人とおなじやうにふるまつたものであつた。小池は部落から要求されたのであり、むろんそれに對して何も言ふものはなかつた。しかし今日は彼はまだ出席してゐなかつた。いつもそれを進んで言ひ出す細谷も今度は言はなかつたし、小池も自分からはのぞまなかつた。彼は今度の會の空氣を感じてゐたからである。

そして杉原も一應は小池の考へに從つたが、にもかかはらずなほ彼は小池に今日の會に今まで

のやうに出て來てくれといふことを言つて頼んだのだつた。それは彼が孤立無援の苦境におちいることをおそれるためばかりではなかつた。部落にとつての恩人である小池の發言が力を持ち、その力によつて部落の進路がまちがはぬ方向にみちびかれてゆくことを期待したのであつた。

四十九

「ぢやあ、はじめよう。」

細谷はあたりにゐる人々にさう言つて、つかつかと机の前へ進んで行つて席についた。

「皆さん、今日はどうも御苦勞さまでした。ではこれから會をはじめることにします。」

「最初に昨年度の事業報告を、これは私からすることにします。これは昨年の秋、取入れ後の臨時總會において大體報告しておいた通りですが、あの時出席しなかつた人もあり、その後の事實もありますから繰り返してお話したいと思ひます。」

彼は手もとの風呂敷包をといて一と重ねの書類をとり出した。杉原のつくつた報告書を見ながら、例の紋切型の調子で說明しはじめた。場内の騒々しさもしづまつていつた。十分足らずで說明は終つた。二三の點について簡單な質問があつた。それが終ると、今までゐたところから一般の人々のなかへ移つてしまつてゐた高橋が、「議長」とあらたまつた調子で呼びかけた。

「組合長の報告はそれだけですか？　私どもはある重大な事がらについてもれ聞いてゐるのです

が。」

「どういふことですか、それは

「さつきの議長の説明中の、昨年度の小作料の件について川島家と交渉の際に、組合の安危にも關するやうな重大な提案が川島側からなされたやうに聞いてゐるのですが。」

「……」細谷はすぐには答へずやや躊躇のいろを見せた。

「さういふ事實はなかつたのですか？」と高橋はたたみこんだ。

「それは、ありましたけれども、何しろ重大な事がらですから、それについての説明、質問、討議は、それだけ獨立させて、あとにまはした方がいいと思ひまして。」

「いや、それは最初に、今すぐやつていただいた方がいいと思ひます。それは何を相談するにしてもすべてに關係してくることですから。さういふ根本のことがきまらないとさきへ進むといふことはできませんから。」

杉原は高橋の持つて行き方の巧妙さ、その芝居がかつたやり方や話し方におどろいてゐた。その前身がいろいろなものであつたといふ人間にふさはしい態度である。細谷のその受け方も心得たものである。いかにも仔細らしくやつてゐる。

表戸が靜かにあいて小池がはいつて來た。果して來るかどうか杉原にもわからなかつた小池であるが、今日の會のことが氣になつてたうとうやつて來たのである。杉原は熱いものを胸に感じ

た。小池はちよつと頭を下げて場内を見ると、後ろをずーつときはつて杉原たちがゐるところから少しはなれたところへ來て坐つた。細谷はちらとその方を見た。

「ぢやあ、杉原君、」と細谷は杉原を見た。「君からひとつ例のいきさつについて説明してもらはうか。」

うながされて杉原は前へ進んだ。すべてはお膳立て通り運ばうとしてゐるのかも知れない。しかし説明があとにならうがさきにならうが、さういふことは杉原にとつてどうでもいいことである。

杉原は説明しはじめた。彼は少しも隱し立てをしなかつた。事の經過をずーつと説明して、どうしてさういふことになつたかについて彼の考へを述べた。川島の財政狀態を知つてゐる限り話した。さういふ川島に對し、人のいい主人に對し、それをいいことにして今まで組合がとつて來た態度に自己批判を加へた。

原口の申渡しに對する對策として彼の考へてゐることを言つた。彼は彼自身の編成した、非常に緊縮した豫算案の大要について説明しようとした。

「なんだね、新しい年度の事業計畫に關することなら、いづれあとでゆつくり相談することになるんだから、その時にまはしてもらつた方がいいと思ふね。時間の都合もあるしすることだから。」

場内の中ほどから聲がかかつた。高橋と少しはなれて座をとつてゐた梶野であつた。

「事業計畫とその豫算そのものについて説明することが何も今のわたしの目的ぢやありません。さつき高橋君から説明しろとあつたことについての説明に、必ず必要な範圍においてのべるのです。高橋君が言つたやうに、これは重大なことで、組合の事業計畫がそれによつて左右されるやうなことでもあるのだから、できるだけ詳しく話さうと思つてゐるのです。これは交渉の顚末の報告として話してゐるのですから、そのつもりで聞いて下さい。

杉原は一蹴した。

彼はこつちが誠意を示しさへすれば、向うもそれに對して答へてくれるにちがひないといふ確信について語つた。さういふ確信にもとづいてつくつた緊縮豫算である。それによると川島の補助は今までの半分以下ですむやうになつてゐるのである。彼はそれを送つて向うの意嚮をたたいた。手紙ではまだるつこいし、こつちの氣持を十分に通じることもむづかしいので、北海道まで行かうとさへ思つたのだが、忙しい原口の都合で、まだそれに對する向うの考へは聞くことができずにゐる。……

「君の言つてやつたことに對して、原口からは、自分はかう思ふといふやうな具體的なことは何も言つて來てゐないんだね？」と、高橋が言つた。

「さうなんだ。」

「をかしいぢやないかね。いくら忙しいからといつたつて、一通り眼を通した以上、かう思ふ、あゝ思ふといふ考へぐらゐ言つて來たつてよささうなものぢやないかね。」

「拜見したがまだ意見を述べるまでには至つてゐない、と言つてゐるんだが、それが正直なところではないかと思ふんだが。相當重大なことだし、原口は例のとほり細心な人だからね。にはかに賛否を言はない、保留してゐるといふところにわしはかへつて脈があると見てゐるんだがね。……しかしまた、書いたものを送つただけではどうも不安心だから、それで出かけて行かうと思つたんだが……」

「原口は細心な人にはちがひないが、勘のさとい人だからねえ。さういふ書いたものなどを、ひつくり返しもつくり返し、見て見なけりや自分の考へがきめられんなんていふ人間ぢやないよ。」と、梶野が言つた。

「そりや、さうだな。そして賛成なら賛成とすぐに言つてくるさ　不賛成の場合には、不賛成といきなり言つてよこすのは、あんまり味もそつけもなくて、なんぼ原口でも言ひにくいさ。……どうもこりや脈はなささうだね。」谷口が言つた。

彼等の話す調子は杉原には解しがたく思はれた。彼等はまるで事が不調に終ることを欲してでもゐるかのやうではないか。

役員たちが話し終つたとき、――いや、杉原が説明してゐる最中から、明らかな動搖が人々の

なかに起つて來てゐた。高橋たちと氣脈を通じ合つてゐて何から何までよく知つてしまつてゐる者もあつたが、狹い部落内のことだから話の飛ぶことは早かつたが、何かあるさうだといふ程度にしか聞いてゐないものも多かつた。杉原の説明は事をはつきりさせると同時に、動搖を增すことになつた。

「なんだ、川島がそんなことになつたんぢや、どうにもならねえぢやねえか。」

「共同經營組合なんてもなア、川島が本腰入れてやつてくれて、はじめてやつていけるもんだからなあ。」

「さうだとも。共同組合でやるつてことをはじめて言ひだしたのが、第一川島の旦那なんだからな。それでおれたちも何しろ旦那の言ふことだし、力も入れてくれるといふんでその言ふとほりはじめたんだから。旦那も今さらそんなことを言へた義理ぢやねえよ。」

「原口つていふ奴アおれは知らねえけど、バカに威張つてるぢやねえか。旦那をさしおいてどうしてそんな大きな口をきくんだ。」

「旦那は一體どう思つてゐるんだ？　原口なんていふ奴はのけてしまつて、直接旦那と話し合つたらいいんだ。」

「この土地さはじめておれたちがはいつた時のことを考へりやよ、今さらそんなことが言へたわけのもんぢやねえんだ。木の根つ子から起してこの土地をこれだけにしたのは誰のおかげだ。」

「さうともよ。そんなことといふんなら、組合なんぞ、いつそ解散しつちまへ！」

激昂した聲が飛んだ。

杉原は蒼白な緊張した顏をしてゐた。高橋、梶野、谷口等は、事の當然の經過を見るかのやうに落ち着いてゐた。細谷はざわついて來た場内を整理しようともしなかつた。

五十

「わしはちよつと訊いたり話したりしたいことがあるんだが。それはさつき細谷の説明したなかにもあつたことだし、組合の規約にも關係してくることなんだが。」

ストーブのわきにゐた山本といふ男が言ひはじめた。口々に勝手なことをいふ聲はやや鎭まつて、人々は彼のいふことを聞かうと耳を傾けた。背なかの子がむつかる聲があちこちに聞えはじめてゐた。

「何かね？　山本君。」と、細谷がうながした。

「ほかのことぢやない、分配のことなんだが……分配の基準になる、出役時の、勞働能率の決定を、もう少しきちんと、納得のいくやうにやつてもらひたいもんだ。あれぢや不公平だ……」

「不公平だつて？」と、細谷はやや氣色ばんでとがめた。「能率決定の基準はちやんと規約によつてきまつてゐるんだ。男女別、年齢に從つて、一定の歩合といふものはちやんときまつてゐる。

出役日數は毎日、それぞれの勞働において係りが勞働日誌をつけてゐるから、ある作業の終りにはちやんとわかる。この出役日數とさきの歩合とを睨み合はして計算してゆく。さういふふうにちやんとやつてゐるんだから、間違ひつこはない。不公平とはどういふことだ？」

「そりやね、きまりはいかにもその通りさ。」

山本はバカにしたやうな笑ひをもらした。

「きまりはいかにもその通りだが、それは机の上だけのことさ。實際の支拂計算の時、そのとほり間ちがひなくきちんと行はれてゐるかどうかといふことさ……不公平をやらうとして不公平をやつてゐるなどとは誰も言ひやしないよ。しかし勞働量を出す計算はずゐぶん面倒臭いもんだらうからね。眠かけしてやつて、數字がまちがつたとしても、實際に支拂はれる方になつてみりや、不公平だといふことになるよ。」

「君が實際にさういふ目にあつたといふのか？　もしさうならその時なぜそれを言つて來ないんだ。調べてみてこつちが計算をまちがつてゐたら、いつでもそれは訂正するよ。その時言つて來ないでゐて、今頃そんなことを言つたつて……」

「具體的にはどんなことなんだね？　計算はわしだつてやつてゐるんだ……」と群野が訊いた。

「その面倒なことを、お前、やつてみろ！」と、彌次つたものがある。

「すぐ居眠つちまふだらう！」

笑ひ聲が起つた。醉つぱらつて十露盤はじいて見ろ！　といふやうな聲もまじつた。今日は飲んで來てゐるらしくも見えないが、山本は有名な飲み助なのだつた。

「まあね……」と、山本は依然バカにしたやうな薄ら笑ひをもらしてゐた。

「面倒な計算をやつてくれる人のことは、大へんだらうと思つてわしなんぞも日頃から有難く思つてゐるがね。しかしわしはたとひ間違はなくたつて、きまり通りきちんとやつたところで、不公平だと思つてゐるんだ……」

「一體、どういふことなんだそりや。」

「たとへばさ。規定では、男一人前のものの力は十、女一人前のものの力は七だ。だが、實際は、おれんところの嚊あなんぞは、となり近所の男の誰それなんぞよりは、どんな仕事をやらしてみたつて、ずつと力がある。あれらが十で、おれんとこの嚊あが、七なんぞといふのは、不公平だ……」

どつときた笑ひが起つた。

「ちげえねえ……」

山本の妻の働きを知つてゐる人々は笑ひながらも彼の言ふことを承認した。

「嚊あはいかにもさうだが、お前はどうだ？」

また新しい笑ひが起つた。

「山本のおつかあは來てねえかね？ ー
しかし彼女は見えなかつた。
「おれとこの息子は十五だ。」と、山本はかまはずつづけた。「十五だが、おつかあに似て、なりもでかいし、力も強い。ほかんとこの息子の十七ぶんも十八ぶんもある。ところがその歩合は、十五が三・五で、十六が六、十七が七だ。おれんとこの息子よりずつと甲斐性無しのものが、年が二つ大きいといふだけのことで、倍の歩合をとるなんぞは、どう考へてみたつて不公平ぢやねえか？」
「一々、一人々々についてそんなことを言つてゐた日にやきりがねえさ！ 大體のところできめるんでなくつちや。一人々々について區別をつけるわけにはいくもんぢやなし、さうすりやどうしたつて、男と女の別とか年齢別とかいふことにするしか仕方がないぢやないか？」
桑島といふ若い男が言つた。
「笑ひ事ぢやねえや。山本の言ふ事ア ほんたうだ！」と、熊の皮の胴着を着た男、西谷が、酒臭い息を吐きながら言つた。
「おれん家なんぞは口の數も多いが、働き人の數も多い。それがみんなほかへ行かずにそろつて共同作業に出役してゐる。ほかにいい仕事があつたつて眼もくれるもんぢやねえ。みんな部落のことを思やあこそだ。それがどうだい？ 組合の役員とかなんとか言つてる人のなかにだつて、

ずゐぶんいいかげんなのがゐるやうだよ。弟とか子供とかの働けるもなアさつさとどつかいい仕事の口をもとめて出稼ぎに出してやつてさ。あとに殘つたものだけがまるで遊び半分に出役してゐるんだ。」
「一生懸命にやつてもやらなくても、一日は一日の日當になるんだからなあ。」と、一人があざけりの聲で言つた。
「全くだ！ 勞働能力のあるものは、どこへも行かずに全部部落の共同經營のために出役することといふ組合の約束を、その通り守つてゐるおれたちなんざア馬鹿ものだよ、全く。正直者アいつだつて馬鹿ア見るんだ。」
西谷は調子に乘つて、怒鳴るやうな大きな聲を出した。
「働き人の數の多いことから言やあ、おれん家の方が、西谷のところよりやまだ一枚上だ。」
髮の毛の白い栗林が言ひはじめた。
「西谷んとこと同じやうにおれんとこでだつてみんな部落のために出役してる。ところが、各戸平均の、戸別配當の十分の三といふのはこれは何だね？ どう考へたつてこりや高いよ。働き人が少なかつたり、西谷のいふやうにほかさ出稼ぎに行つたりしてる家は有難からうが、出役者をたくさん出してゐる家はこの十分の三には不平だよ。戸別配當が十分の三で、出役勞働量に對する分配が十分の七だなんてことがあるもんかね。不公平だよ。これは不公平だよ！」

溫和な顔をした老人も、今日はこれだけは言つてやらねばならぬと思ひ定めて來たかのやうに、聲をはげまして言つた。

「さうだ、さうだ、十分の三は高いや！」

何人かの聲がそれに和して叫んだ。

「おれん家なんぞも今年からは出稼ぎだ！　でないと馬鹿ア見る！」と、熊の胴着が叫んだ。

「さうともさ。おれん家もよ！」と、老人がそれに應じた。

「しかし、今のままぢや、くらしにこまるから出稼ぎにも出るんだからなあ。くらしをよくするために出稼ぎに行くことができねえほど窮屈な組合ぢや仕方があんめえ。」

今までに家族のものをずつと出稼ぎに出して來た男が、遠慮しいしい言つた。

「だから、おめえなんぞは利巧者だつてことよ。」

「くらしをよくしてえのは誰でもさ。ただおれたちは馬鹿正直だから、組合のため、部落のためつて、そのことばかり考へて今までやつて來たんだ。」

五十一

高橋、梶野たちは、かういふ聲を聞きながら不思議に何も言はなかつた。人々の不滿、人々の攻撃は、直接間接に彼等に向つて放たれてゐるものであつた。彼等は出稼ぎを出してもゐたし、

自分たちがつくつた規約を自分たちが先になつて破つてもゐた。戸別配當の十分の三といふことも、當初からあつた組合員の反對の聲を押して彼等が定めたものであつた。彼等はこれらの不平、攻撃に對して、當然何かをいふべきであつた。辯解なり、主張なりをなすべきであつた。しかも彼等はおしだまつてゐた。

彼等は一言もないのであらうか？　彼等は屈服してゐるのであらうか？

彼等のうちのあるものは、たとへば高橋などは何かしら滿足げにさへ見えた。杉原はその感情の動きを見逃さなかつた。事柄は彼等の豫期した通りに、目論んだ通りに、きはめて自然の道行きにおいて進行しつつある。

共同經營に對する不信、その方向に向つて場内の空氣は高まりつつある。

最初に、川島からの物質的援助の杜絶、といふことを杉原をして語らしめて、組合經營の物的基礎について不安の念を抱かしめたといふことは、後に、共同經營についての不平不滿が述べられる時になつてきはめて效果的にはたらいた。

杉原はだまつて聞いてゐた。

高橋が考へ深さうな顔をして乘り出して來た。

「みんなのいふことはそれぞれもつともだよ。わしらもさつきから聞いてゐて非常に參考になつた。かうみんなが一緒に集るといふのは年に何回とあるわけぢやないんだから、日頃思つてるこ

とをさらけ出して話し合つた方がいいんだ。ところで議長。」

と、彼はあらたまつて細谷に呼びかけた。

「わしに一つ提案があるんだが……」

「何かね、高橋君。」

「さつきからだんだんみんなの言ふことを聞いてゐると、要するに話は、農業共同經營そのものにひそんでゐるかなりに根本的な矛盾といふことに觸れてゐるやうに思ふ。今日のやうにはつきり言はれたといふことは今まであまりなかつたが、しかしかういふ問題は今までしよつちゆうどこかでぶすぶすくすぶつてゐた。いつまでもそんなことであつてはどうも面白からぬことだ。それでどうだらう？　ひとつ日程を變更して、共同經營そのものをもう一ぺん考へ直してみる、我我の今後の生活にとつて、今のやうな共同經營のやり方で進むことが果して當を得たものであるかどうかといふことを考へてみる、といふことにしたら……」

「贊成！」と、谷口が大きな聲で叫んだ。

「どうですか。今高橋君からお聞きのやうな提案がありましたが……」

贊成！　贊成！　といふ聲が相次いで起つた。

「何ですな。高橋君の提案は、これをはつきり言つてしまへば、つまるところ、我々の生活にとつて、共同經營がいいか、それとも個人經營がいいか、それをもう一ぺん考へてみたい、と、か

ういふことですな。」

さうだ、さうだ、といふ聲が起つた。

「さういふことです。」と、高橋は落ち着き拂つて答へた。

「言ひ出した本人だから、わしからまづ自分の考へを言はさしてもらはう。」と、高橋ははじめた。

「わしはこの頃になつてつくづく思ふやうになつたんだが、われわれの部落でこの共同經營の使命といふものは、一應終つたと見なしていいのではないかと思ふ、といふのはだ。われわれがこの原野に入植して來て開墾をはじめた當初には、それは何でも共同でやるといふことはたしかに理由があり、意義のあることだつた。共同でやることによつてはじめてこれだけの土地を切りひらくことが出來たんだからね。わしなぞは一番早い入植者の一人で、川島の土地になる以前からはいつてゐたものだが、その頃はまだほんのわづかな者たちが、てんでんばらばらにやつてゐたものだから、仕事は一向にはかどらなかつたものさ。人を雇はうにもその資力はなしさ。ところが、川島の土地になつてから、新しい入植者がずつとふえて來た。そして旦那のすすめで共同經營にしたらどうかといふことになつた。これには反對するものもずゐぶんとあつた。それはさうだらう、あとから來たものとちがつて、早くからゐるものは、苦勞して起した自分の土地ときまつてゐる土地から農具から家畜までを全部組合に提供するといふことになるんだからな。しかし細谷やわしなどが、さういふ反對する者をなだめ說きふせてさうしてまアどうにか共同經營とい

ふことになつたんだ。それといふのは開墾當初の、つまり段階だな、その段階にある時には、どうしてもさういふ組織によらねばならぬ、といふことを強く悟つたからなんだ。共同といふことのほんたうの精神や意義をしつかとわきまへてゐるのはほかならぬ我々なんだ。あとから來た若い者なんかにかれこれ說教されたりする必要は決してないことなんだ。」

彼は一段と聲をはげまして言つてみえを切つた。さうだ、さうだ、といふ聲がまた起つた。

「そじてここ數年間ずつとさういふ風にしてやつて來た。そのおかげでわれわれの部落もここまでになつたのだが、ところで、ぢやあこのやり方をいつまでも續けて行くべきものかどうかといふことになると、わしは決してさういふものではないし、さういふものであつてはならぬと思ふんだ。ものには發展といふことがあるし、その時その時の狀況に應じなければならぬといふこともある。わしは我々の部落では共同經營の時期はもう終つて個人々々の經營にはいらねばならん時がもう來てゐるのだと思ふ。さつき西谷や栗林からいろいろと話があつたが、ああいふ聲がでるといふことが、そもそも、さういふ時が來てゐるといふことを證據立ててゐる。

パチパチと拍手の音が鳴つた。

「今まではさう苦でもなかつたことが、しきりに苦に感じられて來るといふのは今のやり方が今の實際にもう合はなくなつて來たといふことぢやないか。發展といふことを言ふが、わしは、よその土地のことは知らんが、わしらこの東北の開墾百姓の上で言へば、はじめ個人經營だつたものが共同經營に移るのでなく、共同經營から個人經營に移つてゆくのが發展だと思ふ。百姓は自分の土地といへる土地を持ち、家畜を持ち農具を持つて一本立ち出來る時がいつか來ると思へばこそ苦しみも苦しみと思はないでやつていけるんぢやないか？　開墾初期はだめだつたが、もうそろそろその道についてもいい時だ。わしなんぞその最後ののぞみは川島の旦那から土地を安くわけてもらつてさ——わしらの力で開いた土地だもの、旦那だつて聞いてくれんことはあるまい——早く一本立ちになるといふことだ。これはわしばかりぢやない。百姓なら誰だつて腹の底ではさう思つてゐるにちがひはあるまいと思ふ。」

五十二

高橋は一息ついた。彼が言ひ終つた時、參會者の間にはざわめきが起つた。緊張から解きはなたれた時のざわめきだつた。ほつとしたやうな溜息ももれきこえた。達者な高橋の演說は明らかに人々にある感動を與へた。かねがね腹の底では思つてゐたが、うまく言へぬか、何かに遠慮するかして言ひ出さずにゐたことを、たくみに引き出してくれた、代辯してくれたといふ感じを人人に與へたのである。

「たしかに、今となつちや、共同經營にはいろいろな不便や差し障りがあるよ。」

今度はおなじ仲間の谷口がはじめた。

「人間はなんといつたつて欲なもんだからなあ。つくる土地も、そこからあがるものも自分のものといふんでなくつちや勵みにならねえ。共同作業などと言つて、みんなでつくつたものをごちやまぜにして、そこから分け前がくるんぢや、どれだけが一體ほんたうに自分の力でできたものかといふことが、どうもはつきりしなくて面白くねえ。はじめからしまひまで自分が手塩にかけて作つたものとぢやおなじ一俵でも一俵が違はあ。個人經營であれば、多ければ多いでうれしいし、少なければ少いであきらめる。現に共同作業地でのみんなのふだんの仕事つぶりを見て見ねえか。出來るだけ能率をあげて、仕事を早くすまさうつてえのが普通な筈なのに、ところがここではさうでねえ、のらりくらりして長くかかつてゐる。そりやさうな筈だ。共同經營であれば人夫を多く出せばそれだけ勞賃がもらへるんだからな。もしもこれが自分の畑であつて見ろ。誰もそんなずるけた氣を起す奴なんぞありやしねえから。それからまた家畜でも農具でも、ものを大切にするつていふことをしねえ。十年使へるものも五年しか使へねえやうな使ひ方をする。それもその筈だ。自分のものぢやねえんだから。はつきり自分のものときまりやがらつとちがふ。それがわるいと言つて責めて見たところでどうにもなるもんでねえ。人間は誰しも欲なもんだからな。」

「作物を作る上にもどうも自分の畑のやうに研究はしないやうだな。それも今の話とおんなじことだが。」と、群野が言つた。

「わしもさつきの高橋の考へには大賛成なんだ。」と、梶野がつづいた。「開墾當初は共同もいいが、今はもうその時期ではないといふことは、たとへばかういふことからも言へることだよ。開墾當初は何しろ仕事がきまりきつてゐて、大ざつぱだからなあ。仕事を割りつけ、共同で作業をするのもやりいいよ。またその勞働量を計算するといふことだつて割合かんたんだ。ところが四年五年とたつて農業の方も目鼻がついて來ると、仕事の方もだんだん複雜になつてくる。小さなこまごまとした仕事もふえてくる。一定時間に一定のところへ集つて一せいにやるといふやうな仕事ばかりぢやなくなつてくる。——つまり、共同作業といふことには元來、適しないやうな仕事の世界が出てくるんだよ。わしは記帳づけを長くやつてゐるからさういふことをとくに感じるんだがね……」

部落の中でも頭が進み、口も達者なそれらの人々によつてそのやうに意見は述べられた。一般の參會者たちは、自ら進んで自分の考へを言ひ出しはせぬものの、同感のいろはありありと讀まれた。

「今皆さんからいろいろと話があつたが、」と、その時杉原がはじめて口を切つた。

「わたしもこの問題について、自分の考へを少しお話したいと思ふ。わたしの考へが今まで出た意見と同じものなら言ふ必要もないが、いろんな點でちがつてゐるもんだから。」

彼の物靜かな發言は、なんとなくある壓力を感じさせた。彼の顏は益々蒼白に緊張した。ある

信念を語らうとする者の鋭氣が、物靜かな語氣、蒼白な風貌のなかにひそんでゐた。それは語るに從つておのづから外へ發してゆくものであつた。

筵の上の人々は寒さも忘れてゐた。彼等は發言するものもせぬものも、事柄が、自分たちの生活にとつて持つ重要性を感じてゐた。

不意に背なかの子が大きな聲で泣き出した。女は急いで立つて背をゆすぶりながら裏の戸口から出て行つた。それをしほに子供連れの女で立つて行つたものが三人ほどあつた。さういふなかで杉原の言葉が續いた。

「わしはみんなが今までいろいろ言つたことは、みなそれぞれ理由があることで、我々の今後のために非常にためになることだと思ふよ。しかし高橋君はそこからすぐ、共同經營か個人經營か、といふ風に問題を出して來たけれども、わしは、たとひ我々の共同組合の今のやり方にいろいろさつきから言はれてゐるやうな缺點はあるとしても、さういふ風に問題を出すべきではあるまいと思つてゐるんだ。それは少し早まりすぎてゐる。根本は今のままで、わるいところはみんなの力でなほしてゆく、といふやうにすべきだと思ふ。わしの結論をさきに言つてしまへば、わしは、部落がもう共同經營の時代を過ぎたなどとは思はない、それどころか、組合の固めは益々しつかりとして行つて、新しい部落をつくらねばならぬと思ふ。我々は今はどうして食ふかといふことだけで一ぱいだが、我々の目標はむろんそれ以上のところにあるので、生活の安定に伴つていろ

んな樂しいもくろみも立てられるんだ。しかしそれはみんな部落單位でやらなければならない。ある家は幸福になり、ある家は不幸になる、といふことはないやうにしなければならない。さうなるんだつたら、ほかの部落とちがひはしない。それでいいといふのなら問題は簡單だ。そして今個人經營に移るといふことは、さうなる原因をつくるものだ。

共同經營のいろいろな缺點があげられ、だから共同經營はだめだといふ風にすぐに持つて行かれたが、果してその缺點は我々の力でどうすることもできないやうなものか。

わしはさうは思はない。たとへば山本君やその他の人から、勞働能率の査定の困難、その不公平といふことについていろいろ言はれた。たしかにこれは共同經營に對する不滿の大きなもとになつてゐる。しかし不公平だ、自分のところは人のところよりも多く勞働量を出してゐる、しかもそれがその通り査定されないといつて責める前に、もう少し考へを廣くしてものを見ることが必要ぢやないか。男女の別、年齢の別によつて勞働能率にもそれぞれ差等がつけてある。ところが女でも男よりも仕事をするものがあり、年が少くても多いものよりも仕事をするものがあるといつて苦情が出るんだが、しかしさういふことを一々言ひはじめたら、何十人ゐようが一人々々みんなちがふといふことになつてきりがなくなるんぢやないか？　一人々々に差等をつけねばならぬといふことになるが、實際問題として出來ることでもなし、出來ても好ましいことぢやない。男女別にしたり、年齢別にしたりするといふのは、大體の標準をきめたのでもちろん便法にすぎ

ないんだ。女が男より劣るといつたつて、耕耘に於てはさうだらうが田植ゑとなれば男と同等かもしくはそれを乘りこえる。藥製品をつくるやうな仕事の場合には男よりずつとすぐれてゐる場合がある。年寄りは弱いが、苗配りのやうな仕事では年寄りの方がずつと能率的だ。――さういふ關係が一人々々、みんなの間にあるんだ。さういふことを考へて行けば、おれは誰それよりも仕事をよくするのに比率はかうだといふやうなこともさう簡單に言へることぢやないと思ふ。ましてや少年もやがて成年になり、成年もやがて年寄りになるんだ。長い目で見、全體を考へるといふことが必要ぢやないか？　一人々々の能力の測定なんか完全にできることぢやない、だから共同作業なんぞやめてしまへ、といふんぢやなくて、どうせ完全は望まれない、大體の便法で滿足しよう、といふ氣になれぬものだらうか？　全體を考へてたがひに讓り合ふ氣持になれば、わしはそれは出來る筈のことだと思ふんだが。

勞働能力の比率の決定といふことについてはわしは自分の考へを持つてゐる。以前にそれを言つた時には相手にされなかつたんだが、この際、みんなそれをもう一度考へ直して見てくれないかな。それは、男女の別とか年齢の別とか、さう言つた區別は一切認めない、畑へ出れるほどのものである限りは、みんなその力を一と見なすといふ意見だ。これはちよつと聞くと亂暴のやうにきこえるかも知れないけれども、わしのさつき言つたことをよく考へてくれれば、それを言ひ出したほんたうの精神はわかつてもらへると思ふんだが。」

五十三

「話中だが、ちよつと杉原君に質問があるんだが、」と、高橋が口をはさんだ。「杉原君は能率を何もかもすべて一に見なすといふ。それはいかにもものわかつた意見のやうに聞えるが、さういふやうなことでは勵みがなくなつて、農業技術の上で研究心がなくなり、進歩しないといふことになりはすまいかと思はれるがどうだらうか？　たとへば精農をもつて許される人が組合のなかにゐるとして、さういふ人の力を一般人なみに取扱つたとしたら、彼等は不平でないわけにはいくまい。不平を持つなと言つたところで、そいつは無理だからね。」

「さういふ人は何か特別待遇しなければ仕事につとめなくなり、彼の獲得した技術で人をみちびくことをしなくなるといふのかい？　わしはそんなものだとは思はないな。精農には人を教へたり、自分の方法で農事の改善が行はれたりすることに對するもつと純粹な喜びがある筈だ。自分の獲得した方法は祕密にして、人にその恩惠に浴させぬ、といふやうなのは古い考へで、そんな考へへの人はこの部落にはあるとは思はないし、またそんな考へへのはいりこむ餘地をなくするといふ點からいつても、共同經營は有難いものなんだ。」

「君は人間をまるで欲のない精神だけのもののやうに取扱つてゐる。さういふ人間もゐるかも知れぬが、みんながみんなそんなもんぢやない。人間とはそんなものぢやないよ。」

高橋は冷笑的に口をゆがめた。杉原は答へようとして彼を見た。が、答へずにさきのはなしをつづけた。

「分配について、各戸平均の戸別割の十分の三が、勞働量にもとづく分配の十分の七にくらべて高すぎるといふのであれば、――それが一般の聲だとしたならば、相談しあつてその率を引き下げたらいいぢやないか？　果してどの程度の比率が適當であるかといふことは最初からはつきりとわかつてゐたわけぢやない。大體これでよからう、といふところできめて、今までやつてきたわけなんだ。それで今はもうある程度の經驗を積んだんだから、その經驗にもとづいて、この點が不十分だつた、あの點はかうすべきであつた、と言つて直す。物事は何でもさういふもんだらう？　不十分だと氣がついたといふのも、一定の年月を經て見なければわからなかつたんだ。わかつたら直してゆくことで進歩するんだ。それを、かういふ點が意に滿たぬ、だから共同經營が間ちがひだ、では、餘りに一足飛びすぎるといふもんぢやないか？

しかし十分の三が高率にすぎるといふことをいふ場合でも、自分の家族には働き手が多いから、戸別平均割が高率では損がいく、といふ立場からだけ主張するのではいけないと思ふ。部落全體といふものがいつも考へられてゐなければならぬと思ふ。

部落全體を考へる、その立場にいつも立つて考へたり動いたりする、といふことが、きはめて自然に、何の抵抗も感ぜずにおこなはれるといふのは、さう簡單なことぢやない。それまでには

時間もかかるし、いろんなゴタゴタにも逢ふ。しかし我々はさういふ考へ方を、ただの說教として與へられてゐるんぢやなしに、それが育つてゆく部落の共同生活そのものを與へられてゐるんだ。共同生活は我々が古くから持つてゐる自分本位の考へ方に出逢つてしばしばつまづく。しかしそれは一面だ。その一面のみを見て、だから共同經營は不合理だ、と考へるのは行き過ぎだ。他の一面において共同精神が漸次高まつて行つてゐる事實をも見なくてはならぬ。古い精神と新しい精神とが同時に存在し戰ひつつゆく。去年我々はその美しい共同精神の高まりによつて冷害を見事征服したではないか？　農具をだいじにせぬ、家畜管理において怠慢である、といふことが言はれたが、さういふことはたしかにあるにしても、又一方、それとは全く反對な我々の知つてゐる事實もあるぢやないか？　家畜の世話をする當番にあたつたものは、自分の當番中には決して馬に病氣させたりしてはならぬといふ强い責任感を持つてゐる。馬の樣子がをかしいといふので、眞夜中に獸醫を呼びに行つて、自分の馬ならどうなつても諦めるが、だいじな部落の馬に萬一のことがあつてはみんなにすまぬ、と言つてゐるぢやないか？　かういふ責任感、全體を考へる精神はどうして生れたのだ？

日當さへもらへばいいといふので、仕事の能率をあげぬといふこともわしは全體の傾向だとはいへぬと思ふ。ややもすればさういふおそれがあるといふまでぢやないか。我々は日雇ぢやない。仕事全體に責任を持ち、怠れば直接生活にさしさはつてくるのだから、さういふ日雇根性にはな

れぬわけのものなのだ。

小さな勞力の利用が行はれぬといふこともそれは共同經營だからといふのではなくて、適當な副業といふやうなものがないといふことなのだから、弱い女手や子供の手を生かすことのできるやうな施設を漸次經營のなかに折り込んでゆけばその缺點はなくなると思ふ。」

彼の話が、集つた人々にどのやうに受けとられたかといふことは、彼の前に話した人々の場合のやうには明瞭ではなかつた。贊成！　といふやうな聲も、さうだ！　といふやうな聲もかからなかつた。人々はむしろ靜肅であつた。時々女たちが立つて席をはづすぐらゐのものだつた。彼等は聲をかけなかつたが、顔にあらはれる表情は必ずしも明瞭には彼等の心のうちを語つてゐなかつた。ただ漠然たる動搖がその面にあらはれてゐた。彼等の多くは高橋たちに言はれればなるほどと思ふ。しかしまた杉原に言はれれば、それもさうかと思ふ。

しかしさういふ場合どつちにつくかといふことを決定するものは、彼等の希望であつた。獨立した自作農への彼等の希望であつた。彼等のある者はその希望を抱いて、組合の解散を主張したり、個人的に脱退を願ひ出たりしたことが過去にすでにあつたくらゐである。地主も組合の幹部もそれを許さなかつたので、いやいやながらついて來たのだが、今は樣子がまるで違つてしまつた。話の樣子によれば地主はもう昔のやうには力を貸さぬといふ。幹部たちの多くも今までのやり方をやめて一本立ちにならうとする考へになつて來てゐる。その人々のために共同經營を續け

て來たやうなものだから、その人々の考へが變つた以上は、もう何に遠慮することもいらない。

彼等はさう思ふのであつた。一人立ちになつて思つた通りにやりたいといふ彼等の願ひは強かつた。組合の規律から彼等は壓迫を感じてゐた。杉原の言葉を聞いてゐる時にはそれもさうだと思つても、ひと度この強い希望に歸つて來る時、彼等の心は反撥した。意見が正しいかどうかといふことは、この希望をみたすものであるかどうかによつてきまるといふ考へ方の方に、次第に移つてゆくのだつた。

五十四

杉原の言葉がちよつととぎれた時に、高橋がまた言ひ出した。彼は絶えず口邊に一種の冷笑をたたへながら反駁した。

「杉原君。君の意見を聞いてゐると聞いてゐる時はまことにもつともだといふやうな氣がするがね、しかし君の場合はいつでも考への根本なり、前提なりがわしらには承服できかねるんだ。君のはいつでもきれいごとだ。理想論だ。話せば話すほど實際とはかけはなれたものになつて行くばかりさ。君は人間をまるで欲のないものにして扱つてゐるといふことをさつき言つたが、君の出發點はいつでもそんな風なもんだ。君は新しい生活とか、新しい建設とかいふことをしきりに言つてゐるが、古いとか新しいとかしきりに言つて、この部落がほかの部落とちがはねばならぬ

といふやうなことを言つてゐるが、それは一體どういふことなんだい？　わしらは何も新しいも古いもないんだよ。この部落が何もほかの部落とちがつたり變り種になつたり、あるひは模範になつたりしなくたつていいんだよ。普通の部落でいいんだ。わしらがいつでも求めてゐるものは、新しいとかなんとかいふことぢやなくて、生活の安定なんだ。古くたつてなんだつていいさ。それがわしらの生活の安定を保證してくれるもんでありさへすりやね。」

さうだ！　といふ聲がまたかかつた。それは場末の芝居小屋などで開かれる政談演説の時のかけ聲に似てゐた。高橋は益々元氣づいた。

「一體、君には共同經營に對する一種の妄信があると思ふね。共同經營が個人經營よりも何かすぐれた、進歩した、新しい形式だといふことを頭からきめてしまつてゐる。一體何からさういふことを言ふんだい？　共同とか集團何々とか言へばただもうそれだけで有難くなつてしまふやうな人間がこの頃は縣の役人なんかのなかにもゐるやうだが、わしらは決してそんなふうには考へないよ。原野を開墾する當初にはさういふ風にしてやることが必要だつたからさういふ風にしてやつたまでのことだ。何も部落のあらん限りさうでなければならぬなどとは思つてやしない。いろんな不便、不都合を感じ面白からぬ目にあひながらそれでもなほさういふ形式を固執しなければならぬといふ原因はどこにあるんだい？　さういふ不便や不都合はなほしていける、と君は言ふが、そのために費す力だけでも目に見えるものとしたら大へんなものだらうが、そんなにして

までどうして固執しなければならないんだ。それだけの力をみな農事の方のことに注いだらどんなものだ。經營方式などは生活の必要に應じてどんどん變化してゆくべきものだ。共同經營、共同經營と言つて、神棚に祭つておくやうなことはいらぬことだよ。」

笑ひ聲が起つた。思はず失笑した聲のなかに、明らかに杉原に向つてあてつけるやうな聲もまじつた。

「なんだか知らねえが、共同經營はもうたくさんだよ。おれら、早く、ここはおれん家の畑、ときまつたところで、種を播いたり肥しをやつたりしてえよ。」

「さうだよ。ここがおれんが家の畑、ときまらねえことにやなんぼにも精が出ねえよ。百姓の仕事は、時間をきめて出て、また時間をきめて歸るといふ風にはいかねえもんだ。自分の畑ときまりや、夜夜中にだつて起きて働くからなあ……」

「汁の實に入れる野菜の畑も一軒々々持つことを許されんやうなことぢやいやだからなあ。」

ぶつくさとそんな聲が起つた。さういふ聲に鼓舞されたかのやうに、高橋は益々元氣づいて行つた。

「杉原君は共同經營を新しい進歩した形のやうに頭からきめてしまつてゐるが、日本の百姓といふものは自作農による個人經營が、古いも新しいもない一番自然な形なんだ。いつ、どんな時代が來たつて、どんな所でだつて、それはさうさ。共同經營といふのは何かの事情で仕方のない場

合にだけとる形さ。杉原君はその常態でないものを普通の形にしてしまはうとしてゐる。さういふ農民の本性に反するやうなことは、君、だめだよ。未開の原野を耕して、將來はその土地を安く地主から手に入れることができて、一人前の自作農になることが出來る、といふ望みでもあればこそ、こんなところに移住もして來る……でなけりや、誰が來るもんかね、君。

「わしは何も共同經營を妄信なんかしてやしない。」と、杉原は靜かに言つた。

「共同經營に對して空想的な考へを頭のなかでだけつくりあげてゐるかのやうに高橋君は言ふがそんなことはない。わしの立場も亦、高橋君が言ふやうな、我々は一體どうしたら、この土地において生活の安定を得ることができるか、堅實な農民生活を確立することができるか、といふことだ。わしはその立場から考へる。そして現在、この土地に於ては、共同經營によらなければならぬと主張するのだ。

どつちが公平に事實を見てゐるか、どつちが見てゐないか？　高橋君はじめ、いろんな人がさつきから組合の今のやり方について話した。それはあたつてゐるところがある。しかしそれは缺點ばかりを取りあげて指摘したものぢやないか。我々の共同組合の長所、その組織の運用によつてのみ、我々にもたらされた生活上の利益、幸福といふことについては全く言はれてゐないぢやないか？

我々は誰の眼にも明らかな事實を見よう。この冬、我々の周圍の村々は餓死してゐる。たくさん

の人間が言ひやうのない不幸の底にゐる。そのなかにゐて、我々のこの小さな部落が、どうにかかうにか餓死だけは知らずに、今日もかうして元氣な顏を一つところに集めて、かうして元氣に話し合つてゐる。これは一體どういふことか、我々にだけ許されたかういふ幸福の原因は一體何か？

去年の冷害をわしたちは乘り切ることができた。それは技術的には小池君といふ人のおかげだ。また、いち早く冷害の危險について警告してくれた湧谷さんのおかげだ。しかしたとひ小池君や湧谷さんのやうな人がゐたとしても、わしたちの部落がもしも共同組合の組織によらず、個人經營で、一人々々が勝手にふるまふことが許されるやうな仕組みであつたとしたならばどうだつたらう？　あのやうな成果を實現することができたらうか？　いや、それは絕對にだめだつたらう。いい方策が立つたとしても、賛成するものあり、不賛成なものありといふことで、歩調が一つにならぬのではだめだ。小池君の部落でさへそのために失敗した。我々の部落だつてみんながみんな、心から賛成だつたわけではない。腹では疑はしく思つてゐた者も、不賛成だつた者もゐたのだが、いはば大勢にひきずられてあの方策の下に從つた。それが組織の力といふものだ。さうしてやつていくうちに、事實が次々に豫想の的中と、方策の正しさとを明らかにして行つたわけだ。そして幸福がみんなの上に、賛成した者の上にも不賛成だつた者の上にも、平等にもたらされたといふわけなのだ。

この、現在も尙その事實のなかにゐる、と言つていい新しい經驗をみんな思ひ出してくれないか？　共同組合がこんな大きなおかげをもたらしてくれたのだといふことを。それを少しばかり事情が好轉して來たからと言つて、共同經營の時期は終つたといふやうなことを言ふのはまちがつてゐると思ふんだ。」

「冷害などといふのはいはば非常時のことだ。組織は平常時をもとにして考へるべきものだからね。非常時には非常時にふさはしい組織をつくつたらいい。」

「冷害は非常時かも知れない。しかしわし等はこの土地の狀況を考へる時に、さういふ非常時がむしろ普通の狀態であると考へねばならぬと思ふのだよ。今までの經驗から推して考へてみてもだね。……それに、危急な時にのぞんで、急にそれに對應する組織と方策で行かうとしてみたところで、なかなか歩調が揃ふものぢやないんだから。

もつとも共同といつたところで、その結合にはゆるやかな形もあれば固い形もある。個人の野菜畑も認めなかつたといふのは、全部の耕地の上に統制を加へた去年のやうな時にはやむを得なかつたので、さういふ部分的な點については、その年々の相談によつて適當にきめていくことができるんだ。それは今までもずつとやつて來たとほりだ。

冷害は、異常な場合で例外だといふやうに今言はれた。例外だとしてもいいが、それでは、平常の時、日常ふだんの農業活動の上で、共同經營は恩惠を與へてゐないか？

我々はけんそんな氣持で、入植した當時のことをふりかへつてみたらどうかと思ふ。わしなどはその第一に擧げられねばならぬ者だが、入植者たちは遠慮なく言へば決して農業のことに熟達してゐる者ばかりではなかつたのだ。わしのやうに農事にはほとんど未經驗なものもゐたし、また長く農業から離れてゐたやうな人もゐた。方々の土地から集つて來た人々だから、農業技術の上にもいろいろな相違をもつてゐた。もしもそれらの人々がバラバラに仕事をはじめたとしたならば、到底やつていけなくなる人が出ただらうし、また荒地がこんな短期間にこれまでに開發されるといふこともなかつただらうと思ふ。それが共同經營によつたものだから、適材適所で、經驗の足りないものの力もよく生かしてゆくことができた。そしてそのうちには未經驗者もだんだんにおぼえていつた。各地の農業經驗をたがひに出しあひ、研究し合つてその長所々々を生かすやうになつて行つた。そして今では組合員の農業技術は全體としてぐつと高まり、平均化されて來た。もつともわしのやうに事務的なことに多くの時間を割いて來たものは、今だにだめなのだが。人間は慣れてしまへば何でもはじめからかうであつたかのやうに思ひ込んでしまふものなのだ。絶えず昔のことを思ひ返しながら行くといふことは必要ぢやないか。」

「わしらは昔のことを忘れたりなんかしてやしないぜ。昔からのことを思へばこそ、さつきからのわしのやうな意見が出るのだ。つまり、杉原君のいふやうな共同經營組合の長所はみとめる。共同組合は、杉原君の言つたやうな役割をした。それは入植から今までの、いはば第一期におい

て必要であつた。しかしさういふ時期はすんで、新しい段階にはいつた。だからその時期にはその時期に適した新しい經營組織がなければならぬ、それは個人經營だ、とさういふのだ。」

「開墾中は今まででよかつたんだ。開墾が終つていよいよほんたうの農業といふ時になつたら、勵みになるものがなくちやだめだぞ。これだけ取つてこれだけ儲かる、土地もやがて自分のものになるといふ、それが勵みなんだ！」と、谷口が、いらだたしげに怒鳴るやうな大聲を出した。

「ちよつとお話中ですが、」と、その時新しい人が言つた。それはここへはいつて來た時から、一言もいはず、高橋と杉原との間の、激しくなつてゆく議論を見まもつてゐた小池だつた。

「この部落の農業技術が全體的に非常に高まつて來てゐるのは事實ですが、ほんたうはこれから、といふところだと思ふのです。ほんたうによくこの地方に適合した、少しぐらゐの自然的災害なんぞにはびくともしないだけの技術を生み出していくといふことはこれからのことだと思ひますが、それには綜合研究、綜合指導といふことが絶對に必要です。一人や二人でなく、部落全體が實驗を積み重ねて行くといふことが必要です。この部落はさういふ點から言つて非常にいい條件をそなへてゐたので、それを今、組合組織をやめてしまふといふやうなことになつてはじつに惜しいと思ひますが……」

「ちよつと、議長。」と、その時、谷口があらたまつて呼びかけた。議長の細谷は、忘れられた人のやうに机の前にぼんやりしてゐた。

「え？」

「今日の會は、我々の組合の正式な總會ですから、組合員以外の、他村の人の發言は差し控へてもらひたいと思ひます。」

細谷は困つたやうな顏をしてちらと小池の方を見た。人々も小池の方を見た。氣まづいいやな空氣が流れた。そのなかにゐて、青年小池は、ゆつくりと落ち着いた態度で、顏いろも變へず、言ひかけた口をつぐんだ。

杉原は勃然と怒りを感じた。彼は發言者の顏を見据ゑながら、思はず膝で前へにじり寄つた。

「何を言ふんだ！　谷口君。おれたちの總會に小池君が出て來て意見を述べたのは今日がはじめてかね？　今までに何度もあつたことだ。それも何も小池君の方から望んで出て來たわけぢやない。暇だれして出て來たつて小池君に何のとくがいく？　いつでもみんな、おれたちの方から行つて、頼んで出てもらつて、いろいろと參考になる意見を聞かしてもらつたんぢやないか。小池君は、おれたちの農業技術上の先生ぢやないか。この土地の土地柄がわからずにへまをやつたり、やりさうだつたりした時に、おれたちは彼の助言によつて切り拔けたことがどのくらゐあつたか知れやしないんだ。去年の危機だつておれたちは彼のおかげで乗りきつた。彼は恩人なんだ。谷口、君の今言つたことはさういふ人に向つて言ふ言葉か。正式な總會には他村のものは遠慮しろとか何とか、白々しい……」

彼は興奮して來て、ぶつつり口をつぐんだ。

「議長。共同經營か、個人經營かといふ問題については、意見はもう大體において盡されたやうに思ひます。手をあげてもらつて贊成不贊成をきめたらどうですか？」と、高橋が言つた。

「個人經營にするといつて、土地の分配はどんな風にしてやるんだね？　いい土地だつてわるい土地だつてある。くじ引か何かでも……」と、誰かが言つた。

「くじ引？」と、ほかのものが言つた。「おれはやつぱし前におれの土地だつたところを分けてもらひてえよ。」

「そりやお前のやうに前に土地を分けてもらつてゐて、それを組合さ出したものはいいが、おれみたいにはじめつから共同でやつて來たものは……」

「組合さ出した、自分の農具なんぞは、また個人でやるとするとどうなるのかね？　それをそのまま返してよこすのか、それとも……」

「おれの出した馬はもう死んでるんだから、買ひ戻すつたつて戻せねえし、馬はどうしたらいいもんだ。」

「みんな、組合參加の時の事情がそれぞれちがふものが、さう一々勝手なことを言つたつてだめだよ。」と、高橋が大聲で叱るやうに言つた。「それときまれば、いづれ、さういふ細かな問題とその方法について相談するために、あらためて會を開かなけりやならない。」

彼はまた細谷の方を向いて、切口上で言つた。

「議長、細かな點はいづれ日をあらためて相談するとして、依然共同經營とするか、それとも土地を分配し、全くの個人經營とするかについて、先づ、裁決して欲しいと思ひます。」

「おれは反對だ！　裁決する、――こんな重大な問題について、まだ十分、みんなからも話し合はぬうちに、贊成、不贊成をきめるなんていふことに反對だ。共同經營といふことにだつていくつものやり方がある。それについては、おれとしてもこれから話すところなのだ。さういふことを話し合はぬうちに、さういふ形式的なやり方できめることには反對だ。」と、杉原は怒鳴つた。

「個人經營にするとすれば、みんな、どんなものでもほんたうの百姓になり切つて、鍬をとつて田圃さ出にやならねえからね。組合の事務なんてものはなくなるんだから、組合で食つてたものにや、つらからうよ……」

梶野が、あぐらをかいてゐる膝をゆすぶるやうにして、エヘラエヘラ笑ひながら兩どなりの者に贊成をもとめるやうに言つた。

杉原はふいに鞭で引つぱたかれたやうな氣がした。彼は蒼白になつた。興奮がさめて行つた。胸のところが急に空つぽになつて行くやうな力のぬけ方を感じた。

「では、さういふことにします。」と細谷が言つた。「土地を分配して個人經營に移るといふことに、贊成の人は手を上げて下さい。――分配の方法その他についてはいづれまた改めて會をひら

きます――女の人も主人の代理として來てゐる人は手を上げてもよろしい。」

高橋、谷口、梶野、その他、彼等の息のかかつてゐるもので、前の方にかたまつて席をしめてゐるものが勢よく手をあげた。彼等は手をあげながら、後ろの方をふり返つてみた。それにうながされたやうに、ぽつりぽつりと手が上つた。

「手をあげない人は、みんな不賛成なのかね？」

すると、またぽつりぽつりと上つた。それでもまだ上らぬ手は殘つてゐた。

「過半數だ。」と、高橋が言つた。

「ぢやあ、賛成者多數と見て、さういふことに決定します。それでさういふことにきまつたとすると、今日の協議事項なども全然新たなものに變つてしまふから今日はこれで散會として、またあらためて、今度は個人經營に移行の方法その他について相談の集會を出來るだけ早く開くことにしたいと思ひますが、どうですか。」

三、四人のものが、賛成々々、と言つて、さういふことにきまつてしまつた。

杉原が茫然としてゐる間に事はきまつてしまつた。人々はどやどやと立ち上つた。冬の日は窓の小さな室内がもう薄暗くなつてゐた。

三

一

秋山信吉があの東北の寒村に、杉原耕造を訪ねた日からもうまる一年以上の月日がたつてゐた。一年ではあるけれども、その間に秋山の生活の上にもいろいろな變化があつた。第一に、杉原を訪ねた時にはまだひとり者であつた彼は、あの東北旅行から歸つて來てしばらくすると結婚した。相手はその三月前までは見たことも聞いたこともない田舍生れの娘であつた。

ある日、仕事の上で往き來のある秋山の女友達がその敎へ子であつた顏にソバカスの一ぱいある小さな娘をつれて遊びに來た。彼等はとりとめのないことをしばらく話し合ひ、そして二人は歸つて行つた。それから何日かしてまた二人は遊びに來た。その時、その娘の鄕里の田舍の話が出た。

「あれ何ていふうたでしたつけ？　ひろ子さん、御存知でせう？　あなた、うたつて聞かせてよ。」

その地方に昔から有名な俚謠のことを言つて、女友達はしきりに娘にせがんだ。すると娘はうたひだした。少しももじもじする風もなく、おどろくべき率直さでうたひだした。それはほとんどみやびと言つていいほどに美しい田舍ことばのうたであつた。たどたどしげに都會言葉をつかつてゐた娘は自分の世界にもどつた安らかさで、聲まで別人のやうになつた。うたひ終つてから娘ははじめて何かに氣づいたやうにぱッと赤い顏をして大きな聲で笑ひ出した。ソバカスのある

顏が無邪氣な美しさに輝いた。

秋山はなんとはなしに涙ぐんだ。遠い昔に忘れてゐたものにめぐりあつたやうな氣がした。そしてそれからしばらくたつてからその女友達の世話で結婚したのだつた。

結婚は彼にも生活者らしい落ち着きを與へた。彼は自分がそんな人並な結婚をし、人並な家庭生活にはいれるものと今が今まで思つてゐなかつた。彼は妻が、彼が持たぬ、あるひは遠い昔に失つてしまつた素直さ、正直さ、素朴さを持つてゐることを有難く思ひ、そのほかのものを望まなかつた。何かにつけて感謝し、つつしむ心が深くなつて行つた。

同時に彼は寂しさを感じた。落ち着きはその半面において夢の喪失であり、世間との妥協でもある。彼は今までのやうに暇さへあれば地方の田舍へ出かけて行くといふこともなくなつて行つた。今まではことわることの多かつた雜文の類までも引き受けて稼いだ。靜かな環境と健康と仕事のこととを考へて、夏頃には東京の郊外から鎌倉へ引越して來た。

彼は春さきに訪ねて、一週間足らずをその家に送つて來た杉原耕造のことを始終思ひ出してゐた。その土地の自然からも、久しぶりで逢つた杉原その人からも、非常に强い印象を與へられて忘れることができなかつた。その年の夏は雨が多かつた。いつもの年よりはずつと涼しかつた。雨の多いことは喜ばれなかつたが、涼しいことは都會の人間によつて何よりも喜ばれた。秋山は杉原が憂ひてゐたことの無慈悲な進行について思はぬわけにはいかなかつた。彼は杉原に時々手

紙を出したが、杉原からの手紙はいつも短かかつた。「秋には是非また來てくれ。君に見てもらはねばならぬ事が起らう。」簡單な手紙のなかで彼はさう書いてゐた。

夏も終りの頃になつて暴風雨が起つた。それは東日本全體にわたつて多かれ少かれ吹き荒れたあらしだつた。朝、風は弱くなつたが雨はまだやまず、庭の木が無殘に折れ、秋草が泥のなかに倒れてゐる姿を見ながら杉原の地方はどうだらうかと思つた。おそらくこれによつてとどめをさされた形ではないかと思ふと悲壯な氣がした。春の杉原の不吉な豫想が的中したといふことはもはや疑へなかつた。時々なほ強く吹きつけて來る風にゆれ動く感じの二階に坐つて秋山は杉原への見舞の手紙を書いた。その少し前から杉原からの音信はとだえてゐた。

かなり經つてから杉原から被害の狀況を知らして來た。冷害によつて彼等の地方が全般的にひどい目にあつてゐるなかにあつて、もつとも少い被害ですんだ自分たちの部落のことも詳しく知らしてよこした。正しい方策の勝利であつた。多大の不安を抱きながらこの春の杉原の說明を聞いた秋山は、科學と信念との勝利をまのあたりに見て感動した。

凶作の秋が深まるにつれて、都會からもいろいろな團體からの視察者といふものが繰り出されて行くやうになつた。

「何のたしにもならぬやうな者たちばかりが來ておしやべりをして行く。この秋から冬へかけての樣子を見に、君、ぜひやつて來てくれ。たのむ。」

いつになく激したところのある杉原からの手紙が來た。

秋山はぜひ行きたい、行かねばならぬと思つた。彼は行くことに義務を感じた。しかも彼の腰は不思議に重かつた。かつてあんなにも輕く腰をあげてどこへでも出て行つた彼が今は容易に立ち上ることができないのである。一週間後に行かう、十日後に行かう、この仕事をすましてからにしよう、と、そんなことを思つて愚圖々々してゐるうちに時はどんどん經つて行つた。年の暮になつては一層出辛くなつてしまつた。仕方がない、年が明けてからにしようと思つて手紙を出したが杉原からは返事がなかつた。

返事がないままに時はさらにすぎた。そしてよほどたつてから秋山はまた手紙を書いた。すると簡單な返事があつて、今こつちへ歸つてゐると言つて、所書きが北海道の鄕里になつてゐた。秋山は何かあつたらしいことを直感した。

秋山はいろいろな場合を想像してみたがわからなかつた。彼は早く訪ねて行かなかつたことを悔いたが及ばなかつた。

そして時はさらに流れた。

二

ある朝、仕事にがからうとして机に向つたところへ妻のひろ子が客が來たことを告げに來た。

「女のお客さんです。」
さう言つて彼女は眼を輝かした。
「妹さんぢやないかしら？　杉原さんておつしやるんだけれど……」
「杉原？」彼はペンをおいて立ち上つた。「若い人かい？」
「ええ。」
ノブではないだらうか？　彼は急いで下へおりて行つた。
玄關に立つてゐるのははたしてノブであつた。彼女はなつかしさうに微笑してだまつて禮をした。彼女は一層娘らしくなつてゐた。白粉氣のない、日に燒けた黑い顏をして、涼しさうな眼が生き生きと輝いてゐた。粗末な縮織の單衣ものを着てゐた。
これは北海道の家から送つて來たものですから、と言つて、手土產の包をひろ子に渡して彼女は上へあがつた。
夏の暑い日であつた。「下の方が涼しくつていい」と言つて秋山は下の座敷へ通した。戸をすつかり明け放すと狹い家のなかを涼しい風がよく吹き通つた。庭の柏の木と柿の木とに蟬がかはるがはる來て暑さうな聲を立てて啼いた。トマトの葉がぐつたりとしをれて赤く熟れた實がことさらに重さうだつた。
坐ると却つて汗が吹き出て來て、ノブはしきりに額のあたりにハンカチをあててゐた。時々ま

ぶしさうに光る空や廣くもない庭の方を見た。ひろ子は朝のうちに庭の井戸のなかにつるして冷しておいた果物を切つて來たりしてしきりに氣をつかつてゐた。彼女もうれしさうであつた。
「靜かなところですわね。」と言つて、ノブは微笑した。「今年の夏はどこへもいらつしやらないのですか？」
「行かう行かうと思つてゐるうちに夏もすぎてしまひさうです。もつともどこへ行かうかと思つていろいろ空想してゐる時が一番樂しいものでしてね。」
「鎌倉へいらしたらどこへもいらつしやる必要はないでせうけれど。」
「いや、ここは夏は濕度が高いもんだから僕みたやうなもののからだにはこたへるんです。秋から春、櫻の咲く頃まではいいですけれどね。」
秋山は杉原がどうしてゐるかといふことを訊かうとしてすぐには訊けずにゐた。彼の部落での生活はどうなつたのであらう。杉原ばかりではなくノブはどうしてゐるのだらう。突然あらはれた彼女の樣子からは、彼女が昨日今日東京へ出て來たものとは思へない。
「この頃おからだのぐあひはどうですか？」
「ええ、有難う。この頃は割合に落ち着いてゐるんです。」
「奧さんでいらつしやいますか？」と、丁度その時臺所の方から來たひろ子にノブは赤くなつて挨拶した。ひろ子も赤くなつて笑ひながら挨拶した。

「わたし、二ヶ月程前から、東京の川島さんのお家の方へお手傳ひに來てゐるのです。子供さんが東京の學校へ來ることになつて、人手がないと言つて頼まれましたものですから。東京へ行つたらこちらへおうかがひするやうにと兄からくれぐれも言はれて來たのですが、ひとの家にゐますとなかなか出にくくつて……」

「兄さんはどうなすつたんですか？」と、秋山は訊いた。

「兄は今、北海道へ歸つて居ります。」

「すつと北海道へ？　青森の部落の方はどうなすつたんですか？」

「青森の方は引き上げました。今年の春、引き上げてしまひました。」

「どういふことだつたんですか？　それは。」

ノブは秋山が部落を訪ねてから後の一年間のことを話しはじめた。

彼女は落ち着いてゐた。その話しぶりはしつかりしてゐて、明快であつた。よく筋道を立てて話をした。秋山はほとんど間に質問をはさんだりすることなく、しまひまで聞いた。聞き終つて、だまつて熱い湯を急須についでのんだ。彼はどんな暑い時でも熱い茶の好きな男であつた。暑い時に熱い茶をのんでふつふつと流れ出てくる汗はむしろ爽快だつた。停滯してゐる悪氣が拂はれるやうな氣がした。その氣持で彼は机に向つて讀んだり書いたりした。

彼はだまつてまた熱い茶を啜つた。彼は胸苦しさを感じてゐた。ノブの話は彼にはよくわかつ

たが、ただひとつわからぬことがあつた。それは杉原が、どうして部落を去つたかといふことであつた。あれほどの杉原が、自分の考へが一時容れられぬといふだけの理由で、あれだけの決心をしてはいつた部落の生活から去るといふことは考へられなかつた。屈辱に堪へていけぬといふやうな彼であらう筈はない。

「それだとしても杉原君はどうして部落を去つたものだらう。」と、秋山は自分自身に尋ねるやうに言つた。

「兄は自分の氣持などはわたしにも餘り言ひませんからわかりません。ただそれまでにはずゐぶんいろいろと考へたやうです。部落の生活にはいつた自分の考へにはまちがつてゐたところがあつた。もう一度はじめからやり直すといふやうなことを言つて居りましたが。」とノブは言つた。

「今はどこにどうしてゐるんです？　家にゐるんですか？」

「しばらく家にゐましたが、今は農場の日雇にやとはれて行つてゐます。秋の收穫どきまでゐて、それがすんだら滿洲へ行くと言つてゐます。」

「滿洲へ？　それはどういふところですか？　ひとりでいきなり行くんですか？　どつかから話があつたんですか？」

「さア、どういふことですか、わたしにもよくわかりませんの。滿洲へ行くといふことは手紙で言つて來たんですから。詳しいことは何も書いてありませんでしたし。何でも滿洲もずつと北の

方のずゐぶんへんぴなところだといふことです。縣營農場だといふことだけは書いてありました。」

滿洲と聞いて秋山にはすぐには受けとれぬものがあつた。杉原の心の推移は彼には少しもわかつてゐない。どのやうな生活がそこで彼を待つてゐるのだらう。

「兄が滿洲へ行くやうでしたら、どのやうなところか存じませんが、わたしもついて行くつもりです。」と、ノブは微笑した。

「兄は秋山さんに、そのうちゆつくり詳しい手紙を書くつもりだけれども、今はまだわざと御無沙汰してゐる。お前からどうぞよろしく申し上げてくれつて、くれぐれも申して居りました。」

もう晝であつた。さつきから臺所でゴトゴト音をさせてゐたひろ子が茶の間にちやぶ臺を据ゑて、その上にいろいろなものをならべはじめた。

「あなた、鎌倉ははじめてでせう？」

「ええ。」

「ぢやあ、御飯がすみましたら、散歩に出ませうね。大して見るところつて、何もありませんけれど。今日あたり海岸は賑やかですわ、きつと。」

「ええ。」

「あなた、今日はゆつくりしていらしていいんでせう？」

「ええ。今日はわたしの公休日ですから。今は子供さん方が避暑に行つてゐるものですから暇なんです。けれどあまりおそくならないうちに歸らなければ。わたしのほかにはばあやさんがひとりゐるきりですから。」

「ぢやあ、ゆつくりしていらつしやいよ。いいでせう。しよつちゆうといふことぢやないんですもの。」と、ひろ子は何やら浮き浮きしてゐた。

三

食事がすむと二人は樂しさうに日傘をならべて、暑い日盛りのなかを外へ出て行つた。

秋山は二階へ上つて來て、ごろりと横になつた。手を頭の上に組んで、眼にしみ入るやうな空の青さをしばらく見てゐたが、やがて起き上つて來て机の前に坐つた。明けた障子窓の向うには、手のとどくやうなところに、大きな柿の木が、二階の屋根をはるかに越す高さで枝をひろげてゐた。厚い艶のある葉は黒光りするほどに繁つて青い小さな甘柿の實が重なりあふほどになつてゐた。葉の間を通つて來る風は涼しかつた。

秋山の坐つてゐるところからまつすぐ向うの丘の上で遊んでゐる子供等の姿は、冬はまばらな枝のすきまから見えるのだが、今は葉の繁みのかげになつてゐて見えなかつた。夏の日の午後のだるいやうな靜けさのなかに甲高いよくとほる子供等の聲だけが寂しくきこえた。

女たちはもう濱べへ着いただらうか。今年の夏は東北も北海道も去年とちがつて順調のやうだ。杉原は今日も大きな鎌で牧場の草を刈つてゐるだらう。まだ若いのに額に刻まれた苦勞のあとの皺にたまつた汗が光つてゐる杉原の顏が眼の前にうかんだ。彼に逢ひたいといふ氣持を强く感じた。

ノブはその日、夜になつてから歸つて行つた。秋山夫婦は驛まで送つて行つた。

「しつかりした、いい娘さんね。わたしお話をしてみてすつかりおどろいた。」と、送つて歸る途でひろ子は言つた。

「話をしたのかい？」

「ええ。」

「どんな話。」

「どんな話つて、いろいろなこと。」と彼女は笑つた。

「ほんたうにわたしもしつかりしなくつちや。」

「急に決心したやうなことを言つて、どうするんだい。」と、秋山も笑つた。

荻窪の方の川島の別邸へ歸つて行つたノブからは葉書で禮狀が來たが、その後は忙しいと見えて訪ねて來なかつた。秋山は杉原からの手紙を心待ちに待つてゐたが手紙は來なかつた。

暑い夏がすぎてセルの肌ざはりが快い季節になつた。秋から冬へかけての鎌倉は言ひやうもな

くよかつた。ことに秋山のやうに寒國に育つたものにとつては、秋がこんなにも長いといふことは驚くべきことであつた。晴れた日にはじつとして家にゐることができなくてうかうかと出あるくことが多かつた。

ある日東京へ用足しにと出て行つたひろ子の歸りがばかにおそかつた。家にゐるのはもつたいないやうな秋空をながめながら、散歩に出ることも出來ずに夜にはいつた。腹もすいていいかげんじりじりしてゐるところへ急ぐ足音がしてひろ子が歸つて來た。

梯子段の下へ來るなり、「只今」と上へ向つて叫んでおいて、そのまま臺所へ駈け込んで行つた。

「ばかにおそいぢやないか。」と言つて、秋山は夕飯の膳に向つた。膳の上には東京の食料品の店から買つて來た出來合の食ひものがならんでゐた。彼はまづさうに食ひはじめた。

「どうもすみません。」と、ひろ子は詫びた。「今日はね、わたし、ちよつと荻窪へ寄つて來たの。

「荻窪つて？」

「ノブさんのところよ。」

彼女はその思ひつきの實行について語ることが樂しいらしく愉快さうに笑つた。

「それで逢へたのかい？」

「逢へることは逢へたけれど、わたしの行つたのは丁度夕御飯の支度にかかる頃だつたでせう。ろくにお話しするひまもなくつてつまらなかつたわ。」
「どうだい。元氣だつたかい？」
「ええ、お元氣でした。今度の休みの日にはぜひおうかがひしたいつて言つてゐました。」
「それで杉原はどうだつて？」
「杉原さんもお元氣ださうです。滿洲行きのことはやめになつたさうです。」
「やめになつた？　それはまたどうして。」
「さあ、どうしてですか。詳しいことは聞きませんでしたけれど。」
「自分の考へでやめたのかい。それとも何か向うの都合でかい。」
「さア……」
「何だ。さういふことが肝腎なことぢやないか。」と、彼は大きな聲を出した。
「何しろ立話で時間がなかつたものだから。けれど、そんな詳しいこと、ノブさんのところへも言つて來てゐないらしかつたわ。」
二三日すると、ノブは秋山の家を訪ねて來た。彼女は相かはらず元氣であつた。秋山は杉原のことを訊いた。滿洲行きはやめにした、またもとの村へ歸る、といふだけの簡單な手紙を受けとつたといふのである。

「自分でやめにしたんでせうか。」
「さア、どうですか。何にも書いてないものですから。」
「それであなたはどうするんですか？」
「兄が歸るといふなら私も一緒に參るつもりです。」と、彼女はきつぱり言つた。「それで二三日うちに一先づ北海道の家へ歸ります。川島さんの家へももう話しておひまをいただきました。」
「ぢやあ、明日にでもうちの方へ來て頂戴。そしてうちから發つて頂戴。ねえ、いいでせう。」
と、ひろ子は熱心に繰り返して言つてゐた。
ノブはその日は忙しいからと言つて早く歸つて行つた。
三日後、ノブは北海道へ向つて發つた。彼女はひろ子が願つた通りに、秋山の家から發つて行つた。ひろ子は一日、ノブを連れて、東京の賑やかな通りを、杉原やノブへの土產物などを買ひにあるきまはつた。日暮れ頃、二人ともげつそりと疲れた顏をして歸つて來た。そんなことには慣れぬ女二人が、貧しいふところを氣にしながら、山のやうな品物の前に、目移りしてうろうろしてゐるやうな恰好が想像されてをかしかつた。
「今日は何を買つて來たんだい？」と言つても、「いいもの」といふやうなことを言つてよろこんでゐた。夕飯の時にも、あれがよかつたかしらん、これがよかつたかしらん、などと話し合つてゐる二人は、樂しげでもあり、美しくもあつた。

發つて行く日、改札口前の人ごみのなかにやや上氣しながら立つてゐるノブを見た時、秋山は、けなげといふ言葉の感じが、こんなにもよくあてはまつて見える場合を知らなかつた。彼女は再び來た兄の生活上の轉機を聞いて急遽駈けつける人なのである。

「私たちが落ち着くことができましたら……兄はどんな風な生活を考へてゐるのかわかりませんけれど、」と、ノブが言つた。「秋山さん、もう一度向うにお出でになりませんか？」

「ええ、行きたいと思つてゐますが……」

「どうぞ、是非、お出で下さいまし。」と、ノブは繰り返して言つた。

「兄さんからはその後詳しいことは言つて來ませんか？」

「ええ、なんにも。」

ノブが發つて行つてしまつたあと、秋山は杉原についていろいろと想像した。彼からの手紙をしきりに待つたが、手紙は來なかつた。

北海道へ歸つたノブからは無事安着の報が來た。そしてそれから一週間ほどたつた時、またノブから手紙が來て、その所書きは去年秋山が訪ねた部落の名であつた。彼女は情のあふれた筆でなつかしさうにしばらくぶりで見る初秋の村の自然と人事を書いてゐた。歸つて來てよかつたと思ふ、この村からはもう離れられぬ思ひがすると書いてゐた。何れ兄から詳しく書く筈、と結んであつた。

秋山は杉原に逢ひたいといふ氣持が益々強く動いて來てゐた。來るといふ手紙はなかなか來なかつた。彼はこの頃重くなつてしまつてゐた腰がやうやく輕くあげられさうな氣がしてゐた。以前よくさうであつたやうに、一本の杖を持ち、リュクサックをかついで、ただひとり飄々と見知らぬ土地の奥へ流れ込んでゆくことに言ひ知れぬたのしさを感じ出して來た。彼の空想力は強く羽ばたきはじめた。

以前よくさうであつたやうに、――しかし形の上では同じでも、今とその頃では氣持の上に徐々に變化が來てゐた。靜けさ、なごやかさ、わびしさのなかに、生の休養を欲するといふ以上のものが、少しづつ動きはじめてゐるやうであつた。

するとある日、彼は一通の厚い封書を受けとつた。受けとつた瞬間、その重さと見おぼえのある上書きの肉太の文字とが彼の心にずつしりと來た。むろんそれは杉原からのものであつた。彼はよろこびにをののく心を感じた。

手紙はペンで書いてもにじまない良質の日本紙に小さな字で書いてあつた。目方が重くなることと嵩ばることとをふせぐためにさういふ紙に書いたのだらう。秋山はたたんだ紙の折り目をのばすと、何枚もある紙をパラパラとめくつてみた。手紙はひまひまに少しづつ書いたものであることがインキの色や字の大きさからもわかつた。

彼は讀みはじめた。

四

「去年の秋から冬へかけて、僕は君が再び僕等の地方へ訪ねて來てくれることを待ち望んでゐた。春に僕は君にその秋の豫想について語つた。その時の僕の心のなかでは、不幸な豫想がはづれてくれればいいといふ氣持と、それが的中してくれればいいといふ全く相反する二つの氣持があつて奇妙にこんぐらがつてゐた。しかし事實は八月が來た時、僕は僕の豫想のものの見事な的中を見なければならなかつた。僕は喜んでいいか悲しんでいいかわからなかつた。

東北の凶作が鳴物入りで宣傳され、社會の同情が求められたり、いろいろな視察團が繰り出して來たりするのを見ながら僕の心ははげしく叫びつづけてゐた。いきどほろしい氣持がしだいに訴へどころのない寂しい氣持に變つて行つた。僕は現代の輕薄の縮圖を毎日見てゐたやうなものだ。しかし彼等の大部分は善意にみちてゐる。善意にみちあふれた不誠實！　僕の訴へどころのない寂しさはさういふところから來てゐた。

その時僕は強く君のことを思つた。あれら視察團のはんらんのなかに、ただひとり君がゐて、君自身の足であるき、君自身の眼で見て、人知れず眞實の言葉を綴つておいてくれることを願つたのだつた。實はある時にはさういふことを希望するほどの心のゆとりもない。眞實の言葉がどれだけ當面の現實を動かしてくれるか。そんな言葉などよりも今すぐ腹の足しになるものの方が

ありがたい。誠實か輕薄かを問はない。拂下米が少しでも多く安く手にはいつた方がいい。救農土木工事の賃銀が少しでも高く、そしてそれの村負擔の率が低い方が有難い。

それが一般のいつはらぬ氣持だ。質實な學者の視察、調査などが、凶作地の當局から冷やかな眼で見られがちなのに、厚顏な政黨者が、その厚顏ぶりを嫌惡されながらちやほやされるのは、彼等によつて當面の救濟が少しでも圓滑に行くことにでもなるかと思ふ心があるからなのだ。僕でさへ、時として心がさういふ方向に傾くこともあるといふことを白狀せざるを得ない。

しかし、それはやはりすべてではない。やがて猛然たる反撥が起る。僕は眞實の言葉を要求する。今すぐには餓ゑをみたす一椀の飯をも約束せぬ眞實の言葉を要求する。眞實の言葉の報いられる日のあることを、言葉を越えた信仰的なものとして確信する。

僕は君に向つて手紙を書いたが、君は來さうに見えてなかなか來ず、たうとう來ずにしまつた。僕はそれを君のためにも非常に殘念に思つた。以前しばしば農村をおとづれた時の君の氣持、―村の何に呼ばれて君が行くかといふことは、單純ではなかつたとしても、そのなかには、たとへていふならば、冬の蠅が、日だまりのぬくみのなかに靜かに翅を休めてゐるといつた、さういふわびしい安らかさを求めるやうな氣持が動いてゐたのではないかと僕は見てゐるのだ。現に君は以前の僕への手紙のなかに、「あきらめとも安心ともつかぬ氣持のなかに、とつぷりとつかせるものが田舍の生活のなかにはある」といふやうな言葉で自分のことを語つてゐたではない

か？

旅はつねにあこがれだ。その時々の旅の氣持はその時々のその人を非常によく語つてゐる。君の書くものが時々僕の眼にもふれることがあつて、さういふ君にあきたらぬものを僕は感じてゐた。あきたらぬといふのは君のさういふ傾きかたがわかりすぎるくらゐわかるために、なんとかして早くそんなところから出て欲しいとねがふ氣持でもあつた。僕は一方において強い同感と、一方においてもどかしいやうな歯がゆいやうな氣持とを同時に感じてゐた。

君が去年の秋から冬へかけて僕等の地方を訪ねるといふことはさういふ君の轉換にとつて何かであつたのではないか。君がそこで見たり聞いたりするものは、君にどう影響するにしろ、それは「わびしい安らぎ」を與へるやうなものではないし、またそれを求める心によつては受け止めかねるものであつたこともたしかなのだ。

君が訪ねて來ようとしてつひに來なかつたのは却つて君自身そこに氣づきはじめてゐたためかも知れない。

五

僕が村を去らねばならなかつた日までのことは、そのいきさつの大體は、すでに妹から聞いてくれたことと思ふ。

僕の不吉な豫想が的中した時、僕は僕が村を去らねばならぬ日の來ることをどうして想像することができただらうか？　豫想の的中を欲する心とおそれる心とがあつてたたかつてゐたとさきにも言つたが、夏が來て、いよいよ、かねがね僕等が指摘し、主張し、それにもとづいて對策を立てたことが正しかつたのだ、といふことが立證された時に、僕はほつとして、がつかりしてしまつたほどであつた。これでおれの立場がなくならずにすんだ、といふ個人的な安心と喜びとが、豫想の的中によつてたくさんの人々が餓ゑねばならぬといふ場合にあつてさへ、先づ最初に胸に來たことを僕は白狀せねばならぬ。が、そればかりではなかつた。僕はこれによつて先づ我々の部落の協力がゆるぎないものになる、といふことを信じて喜んだのであつた。これからは我々のいふことも今までより以上の信頼をもつて聞いてもらへるだらう。守舊派である農民は、今までのやり方をちよつと變へる、といふことについてさへなかなかおいそれとはいはぬものだが、これからは農業技術の改善といふことにも耳を傾けてくれるだらう。小池君の仕事などは非常にやりよくなるだらう。

そしてそれは自分たちの部落だけのことではない。附近の農村全般についていはれることである。彼等は我々の成功をまのあたりに見て、感動を與へられてゐるのだから。

縣當局の僕に對する態度なども變つて來ずにはゐないだらう。

そしてそれらすべては相まつて新しい部落の建設、といふ、僕がこの地にはいつて來た當初か

ら抱いてゐた理想の實現に向つて一歩を押しすすめることになる。有利な條件をつくるといふことになる。

これがもしも豫想がはづれたとして見給へ。すべては今言つたことの正反對になる。僕個人の立場がどうかうなど、そんなことは問題ではないのだ。部落そのものの危機だ。僕等の持つて行き方に内心こころよからず思つてゐるものは一時に起つていろいろなことを言ひだすだらう。部落の協力、結合といふものは失はれる。

我々の部落だけのことならまだいい。小池のあの素晴らしい品種改良上の發見までがとばつちりを食ひ、その眞價を知られずにしまふ——實際はその時がおくれるといふだけのことだが——といふことになつたらじつに大きな損失ではないか。

僕は感謝した。僕は新しい部落の建設のためにいよいよ努めねばならぬとかたく決心した。僕の指導者意識は一段と強まつて行つた。僕は人々からの感謝を當然のやうな顏をして受けてゐた。その僕が追はれねばならぬやうになるなどとは自分でどうして思ふことができたらう。

農民の自分の土地を得たいといふ欲求、新しい生産體制のなかに織り込まれるよりは、古い土地關係のなかに自らを零細農として押しこめることに、むしろ安心と滿足とを得て行かうとする態度。さういふものの、土そのもののやうな根强さを僕は思ひ知らされなければならなかつた。知り盡してゐる筈のことだが、何度行き逢つてもその都度新しい衝撃を受けるのである。

共同經營組合の、「共同」といふことに對しては以前から組合内において難色があつたのだ。「共同」を解消して個人に歸りたいといふ要求を人々はかねがね持つてゐた。それは平常でも總會の時でも、機會さへあればぶすぶすくすぶつてゐた。それについては君が來た時に話したし、今度の新しい事實については妹も話したらう。

僕は、今度の成功によつて、人々はいよいよ組合の必要を感じ、共同體制はより强固に押し進められるだらう、と感じた。ところが多くの農民たちは、成功しても失敗しても組合經營はこれが最後、といふ氣持をはじめから、あの春の頃から持つてゐたのだつた。成功したから今までのやり方をいよいよ强化する、ではなくて、成功した、で、これを丁度いい機會にめいめいに歸らうぢやないか、といふのである。不成功の場合は勿論である。彼等が去年の春、餘り大してぶつぶつもいはず、今までより以上にいはば統制を强化したやり方に、案外おとなしくついて來たといふのには、「今年でこのやり方も最後だ」とさういふ腹があつたからのことなのである。どつちにしても組合經營をつづける氣はなかつたのである。そこのところをよくよく見拔く眼が僕にはなかつた。

意外な、——といつても遲かれ早かれ來るものと豫想はされてゐたことだが——地主の方からの申出では、まだそれほど表面化してゐなかつた問題を一ぺんにはつきりと正面に押し出してしまつた。分配の問題を中心にして不平の聲があがつた。

冷害が克服されたのは共同經營のおかげだといふことを忘れるわけはあるまいと僕は思つてゐた。しかしこんな明瞭なことさへなかなかそんなものではないといふことを知らねばならなかつた。冷害は克服される。これは大したことだとその當座は思ふ。が、それはほんの當座のことだ。少したつうちにこんな日々は當り前だといふ平常の心の方がつよくなつてくる。冷害を克服して、今日々かうしてゐるのだといふ氣持を特別持たなくなつてくる。それはさうだらう。人間は慣れるものだ。それに日々は一向に變りばえもしないのである。冷害を克服したからといつて、それは比較的のことで、むろん平年よりはずつとわるくなつてゐるのである。

僕はここでも、あのいつか君に話した湧谷甚七老人の經驗を思ひ出さぬわけにはいかなかつた。

僕は自然に指導者意識を強めて來てゐたが、多くの人が僕をどう見てゐるかといふことも、かういふ時になつてはじめてはつきりして來たのだつた。それについて僕は氣づいてゐなかつたのではない。僕に反省がなかつたのではない。しかしいよいよそれがはつきりして來て、態度に出してまで示され、口に出してまで言はれてみると、僕は衝撃を受けぬわけにはいかなかつた。これは僕にとつて他の何にもまさる打撃だつた。

彼等にとつて僕は結局は共同經營組合の事務員にすぎぬのである。組合の解散によつて扶持から離れる人間にすぎぬのである。僕が頑固に共同經營を固執してゐるといふことも彼等にはさう

いふ理由によるとしか映らぬのである。

農民と自分との關係がそんなことではならぬといふ考へから、今のこの生活にとびこんで來た僕であつた。そして年數も經た今、昔と全く同じ結果に終らうとは！

僕はしばらくはうちくだかれた人のやうであつた。

さういふ僕を尻目にかけて部落の動きはどんどん進行して行つた。組合解散のための總會はさきの總會から幾らもたたぬうちに開かれた。僕は出席しなかつた。それからはほとんど連日のやうに集會が持たれてゐるやうだつた。僕はひとり取り殘されたものの感を抱きながら、急に何か活氣づいてでも來たやうな部落の空氣を感じてゐた。

ある日細谷が訪ねて來た。さきの總會の日から僕ははじめて逢ふのだ。弱氣な善良な彼は明らかにある勇氣をふるひ起してやつて來たやうに見えた。明日は組合財產を各個人へ拂ひ戻すための集りをする。ほかのこととちがひ、財產に關することだから、君にも是非出てもらはなければ困る、と彼は言つた。僕に關することはすべて君に一任する、あとでとやかく言ひはせぬから、よろしくたのむ、と僕は言つた。

組合財產の積立金や農具等の分配についてはずゐぶんもめたといふことだつた。かつて個人所有として持つてゐたものを組合に提出したものがあるので、拂戻しの時の評價額でもめたのであらう。夜おそくまでも、いつにない爭ひ聲がきこえてゐたといふことだ。

六

幾日もたたぬある日、また細谷が來た。彼に一任したことの報告をしたのち、いよいよ明日は、耕地の一人々々への分配を行ふのだが、君は一體どうするつもりなのか、と言ふのだ。

それを聞いた時、熱いものが思はずぐつと胸にこみあげて來た。僕は言下に、激した聲で、耕地の分配にはあづからなくてもいい。僕は部落を去るつもりだから、と言つてしまつた。

細谷が歸つたあと僕は暗い部屋のなかにひとり茫然としてゐた。ふいに妹が吸り泣きをはじめたのではじめて我にかへつた。僕ははげしく妹を叱りながらはじめて彼等に對するロぎたない罵倒の言葉を吐いた。ロぎたなくののしりながら、早まつたことを言つてしまつたといふ後悔が潮のやうに湧いてくるのを感じた。「仕方がないぢやないか」さうも思つた。

細谷に向つてはつきりさういつてしまつたのは自分で制御することのできない力できつかけに乘つてしまつたやうなものであつた。それまで僕はどうとも心をきめかねてゐたのだ。一方に、自分への反省が強くはたらいてゐた。一方にはまた、彼等への不滿と怒りとがあつた。彼等は結局質がわるい、質がわるくちや仕方がないといふ、諦めた、投げた氣持があつた。

お前が自分できめられずにゐることをきめてやらうといふかのやうに、細谷があらはれたわけである。

耕地分配のための協議は、さきの組合財産の分配の時以上に大へんだつたといふことだ。非常に早く移住してゐたものは、共同經營になる前に自分で開いて耕してゐた耕地があるものだから、それをそつくりそのまま欲しいといひだす。しかし同じ事情にあるものでも、その土地がよくないといふことを知つてゐるものは、前者のやうな主張はしない。次に各戸に均等にわけるか、それとも各戸の現在の耕作能力に從つてわけるかといふことがある。現在の能力などが何の標準になるものか、といふものがあり、家族數の多いものはあくまでも廣い耕地を主張する。さらにどうわけるにしても土地のいいわるいといふことがある。

能力の算定といふことは容易ならぬ困難がともなふので、各戸平均といふことにきまり、方法はくじ引きといふことになつたが、そこに落ち着くまでには大激論のあげくつかみ合ひまでやつたといふことだ。そしてくじ引きの結果、それぞれの土地がきまつたわけだが、その時の一喜一憂のさまといふものは想像される。きまつた結果についてはその場ですぐ苦情が出て、やりなほしを主張するものさへゐたといふことだ。

おそらくこの苦情の絶えることはなからう。年々の耕作期のはじめにはこれが問題になるだらう。年がたちある者に餘裕ができ、あるものが窮乏するならば、それはきつと土地のせゐにされるだらう。

小池が話をききつけてとんで來て、僕に思ひとまるやうに言つてくれた。僕は涙が出るほどあ

りがたかつたか、細谷に言つたことを取り消す氣にはなれなかつた。意地ばかりではなかつた。僕は自信を失つてゐた。それに僕は僕自身の更生を部落の新しい建設、といふ仕事のなかに求めようとしてゐた。ただ部落で農民生活にはいる、農民になる修業をする、といふやうなことは意味がないと思つた。僕には部落の建設について、いろいろな夢がある、もくろみがある。その實現についての可能性が見失はれたところにとどまつてゐるといふことは意味がないと思つた。

僕は多くもない持ちものを小池にあづけ、一時保管してもらふことにして、妹を引きつれ、早々に部落を引きあげた。細谷、ほか二三の人々に、形式的な挨拶のことばだけを殘した。

そろそろ雪も消えかかり、もう少しすると新しい耕作の時がはじまる。共同經營といふ窮屈な枠から脱けて出て、自分の考へで思つたやうなことができる。さういふ自由な喜びを感じてゐるらしい部落の人々をあとに殘して僕は去つた。

僕は北海道の郷里の家へ歸つて來て、しばらくは無意味にくらしてゐた。老いた母や一層無氣力になつた兄を見ることはつらかつた。三十をすぎて家もなさず、あつちへうろうろこつちへうろうろしてゐるやうな僕を家のものたちはあはれむやうに見たが、その眼につめたい光りはなかつた。

ある日、その頃川島の家にたのまれて、手傳ひに行つてゐた妹から、細谷が來たといふことを聞いた。部落の經營方針の根本的な變化について報告し、事後承諾を求め、それにまつはるいろ

いろな問題について相談に來たのだらう。細谷は訪ねては來なかつたし、僕の方からもべつに逢ひには行かなかつた。

川島や原口には挨拶しに行つて逢つたが、べつに立ち入つた話はしなかつた。川島はしきりに氣の毒がり、原口はそんなことははじめからわかり切つてゐたことだといふやうな顏をした。しかし二人は僕に好意を持ち、僕を氣の毒がつた。そして川島の事業のなかで仕事を與へようと言つてくれた。僕は口實をまうけてことわつた。原口が僕にと言つた仕事が、山で、たくさんの荒くれ男だちを使ひこなす現場監督のやうな地位であつたといふことは苦笑ものだつた。いかさま僕はもう背廣を着て、デスクワークにつかはれるといふ人間にはふさはしくはないだらう。僕の肩幅は廣くなつてゐる。手の指は節くれ立つてゐる。皮の靴などめつたにはいたこともなく、土を踏んで來た足は形まで前とは違つて來てゐる。日燒けが生地にまでなつてしまつた顏の、眉目の間には粗野なものがながれてゐる。

しかしさういふものとしても僕はまだ一人前ではない。僕は中途半ぱな自分を感じなければならなかつた。そして自分で自分をさういふ中途半ぱな存在にしたのであつた。

季節のおそい北海道にも農耕の春がおとづれて來た時、僕は秋の收穫時までの約束で、ある農場に住み込みで雇はれて行くことになつた。ここは畑作がおもで、北海道式の農耕の方法や經營を見るには典型的なところである。

しかし僕は何もさういふところを見たり、經驗したりすることで學ばうとしてそこへ行つたのではなかつた。何もせずにゐるといふことはあらゆる意味で苦痛だつた。その苦痛からのがれたかつた。僕のやうなものとしては給料がいいので僕はそこをえらんだのである。

僕が農場へ出稼ぎに行くことになると殆ど同時に妹は川島に頼まれて、東京の川島の家の方へ手傳ひに行くことになつた。妹には、こつちへ歸つて來てから結婚話も起つてゐたのだが、妹は耳を傾けない。僕には妹が僕のことを考へてゐるのだといふことがよくわかるのだ。妹は僕を誰よりも深く愛してゐる。僕が落ち着くのを見屆けぬうちはどこへも行く氣がないのだ。僕の新しい生活にはやがて自分の力を必要とするだらうといふことを彼女は考へてゐるのだ。僕たちはこの頃の新しい家庭にそだつたきやうだいたちのやうにたがひに心のうちをひらいて語り合ふといふやうなこともしないが、妹の心は胸にしみるのである。妹は娘のさかりの三年間を、僕と共に部落の生活のなかにゐた。

僕は過去のことも將來のことも忘れたもののやうに眞黑になつてはたらいた。石狩川の沿岸にひらけた故郷の沃野は廣い溫かな胸をもつて僕を抱いてくれた。たしかに僕は多くの時間、何もかも忘れてゐることが出來た。骨を鳴らす勤勞とさかんな食欲と天使のやうな眠り。經營の一切の責任から自由であるといふ氣樂さもある。たしかにこれは得がたい幸福の一種だ。冬になれば冬になつたでまだ雪山での仕事がある。そこにはまたそこ獨特のつらいが樂しい生活があらう。

そんな渡りもののくらしで終始してみるといふことも亦一興ではないか？　また一興、といふやうな言ひ方をするやうな氣持で自分といふものに對してゐたのだつた。

そこでさうして働いてゐる間に、僕の滿洲行き、といふ話が起つたのである。

七

滿洲行きの話を持ちかけられた時、僕の心は動かぬわけにはいかなかつた。話を持ちかけて來たのは農場主だつた。農場主の弟が、滿洲國の地方廳で主要な地位にゐて、農政、開拓といつた方をつかさどつてゐる。彼の企畫で、拓務省の開拓移民とはまた別に、縣營農場を設立することになつた。すでに土地を相し、農場の責任者もきまり、一部分は人もはいつて開拓に從つてゐる。しかしまだまだ足りぬので、秋までには定員をそろへる豫定で、北海道からも募集したいといふのである。

この農場は、試驗的な意味をもつてゐる。どういふ農耕と經營の方法が土地柄にもつとも適するかといふことを、實地經驗によつて確認し、標準的なタイプを見つけ出し、つくり出さうといふのである。今までにさういふ施設がないわけではないが、さういふところは、いつのまにか實驗室的になつてしまつて、實際の百姓の生活からはなれてしまふかたむきがある。その點を是正したい。目的が元來さういふのだから、舊套になじまず、全員の創意を尊重して、ずゐぶん思